

ラストーン

～失われた都より～

4

segakiyui

1.忘却の湖の伝説

ざぶん、と重い水音が響いて、ユーノは振り向いた。

光にきらきらと水面を輝かせている湖の岸で、一人の少女が深く頭を垂れて祈っている。表情は見えないが、俯いた沈鬱な気配から何か胸に想いを抱えているようだ。

その側で、もう一人別の少女が胸の前に掲げていた白い布包みをゆっくりと差し上げた。太陽に顔を向けて目を伏せる、頬に水飛沫とは違うものが伝い落ちてどきりとする。小さくつぶやき、やがてきつく唇を結んだと思うと、頭上に両手を差し上げて、一気に布包みを湖の方へ放り投げる。

ざぶんっ……。

その音に俯いていた少女も顔を上げ、湖の彼方を見た。涙に濡れた頬を晒しながら、もう一人の少女も湖を見つめる。

厳しく寂しい顔だった。切なく潤んだ瞳だった。

けれど波打つ布が藍色の湖の奥深くに消えて行く頃には、二人とももう泣いてはいなかった。静かに身を翻して湖の畔から立ち去っていく。

(あんな風に)

ユーノもまた、自分の全てを捨てるつもりだった、今までの自分だったなら。

ガズラには、国の中央部にあたる盆地に大きな湖がある。

湖は忘却の湖と呼ばれ、数多くの旅人が様々な想いとそれにまつわる物を捨てにやってくる。

湖面は吹き渡る風に今穏やかなさざ波をたてている。

陽光が照らすのは、ほんの表層のみ、じっと見つめていると、夜更けて頭上に広がる星空のように底知れぬ遠さに意識が吸い込まれそうになる。

心弱い者ならば、ついふらふらと引き寄せられてしまうだろうが、いざ水に足先をつけて気づくはずだ、その穏やかさとはほど遠い凍るような冷たさに、この湖は命あるものの棲まう場所ではないのだと。

清冽な水。

清すぎて、命の曖昧さや柔らかさを受け入れない。

だからこそ、人は自分の抱え切れないものを捨てる場所として、ここを選ぶのかもしれない。

湖の周囲は馬で一日以上かかる広さ、深さもその底にどこかへ繋がる洞窟があるという噂で、どれほどのものを沈めても埋まることも澱むこともなく、ただただ藍色に静まり返っているだけだと聞く。

その底を確かめようという物好きはいない、自分のその身を捨てるのでなければ。ここは満たされない哀しみを捨てる場所、哀しみを捨てに来て、新たな哀しみを拾い上げるようなことは誰もしない。

再びざぶん、と音が響く。煌めいたのは宝玉か。投げ捨てた男は忌まわしようにそれを睨みつけ、激しい勢いで湖の畔の群れをなして張られた天幕（カサン）の方へ戻っていく。

岸は湖と対照的に色鮮やかな木立で飾られている。日差しを浴びてすくすく育った若い木々、それを守るような濃い緑の樹木は伸びる方向を教えるように天を目指している。

それらの木立に寄り添うように、あちらこちらに白や灰色や淡く黄色がかった天幕（カサン）が張られていた。

巡礼のようにこの湖を訪ねてきて、心決まるまで滞在し、捨て去るものを捨て去り、残すものをしっかり抱えて、人々は湖の畔でかりそめの集落でひとときの縁を紡いでいる。

(ずっと一人で生きていくつもりだった)

ユーノは静かに湖の彼方を眺めながら思う。

(私の運命を、誰も分かち合えるはずがないと)

沈黙を課せられ、夜を一人駆ける自分に、仲間などいるはずがないと。

(でも)

目を閉じる。

天幕（カサン）では昼の支度が始まったのだろう、煙の匂いと香ばしい肉の薫りが漂ってくる。ユーノ達の天幕（カサン）でも、イルファが大騒ぎをしながらさつきとめた獲物を料理にかかっているだろう。

(それでも)

微かに微笑む。

きっと最後の時は一人なのだろう。

きっとぎりぎりの時は一人で行くしかないのだろう。

それでも、それまでの間はあの仲間と一緒に居られる。イルファの腹減ったの叫びに呆れ、レスファートがまとわりついてくる温かさにほっとし、アシャの笑顔に見惚れ、世界はまだ明るくて美しいと信じていられる。

（今は、皆と）

そのためならば、アシャへの気持ちを封じることなど容易いことだ。

「うん、平気」

仲間として一緒に笑えるのだから。

同じ天幕（カサン）に寝起きし、悪夢にうなされて飛び起きても、そこに愛しい人の顔を見つけることができるのだから。

たとえその手が絶対届かないとしても。

「何が届かないって？」

「うあ！」

甘い吐息をついて目を開いた目の前に、アシャが正面から覗き込んでいて思わず仰け反った。

「何してるんだ！」

「何って」

何度も呼んだぞ？

きょとんと首を傾げられて、一瞬見惚れた。

（可愛い...）

きらきら眩い黄金の髪が頬にかかって、見開いた紫水晶の瞳が無邪気に瞬いている。大人の男にしては間抜けた表情、それがみっともなく見えずに可愛いと見えてしまうあたり、天然の媚とでも言えばいいのか。

「よ、呼んだ？」

「イルファが肉を食い切るのを、レスファートが必死に止めてる」

「げ」

くいくい、とたてた親指で示されて、確かにたき火の側でじたばたしている二人を見て取った。

「何を見てた？」

アシャはひよいとユーノの視線の先を振り向いた。

「.....ああ.....巡礼者か」

「捨てちゃうんだね、ああやって」

「そうだな」

捨てなくては動けなくなったんだろう。

ぼつりとつぶやくアシャの声が微かに厳しい色を帯びた。

「動けなくなった？」

「それまでに繋がっていたものを切らなくては、次の世界に踏み込めない、とか」

アシャが微かに目を細める。

「捨て切れるはずも、ないがな」

「うん...」

（あなたも何かを捨てようとしたんだろうか）

表情をなくしたアシャの横顔にふと思った。

たとえば過去。たとえば絆。

（それでも）

そのアシャが今ここに、ユーノ達と一緒に居てくれる、それを幸運と喜ぶべきなのだろう。

「.....ところで」

ひよい、とアシャが唐突に振り返って、ユーノは見惚れていた視線をどきまぎと逸らせた。

「なに？」

「この間の約束だがな」

「約束？」

薄く笑った相手がじっと見つめているのが自分の唇だと気づいて、一気に顔が熱くなった。

「忘れてないだろうな？」

「忘れてない」

「キスを返してくれるんだよな？」

「わかってる」

しゃべり鳥（ライノ）の鳥籠から脱出する際、アシャはユーノにキスをしている。それはユーノを鳥籠から解放する条件だったのだが、おそらくは本意ではないその口づけに改めて後日礼を伝えたところ、アシャは一瞬ひどく妙な表情になって黙り込んだ。

まるで力の限り罵倒したいのだが、罵倒する内容を不意に忘れてしまったと言いたげな顔。

あるいはまた何か自分が獲得すべき権利を主張しようとしたのだが、それよりもっと大きく旨味のある条件を思いついたと言いたげな顔。

「なるほど」

アシャは真面目な表情で頷いて続けたものだ。

「確かに、あれは俺にとって、厳しい状況だった」

だよ、と頷き返しながら、ずきずき傷んだ胸の苦痛を知られまいと笑い返したユーノに、

「やはり特別報酬は必要だよな」

「報酬？」

戸惑ってアシャの胸元を見れば、そこにはレアナの託したセレドの紋章ペンダントの膨らみがある。いずれレアナとアシャが結ばれれば、そのペンダントは二人の子供に渡されるものでもあるし、今とありあえずの報酬ということでその紋章をアシャに託してもいい、いやそれでは逆にアシャの身に危険が及ぶか。

そんなことをぐるぐる考えていたユーノは、続いたことばを聞き損ねた。

「え？」

「だから同じものでいいぞ、と」

「.....はい？」

同じもの？

紋章のことはまだ口にしていない。同じものとは一体。

「だから」

キスでいいぞ。

「へ...？ えええっ」

ちょっと待った。

にこにこしながら、何なら今返してくれてもいい、と両腕を差し伸べようとする相手に頭が加熱して混乱する。

「待って、待ってよ、いや...待てってこら！」

「ん？」

「ん、じゃねえだろ！」

それって何がどう報酬になるんだ？ っつか、大体なんでキスのお返しがキスになる？

「知らないのか」

他の国では罪を犯した場合、それと同じ刑罰が下るところがあるんだぞ。

アシャが平然と語り始めてますます戸惑う。

「で？」

「足を傷つけたら足を傷つける。人を殴ったら、同じように殴られる」

「だから？」

「俺はお前を救うためにキスした」

だから、お前が俺にキスしてくれればいいじゃないか。

「なるほど.....って、違うっ！」

何か変だ、どうも違うぞ、と慌てて身体を引いた。

「おかしいだろ、それは！」

「どこがおかしい？」

さっきと同じぐらい無邪気な顔できょとんと首を傾げるアシャの瞳は、それでも妙に嬉しそうに光っていて。

「だって、き、キスは！」

こっちからしても、そっちからしても同じことじゃないか！

「違う」

アシャは重々しく首を振って見せた。

「喧嘩でもどっちが先に殴ったというのがあるだろう？」

「う、うん」

「戦でもきっかけがどちらかというのは大きな問題だ」

「う……うん……？」

キスというのは戦と同じ種類として論じていいのか？

「キスだって同じだ」

いつの間にか壁際に追い詰められていて、ひたりと添ってきたアシャの顔を見上げる状態だと気づいた時には、視界いっぱいにアシャしかなかった。

「どちらが仕掛けたかが大事だ」

「え……と…」

必死に頭を働かせているうちに、緩やかに垂れてくる金色の髪に視野が狭められる。まばゆくて目を閉じそうになったその時に、はっと気づく。

「待ったああ！」

「何だ」

「今の状態じゃ、アシャが仕掛けてるじゃないか！」

「……それもそうだな」

「それもそうだな？」

ひょいと体を引いた相手が顎に手を当て少し首を捻って、にこりと笑う。

「じゃあ、お前から仕掛けてくれるんだな？」

「ああ……って？ ええええーっ！」

「じゃあ俺はそれを楽しみにしていよう」

くるりと身を翻した相手に嵌められたと気づいた時はもう遅かった。

「今でもいいぞ？」

はっと我に返るとアシャが間近に来ていた。

「人影もなくなったしな」

確かに周囲の者は一通り昼食に入っただろう。

「いや、でも、その、今は、あの」

「ん？」

うろたえるユーノに、アシャがにこやかに距離を詰めようとした矢先、

「ユーノおおおお！」

レスファートの悲鳴が響いた。

「待てよ、レス！」

「やだあああ、これユーノのだもんっ！」

振り向くと、どうやら肉の塊らしいものを抱えて全力で走ってくるレスファートと、いいじゃないか、もう一口食わせろよ、と叫びながら追いかけてくるイルファの姿がある。

「イルファのばかああああ！！！」

「あのままじゃ、レスが泣いちゃう」

ほっとしてユーノはアシャの側から離れた。

「そう、だな」

ちっ、と短い舌打ちの後、同じように向きを変えたアシャが、小さくぼそりとイルファのばか、とつぶやいた気がしたが、それは聞かなかったことにした。

「伝説？」

冷えてくる夜気の中、温かな火の側で、ユーノは手にしていたスプーンの腕から顔を上げた。炎の光がゆらゆらと揺れ、滑らかな頬に浮かんだ表情を隠す。

「過去を葬る場所、以外の？」

「ああ」

アシャは腕の中身をゆっくり飲み込み、頷いた。

「聞いたことないな、そんな話」

「ぼくも」

レスファートがユーノにお代わりを頼みながら首を傾げる。

「熱いからね」

「うん」

こくんと頷いて、中身をふうふう吹き冷まししながら、レスファートはアシャに視線で続きを促す。「もともとは、その伝説から『忘却の湖』と呼ばれるようになったんだがな」

アシャは苦笑して話し始めた。

いつの頃のことかはわからない。

とにかく遥か昔、ラズーンがこの世を治め始めた頃、この湖の近くには小さな村があった。

村には血気盛んな若長と彼を愛する娘が居た。

ある日、若長は不思議な噂を聞いた。湖に得体の知れない魔物が棲みついたというのだ。

魔物は夜な夜な子どもの夢に現れ安らかな眠りを奪うばかりではなく、病む者の心を騒がせ湖に引きずり込むようで、やがて村の中でも行方知れずになる者が現れた。

村人の不安をなだめようと、若長は娘が止めるのも聞かずに湖に出かけ、真実を明らかにすると短剣を口に銜えて飛び込み、魔物が棲むという深い藍の水底へ身を沈めて行った。

娘は心配で心配でたまらない。湖の側に立ち尽くして若長の帰りを待ったが、待てど暮らせど若長は戻らない。

「死んじゃったの？」

レスファートがごくん、と急いでスープを飲み込んで尋ねた。熱かったのだろう、はふ、と舌を出しながらアシャの返事を待っている。

アシャは、旅の夜空に昔語りをする老人のように、ゆっくり重々しく頷いてみせた。

「しばらくたって、娘が居ても立ってもいられずに、ついに湖の岸から水に足先を浸した時、わらわらと底から湧き上がった黒いものが目に留まった。驚いて娘が足を引いた瞬間、それは見る見る広がって水面を真紅に染めた」

見たとたん、娘は湖に身を躍らせた。若長の運命を嘆いて身を投じたとも、最後まで諦め切れずに探そうとしたとも伝えられるが、翌日、娘は湖の岸に打ち上げられて倒れていた。幸い命は別状なく、数日たって回復したのだが。

「娘は全てを忘れ去っていた」

レスファートは瞬きもせずに聞き入っている。

「自分が何をしようとしていたのか、若長がどうなったのかも、いやここがどこで、自分が何者かも、全て忘れてしまった娘を見て、人々は湖の神が娘の哀れな願いを聞き届けて、悲しみごと心を持ち去ったのだろうと噂した」

後に、娘は湖の神に仕える巫女として、ほとりに粗末な小屋を建て、余生をそこで過ごしたと言う。

「ふうん……」

「あ」

ユーノが何かに呼ばれたようにひょいと首を伸ばした。

「そう言えば、向こうの端の方に白い建物があったね。石造りの結構大きな建物だったけど、飾りも何もない、質素な感じの……あれがそう？」

「ああそうだ」

面白いだろう？

「伝説だと言われているのに、その伝説のままに湖の神に仕える巫女達が居て、ああやって暮らしている」

「じゃあ、ほんとの話？ そこにいる人は、みんな、すきな人が死んじゃったの？ ここには今も魔物がいるの？」

レスファートが、不安そうな顔になって、少し離れた入り江をひたひたと打つ波の音に改めて気づいたように、そろそろとユーノの側へすり寄る。

「そうとは限らないんじゃないかな」

ユーノが残りのスープを勢いよく口に流し込み、ごちそうさま、と唇を舐めた。

「自分で神さまに仕えたくて来た人もいるんじゃない？」

「じゃあ、その神さまがすきななの？」

「うーん、そうともいえるか……」

(だといいんだがな)

レスファートに首を傾げてみせるユーノの横顔に、アシャは眉を寄せ、気取られないように腕を傾けた。

実はサマルカンドがもたらした情報では、この辺りもぼつぼつラズーン支配下（ロダ）を離れ始めている地域があるらしい。湖周囲は野営が一番いいし、ユーノがここへ立ち寄ることを強く望んでいたこともある、見た感じではそういう気配もなかったから天幕（カサン）を張ったが、注意するに越

したことはない。

『たとえ……絶対届かないとしても』

ふいとアシヤの耳の奥に、ユーノの柔らかな声が響いた。

湖のほとりで、まっすぐ水面を見つめながら、風にまぎれるようにつぶやいた声。

呼びかけたアシヤの声にも全く気づかないほどの深い物思い、振り返った黒い瞳がどぎまぎと揺れながら微かに潤んでいたのを見逃すアシヤでもない。

（誰を想っていた？）

アシヤの声も聞こえぬほど強く、誰の面影を追っていたのか。

焼け付いた胸を冷やすもの、そう考えて唇に目を留めたのも、聞こえなかった部分でその相手の名前を呼んだのではないかと苛立ったせいで。

我ながら何をやっている、そう突っ込みつつ迫ったのはあっさりかわされてしまったが。

（まあ約束は取り付けたのだし）

ユーノのことだ、そうそう違えることもないだろう。それはそれでこの先の楽しみにすればいい。

（問題はどのあたりまで支配下（ロダ）を離れているか、だな）

それによって、ガズラをどのように通っていくか考えなくてはならない。

（できるだけ安全に）

できるだけユーノが危険なことに巻き込まれないような道を。

頭の中で次々とラズーンへの道を幾通りも組み合わせ始めたアシヤに、

「イルファは？」

レスファートが口を動かしつつ尋ねてきた。

「あ？ ああ、薪を集めに行ったはずだが」

「にしては遅いよね」

ちょっと見てくる、レスファートを頼む。

言い捨てて、はやユーノは剣を手に火の側を離れていく。

気にはなったが、周囲にこれだけ人間が野営している、めったなこともあるまいと目を戻すと、レスファートが再び空になった腕を片手に鍋の方へ手を伸ばしていた。

「お代わりか」

「うん、昼間イルファとやりあって、すっかりおなかへった」

「ふうん？ ………とこで何杯目だ？」

よそってやって差し出された小さな両手に乗せながら問う。

「四杯目？」

「そんなに食べたのか？」

珍しい、と眉を上げると、相手は澄ました顔で腕にさじを突っ込みながら続けた。

「食べられるときに食べとかなくちゃ」

「おーい、イルファ！」

ユーノは剣の柄に軽く手をかけながら、重く沈んだ闇に向かって呼びかけた。

暑くもなく寒くもない。野営の連中も眠りにについているのだろう、ときおり、虫（シエト）の微かなりりん、という音が響くだけの静かな夜だ。

自分の声がひどく無作法なものに聞こえて、ユーノは少し怯んだ。

風が柔らかく木々の葉を鳴らせていく。ジェブの樹もあるのだろうか、うねるような音律が風の音の合間に聞こえてくる。ヒスパの、針のように尖った葉の先に縫い込まれた月が、灰白い光を樹間に投げていた。

（まさかどこかで殺られてるなんてことはないだろうけど）

「イールファーツ！」

声を抑えながらも呼ばれる。

ふいに、激しい羽音がして、ユーノは背後を振り返った。

月光を浴びて真っ白に輝く姿が、ユーノをめがけて木立の隙をすり抜けるように舞い降りてくる。

「サマル」

伸ばしたユーノの左腕、サマルカンド用に皮を小手から肘にかけて巻き付けた部分に、巨大なクフィラはふわりと降りた。体躯に比して信じられないほどの軽さ、覗き込むようにユーノに向かって首を傾げる額には紅の十字、肉眼で物を見るのと同時に、その十字で熱源として生き物の存在を感知していると言われるクフィラに、闇は意味がない。

「一人になるなって言うのか？」

「クエアウ」

どこか甘い鳴き声を響かせて、サマルカンドがゆっくりと肩へと移動してくる。

「大丈夫だよ」

「クエツ」

「わかったわかった」

冗談じゃないと言いたげな叫びにユーノは苦笑する。元の主に似ているのか、太古生物にしてはズいぶん人懐っこくておせっかいだ。

「耳元で騒ぐなよ」

笑って嗜めると、サマルカンドは首を竦めて胸毛を軽く膨らませた。いささか不満らしい。

「けれど、一体どこ行っちゃったんだか……イールファー！」

周囲を気遣いながら、もう一度呼ぶ。

再び風が渡って、ジェブの樹の葉ずれの音がした。サマルカンドの気配に怯えて静かになっていた虫（シエト）が思い出したように声を重ねるのが、木々の下を漂っていく……と。

「……しっ」

近くの茂みに人が動いてユーノは立ち止まった。肩のサマルカンドが臨戦態勢になるのを軽く抑え、ゆっくりと剣を抜き放つ。まさかこんなところでおっぴじめるとは思えないが、一瞬の遅れが命取りになる、特にこんな木立の中では。

木の陰に身を潜めて闇を透かし見たユーノは、危うく声を上げかけ、かろうじて制した。

（レアナ姉さま?!）

目の前の木の間を、薄青の衣に身を包んだ娘が、どこか虚ろな歩き方で縫って行く、その顔立ちがレアナそっくりなのだ。白く透ける肌に淡く色づいた唇、前方を見つめる瞳こそレアナより遥かに濃い焦茶色だが、全体のふわりと柔らかな感じはレアナそのものと言っていい。

思わず娘を見送って数歩踏み出し、相手が茫洋としつつも森の中を通る一本の細い道を辿っているのに気づいた。

（どこへ行く……こんな夜更けに？）

細い道は近づかなければ認識できないほど下草に覆われているが、その先は途切れることなく湖近くのあの白い建物に続いているようだ。

少し迷って、ユーノはレアナの幻に引きずられるように娘の後をつけ始めた。

娘の足下はよく見れば素足に近い有様、森の中を通るので服や指先が枝などに引っ掛かるのだが、それに構うことなく前へ前へと歩を進めるから、時に服の裾が鋭い音をたてて裂けたり、指が枝を折り葉を引き千切ったりしているのだが、娘は全く気にしていない。

（どうも妙な雰囲気だな）

高熱に浮かされて彷徨い歩いているには足下が確かすぎるし、所用があつて急いでいるにしては緊張感一つない虚ろな表情が気にかかる。

やがて娘の前に現れた白い建物は、数本の支柱に囲まれた方形の造りのものだった。

入り口の前に花々の咲き乱れる庭園がある。その花の中で、数人の娘が木立の中を抜けていく目の前の娘を待っていたかのようにじっとこちらを見つめて立っている。

気づいてユーノは歩みを遅らせ、再び木の陰に身を隠した。

ユーノに気づくこともない娘達は、建物にたどりついた娘と同じように一様に静かな表情のない顔だ。歓迎するでもなく拒むでもなく、けれど薄青の衣の娘はまるでそこが自分の家であるかのように、しずしずと入り口に向かって進んでいく。

（巫女達？ にしては、気配が禍々しい）

まるで意思のない人形、それもあまり性質のよくないものを溜め込むために使われそうな、生きた人形…。

「マノーダ！」

いきなり、切羽詰まった男の叫び声が闇を裂いた。

はっとしたように森を抜けた娘が立ち止まると、ユーノの側の木の間から誰かが飛び出すのがほとんど同時だった。

「マノーダ！ 行っちゃいけない!!」

飛び出して来た男は、叫びながら立ち止まった娘の方へ突進していく。獲物も何も持っていない、ただただ両手を広げて駆け寄る様は無我夢中、周囲のものなど見えていないのだろう。

娘がぎごちなく振り返り、微かに唇を震わせる。虚ろな顔に仄かな熱が戻った。

「ナスト…」

娘のつぶやきに、男はほっとしたように駆け寄る速度を緩めた。

「気がついたんだな！ マノーダ!!」

気がついた？

ユーノは眉を寄せた。

（じゃあ、今までのあの動きは）

「マノーダ!!」

喜びの声を上げて、ナストと呼ばれた男は一気に走り寄ってマノーダに抱きつこうとし、マノーダも夢から醒めたようにナストの方へ手を差し伸べて戻ろうとする。

そのとたん、庭で待っていた娘達の間に暗い気配がのたうった。先頭に居た娘の一人が斜め後の娘を振り返る。背後から頷きながら、一人の娘が月光の中へ姿を見せる。

「マノーダ……ここよ」

悲しげに囁いた声に、はっとしたマノーダが振り返った。

「アレノ姉さま！」

「こっちへきて……マノーダ」

「は…い」

呼びかけられたマノーダが一瞬くしゃりと顔を歪めたが、すぐにまた元の無表情な顔に戻り、ナストに背を向ける。

「アレノ！」

ナストが猛々しい声で叫んだ。

「マノーダを連れて行くな！ 僕にはわかっているんだ！ おまえ達は湖の神に仕える巫女なんかじゃない、おまえ達は……っ」

先頭の娘の背後に一段の暗い気配、それが見る見る凝り固まって伸び上がる。

（『運命（リメイン）』!）

ユーノは息を呑んだ。

（殺気!）

「危ないっ！」

叫んで木陰から躍り出す、同時にクフィラが肩から一気に舞い上がり、ユーノの意志そのままに、マノーダを追おうとした娘達の前に飛び出した。その背後から間髪入れずに走り込むユーノに、先頭の娘が掴みかかってくる。視界の端で、茫然としていたナストがマノーダを腕に抱こうとしたが、一歩早くアレノがマノーダの手を握って建物の中へ駆け込むのが見えた。

「マノーダあ！」

ナストの声に建物の扉にすがりついたマノーダが泣きそうになって呼び返す。

「ナストーっっ！」

だが悲痛な叫びの直後に激しく手を引きはがされ、数人の娘と一緒に扉の中へ引きずり込まれた。

「マノー……！」

後から建物に飛び込もうとしたナストを押しよけるように、飛び出してきた娘達が次々に剣を閃かせて襲ってきた。とても巫女などではない、どう見てもナストを細切れにしてもいいと考えている容赦ない剣捌きだ。

「うわああっ」

「ナストッ！」

ユーノは手近の娘の鳩尾に一発入れて振り返った。不審そうな相手に続けて、

「一人で手に負える数じゃない、引こう！」

「しかし、マノーダが…っ」

「出直さなきゃ無理だよ！」

打ち込んでくる剣を弾き、小手や腕を手刀で叩いて武器を落とし、ユーノは必要以上に娘を傷つけないように必死に攻防しながらナストの側へ寄る。相手もわけがわからないまま、娘を引き倒したり逃げたりしながら近づいてくる。

「あ、あな、あなたは！」

「詳しいことは後で！」

行くよ、と娘達の剣を立て続けに跳ね上げ、身を翻す。追撃をサマルカンドが遮ってくれるのに、森の小道を駆け戻る、その矢先、右手の樹間にぼうっと突っ立っているイルファを見た。

「あんなところで……何してんだ、イルファの奴……サマルッ！」

「クエアアアッ！」

娘達から舞い戻ったサマルカンドが主からの攻撃命令に嬉々としてイルファに突進した。爪に目玉を引っかけられそうになる寸前、気づいたイルファが悲鳴を上げる。

「う、うわあああっつ、ばかつ、よせっ！ こらあっ！」

「クエウイ！」

サマルカンドは容赦なくイルファをユーノ達の方へ追い立ててくる。それでようやく、相手はこちらに気づいたらしい、顔を引き攣らせてユーノに喚いた。

「ユーノっ！ お前、何の恨みがあってっつ！ 早く止めろあいつを止めろ今すぐ止めろ、俺は食べ物じゃねえっつ！」

「嫌なら早く走れ！」

「お前えええっつっ！」

重量のある竜車が爆走する勢いであっという間にイルファがユーノ達を追い抜かしていく。その頭を楽しそうにサマルカンドがついつい、ついつい、と嘴で突く。

「どわああああ！」

イルファが悲鳴を上げながら、まっしぐらに天幕（カサン）の方へ突っ走る後を、ユーノは苦笑しながら追いかけた。

「あ……れ……あれ……クフィラ……??」

ユーノの側で早くも息が上がりつつあるナストが目丸く見開く。

「太古……生物……なんで…こんなところに……今……あなたあれに……」

はあはあと喘ぎながら瞬きする。

「ひょっとして……飼って…る……？」

「ああ、まあ」

ちろりとみやったナストの不安そうな顔に、あ、そうか、あれも一般的には怪物の範疇じゃないか、と気づいた。

（しまった、怖がっちゃったかな）

せっかく自分を助けてくれたのが、実はまた別の種類の悪者達だったと考えているのかもしれない。

「でも…あの、大丈夫だよ、いいやつだし、大人しいし…」

にっこり笑って多少弁解を試みたが、

「ぎゃあああ」

「大人しい……」

つつくん、と背中を突かれたイルファが飛び上がるのに、ナストが暗い顔になった。

「確かにはじめは、湖の神に仕えたいという巫女志願の娘だけが出向いていたんです」

ナストはユーノ達の天幕（カサン）の外、焚き火の側に腰を降ろし、熱いスープで一息入れた後ようよう話し出した。

彼はこの近くの村に住んでいる。マノーダと呼んだ娘とは許嫁同士だ、と前置きしてから話を進める。

「ところが、マノーダの姉であるアレノが巫女に志願した頃から、あの神殿について妙な噂が立つようになりました。巫女達は湖の神ではなく、何か別のものに仕えている、と。そして、月の明るい夜には何人かの巫女が湖に入って行って、そのまま戻らなくなる、とも。当然、巫女の志願者は著しく減りました……ところが」

ナストは茶色の瞳を落ち着かなげに彷徨させた。

「ある夜から、村の娘が夜中に一人二人と姿を消すようになったんです。親も恋人も夫も兄弟も、何もかもを捨てて出て行ってしまい、それっきり二度と帰ってきません。一人の男がたまたま家を出て

いく娘を見つけて後を追ひ、神殿へ入っていくこと、そこに見覚えのある行方不明になった娘達も居ることを突き止めました」

眉を不安そうに顰める。

「なぜなのかわかりませんが、神殿の夢を数回見て四、五日すると、その娘が姿を消すんです。娘本人が巫女志願など全く考えていなくても、家を出て行く時は一様に湖の神にお仕えするのが自分の使命だと言い張り、止める家族を恐ろしいほどの力で振り切って出て行ってしまいます」

「何かの術かな？」

ユーノのことばにアシャは沈黙を守る。

「僕はマノダから神殿の夢を見たとき打ち明けられて、それから毎晩、彼女を見張っていたんですが、今夜に限ってつい眠ってしまっていて…」

気がつけば彼女は既に家から出て行ってしまっていました、とナストは悔しそうに唇を噛んだ。

「それで、慌てて神殿へ駆けつけた、と」

「はい」

「その娘を助けるにしても、明日だな……今夜はあっちも警戒しているし、守りも固いだろう」

アシャの声にナストは俯く。自分でもそうするしかないとわかっているようだ。それでも今すぐに神殿に飛び込みたいのを、必死に堪えているのは握りしめたこぶしの白さでよくわかる。

「とにかく、今夜はボクらの天幕（カサン）で休んだら？ 明日になったら、もう一度考えようよ」

「……すみません」

ナストはのろのろと俯いたまま立ち上がり、勧められた天幕（カサン）の寝床へと姿を消した。

「……で？」

アシャはナストの後ろ姿をじっと見守るユーノを促す。

「でって……なに？」

「言いたいことはわかってるな？」

「……わかっている」

旅は厳しい。こんなところで他人に手を貸しているほどの時間も手間もない。

「でも……」

脳裏を過るマノダの横顔に懐かしい顔が重なっているのだろう、ユーノは思い詰めた表情で唇をつぐむ。

「ユーノ、俺は」

もうお前を危険に晒したくない、わざわざこんなところで危ない目に好んで突っ込まなくても十分に危険は満ちあふれている、そうアシャが説得しようとした矢先、

「美しかった…」

イルファはほわああと深い吐息をはいてつぶやいた。

「は？」

「イルファ？」

「んー？ 何だ？」

にっこり、とイルファは微笑んで振り返った。剣士そのもの、山賊とも間違えられる無精髭の伸びたいかつい野獣顔が溶けそうに甘い笑みを浮かべているのは、とびきり甘そうな焼き菓子が魔物（パルーク）の姿に酷似して作られているようだ。手を出したくはないが、怖いもの見たさというのものもある。

「…どうした？」

一瞬身を引いたユーノがおそるおそる尋ねる。

「見た」

「見た？」

「至上の美を」

「……しじょうの、び」

イルファはどうしたんだろう、そう言いたげにユーノがアシャを振り返った。

「おい…」

何となく察しがついたアシャが軽くいなそうとする。

「夜というのはいろいろなものが美しく見える時間でもあってだな」

「時間なんか関係ない」

イルファが『甘く優しく』笑みを深める。

「俺は天上に駆け上がったのかと思ったよ」

「おもった、よ...」

イルファのことばじゃないよね、うん。

ユーノが引き攣りながら、もう一步踏み込む。

「で、何が」

「あの中に居たじゃないか、金色の髪の天空の聖女が」

恋は虫（シエト）を叫ばせる、だったかな、それとも平原竜（タロ）を歌わせる、だったかな。

アシャが溜め息まじりにあれやこれやの格言を思い出そうとしている間に、相変わらず理由がわからないと言う顔でユーノが問いを繰り返す。

「天空の聖女？ 確かにあそこは神殿だけど、そんな美女居たかなあ.....金髪なんだね？」

「違うぞ、儂い織物のような艶やかな黄金の...」

「わかったわかった」

果てしなく贅辞を並べようとするイルファを制したアシャの努力を無にするように、ユーノが瞬きする。

「ひょっとして、それって、後から出てきた人？」

「そうだ、後から至高の微笑で現れた...」

「なんだ、アレノじゃないか」

謎がわかってほっとするユーノの肩をがばりと身を起こしたイルファが驚掴みにする。

「アレノ！ アレノというのか、あの人はい！」

「何言ってるんだよ、今話してたろ、マノーダのお姉さんで」

「美しい人は名前も素晴らしいのだなあ...」

「聞いてねえ.....」

ふわふわとした様子で立ち上がるイルファをユーノは茫然と見上げる。がっちりした筋肉質の体がまるでそのまま宙に漂っていきそうな頼りなさでイルファは天幕（カサン）の方へゆらゆら歩く。

「おい、イルファ、今夜の火の番は」

「火の番？ おお、そうとも、アレノのことを思う俺の魂の火は今やごうごうと燃え盛ってこの闇を焼き焦がしつつ世界を圧倒していくのだ、おお神々もご照覧あれ...」

「い...いるふあ...」

神々は笑い死にそうになっているんじゃないだろうか、とつぶやいたユーノに苦笑するアシャを、相手が振り返る。

「どうしちゃったんだろう、イルファ」

夕方の肉がまずかったのかな。

「違うさ」

「違う？」

でもあれは明らかにおかしいよ、いつものイルファじゃない。

不安そうに眉を寄せるユーノに、こいつもたいがい鈍感だ、とアシャは呆れた。

「一目惚れというやつだ」

「ひとめぼれ...？」

「見た瞬間に恋に落ちた」

「そんなことって.....あ」

まさかイルファが、そういう顔で苦笑しかけたユーノが何を思い出したのか、ふと瞳を伏せる。

「金の.....髪...か」

零れた声があやふやで頼りない。

「そう...か」

（おい、待て）

じりっと胸の内に不愉快に響いたその声にアシャは自分の眉が引き攣ったのを感じる。

（ひょっとして、こいつが気にかけているのは金髪の野郎か？）

まさかユーノもそいつに一目惚れしたとか、そういう落ちじゃないだろうな。

（.....俺だって、一応は金髪だぞ）

胸の中でつい反論する。

（それなりに、まあ今まで結構褒められたこともある程度には、金髪だぞ）

「...ちっ」

何を煮え詰まったことを考えている。

「ユーノ」

「ん？」

「できれば関わり合いにならないほうがいい。ここには」

半分は、自分の気持ちを逸らそうとして、アシャは話題を変えた。

「『運命（リマイン）』が居る？」

「遭遇したのか」

脅しがさざらりと流されたばかりか、状況がもっと切羽詰まってる気づいて、アシャは顔を引き締めた。

「さっき見た。巫女達の背後に居るのは『運命（リマイン）』だよ」

「そうか...」

ならば今更逃げようとしても無理だな。

ぐったりしながらアシャは溜め息をつく。

接触してしまったのなら、もう『運命（リマイン）』側にアシャの動きも知れ渡っているだろう。逃げを打って背中から襲われるよりは、隙を見て倒す方法を考える方がまだましだ。

「それに、マノーダはレアナ姉さまに似てるんだ、アシャ」

焚き火の側なのに、急に体が冷えたと言いたげに膝を抱えて丸くなり、ひょいと首を傾げてユーノは微笑んだ。

「放っておけないでしょ？」

「.....？」

意味が取れずに瞬きして相手を見返すと、ユーノは見上げていた目をついと逸らせた。

「レアナ姉さまに似てる人なら幸せになってほしい.....そうじゃない？」

「.....わかる気はするが...」

「なっしてほしいよ、誰かのためにも」

アシャの戸惑った口調を微かに咎めるようにユーノはつぶやいた。

「姉さまを大事に想う人のためにも、さ」

レアナを大事に想う家族。そして、ユーノ。

「.....ああ、そうだな」

レアナに似た相手の幸福をユーノが願うなら、その願いを叶えてやりたい。

「そうだな」

けれどお前はいいのか？

「何が？」

「また危険に晒される」

「.....そんなこと」

くす、とユーノは笑った。

「.....ずっと前のことだけど、皇宮に出入りしていた商人が居た」

ぱちりと焚き火が跳ねる。

「酒宴に招かれ、冗談のつもりだったらしい、こう言った。『みなさま、美しい方ばかり、特に二番目の方には一風変わった美しさがおありだ。皇妃さまの血というより、異国の高貴な生まれのようにも見えますな。皇も時に楽しまれたことがあるというのは我々下々と同じですが、後々まで面倒を見られるために引き取られる、その懐の深さをご尊敬いたしますよ』」

「！」

「ボクは5歳ぐらいだったかな、商人が酔っぱらった真っ赤な顔をして言った意味の半分もわからなかったけれど、一つだけわかったことがあった。そうか、ボクはここにいちゃおかしいってことなんだな、って」

「...ユーノ...」

淡々とした声、表情も穏やか、けれど、それを聞いた瞬間にユーノの胸を貫いた傷みが、時間を越えて今自分の胸を貫いた気がして、アシャは思わず唸った。

「ばかな…」

「納得したよ、ボクは」

「…」

「そうか、だからボクだけみつともないのかって。それならよくわかる。だからボクだけ出来損ないなんだって」

ほっとしたかもしれないな、出来損ないでも当然なんだって。

「でも、次の瞬間、姉さまが」

真っ青になって立ち上がったレアナは父よりも母よりも早く反撃に出た。ユーノを抱きかかえ、商人を振り向き、一声高く叫んだのだ、無礼者、と。

「『あなたは私の大事な妹を傷つけました、以後二度と顔を見せないでください』って、そりゃあ凄い剣幕で。商人は平謝りするし、父様も母様もうろたえるし……………ボクは姉さまに抱きかかえられてわんわん泣いた。後にも先にも、みんなの前であそこまで泣いたのはそれぐらいだよ」

凄いやね、姉さま。

くすくすとユーノは笑った。

「キスしてくれて、ボクが落ち着くまで、あなたは私の妹です、そう慰め続けてくれてさ……だからボクは姉さまが悲しむ顔なんて見たくない、絶対に」

(皮肉なものだ)

アシャは優しく微笑むユーノをじっと見つめた。

心ない大人のことばに傷付いたユーノを庇ったのはレアナだけ、だからユーノはレアナを守るために何度も一人死地に向かい、何度も一人で苦痛を堪える、大事な相手を悲しませるまいと。レアナが優しくれば優しいほど、ユーノは繰り返し自分を危険に追い詰める。

(どうやってやればいい?)

アシャの心は疼く。

(どうすれば、こいつを守ってやれる?)

危険を好むわけではない、むしろ幸福と安寧を求めての闘いならば、傷つき倒れるのも本望だとも？

(ばかな)

そんな理由など納得できるわけがない。

「どう？」

「え？」

物思いに沈んでいてユーノが問いかけているのに気づかず、アシャは我に返った。

「惚れ直した？」

「え…あ、ああ」

惚れ直す？ 目の前の、厳しい運命に一人涼やかに笑って立つ、黒い瞳の少女にか？

「そう、だな、もちろん」

応えてすぐにはとした。相手が一瞬淡い泣きそうな色を浮かべた気がして。

「そうだろ、レアナ姉さま、いざとなると強いんだ」

軽く目をつぶって見せる、ユーノの瞳が潤んでいるように見える。

「だから、きっと十分やっていけるよ」

「やっていける？」

何をだ、そう確認しようとして、ユーノを説得できそうな理由に気づく。

「そうだ、さっきお前はレアナを大事に想う人のためにも、と言ったな？」

大事に想う人とは誰だ？

アシャとしては、それは自分や家族、そう答えが返ってくると予想して、それならばレアナもまた自分を大事に想ってくれる相手の無事と幸福を願うはず、そう話を続け、ユーノの無謀さを戒めようと思ったのだが。

「え…っ…」

見る見るユーノが頬を染めて立ち上がり、呆気にとられた。

「あ、そ、そのそれつまり、うん、レアナ姉さまを大事に想う人のためにもレアナ姉さまに幸せになってほしいってことは、その人にももちろん幸せになってほしいわけで、それはつまりその人をレアナ姉さまも大事に想ってるから、その人が幸せならレアナ姉さまも幸せだろうってことだから…っ」

「あ...ああ...？」

なんだ、そういう理屈はわかっているんじゃないか、とほっとしかけたアシャはユーノがじりじりと後じさりするのに不安になる。

（あれ？）

何かおかしいのか？ ひょっとしてどこか食い違っているのか？

「あーと、その」

「う、うん？」

「つまりその人って言うのは誰なんだ？」

「うっ」

「それはつまり」

お前や家族ってことだよな？

そう続けかけたのだが、ユーノがふいにぐっと苦しそうに口を噤んだのに思わず黙った。

「.....アシャには、わからないよ」

「...は？」

「アシャには絶対わからないっ」

ぎらりと睨み据えてきた目には明らかに怒りがある。

「火の番、頼むね、ボク寝るからっ！」

疲れたから、うんとうーんと疲れたもう話したくないほど疲れたからっつ。

言い訳がましく、それでも力一杯訴えられて、アシャには反論は許されない。

「あ、ああ」

最後にもう一度睨みつけ、あげくに放置されるように身を翻して、取りつく島も無く天幕（カサン）に入っていくユーノを、アシャは呆気にとられて見送った。

翌日。

「反対だ」

「アシャ」

「俺は絶対反対だ」

ナストからあれこれ話を聞き出しつつ、マノーダ奪回作戦をたてていたユーノに、アシャはきっぱり拒否を示した。

「だって」

神殿には女性しか入れないんだよ？

説得しようとするユーノにますますアシャの顔が険しくなる。

「だからといって」

ユーノが女装して潜り込む、というのは。

「.....そりゃ、アシャほど美人にはならないけどさ」

他に潜り込めそうな人間がいらないんだから仕方ないだろ。

むくれてみせても、ユーノは切なくなる。

（そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか）

レアナや他の女性のように綺麗にならないのは重々知っている。それでも、神殿内部は巫女達の居る小部屋も多く複雑で、そのどこにマノーダやアレノが居るのかはつきりしない。誰かが入り込んで探るしかない。

「それでどうするんだ？」

イルファがナストが持ってきた絵図面を覗き込む。神殿の元々の建物はナストの父親が設計したものだそうで、古い図面ではあるけれど、それほど改築はされていないだろうとのことだった。

「すみません」

アシャの不快そうな顔にナストはしょんぼりする。

「僕が不甲斐ないから、あなた達に迷惑をかけてしまって.....」

「いいって。どうしたんだよ、昨日の元気は」

「あの時はもう夢中で」

ナストはいよいよ身を縮めた。

「とにかく今わかっているのは、この部屋から奥へ数部屋入った所.....この辺りに新しい巫女達が居る部屋があるらしくて、マノーダはたぶんそこに居るんだろうということだけ。守りがどうなっているのか全くわからない。外での見張りはないけど、入り口に近づくとすぐに中から人が出てくるとい
うから、見張られているのは確かだと思う」

ユーノは絵図を指で辿っていく。

「ただこの辺りにも小部屋が十二、三ある。この中からマノーダを探し出さなくちゃならない」

「アレノもだ！」

イルファが唸った。

「アレノも助け出さなくてはならん！ あんな美しい人が冷たい石の神殿に住むなど、俺には耐えられん！」

「.....恋は偉大だねえ...」

ユーノは苦笑した。

「イルファが詩人になっちゃった」

「詩人...」

ナストが承服しかねる顔でイルファを眺めた。

「とにかくボクが女装して潜り込み、隙ができれば手引きして皆を呼ぶ、それから」

「ぼくだよね」

にこにこレスファートが笑った。

「ぼくがマノーダをさがすんだよね！」

「危険なことはさせたくないけど」

くしゃりと銀髪を撫でた。

「レスファートの感覚に頼るのが一番だし」

「うん！」

レスファートは嬉しくてたまらないように笑みを深める。

「日が落ちたら作戦開始、それまでは体力温存だ」

「で、これを」

ナストが差し出したのは薄緑のドレス、銀色の枝と白い羽根で作られた繊細な髪飾りもある。

「僕の姉のものですが」

「ありがとう、じゃあお借り.....おい」

受け取ろうとしたユーノの手からアシャが二つとも攫っていくのに呆気にとられた。

「女に見えればいいんだな」

掴んだままアシャが立ち上がり、冷ややかな目でナストを見下ろす。

「え、ええ、あの...？」

「俺がやる」

「え」

ナストが笑顔のまま固まった。

なんだなんだ、ついに女装に目覚めたのか、といつもなら突っ込むはずのイルファはぼうっとあらぬ方を眺めているので、仕方なしにユーノが応対する。

「何だよ、ドレス着てみたくなかったの？」

「.....」

無言でじろりと睨まれて、あれ、とユーノも引き攣った。

「そう思うなら勝手に思え」

「え、でも、いや、あのですね、ユーノさんならまだしも、あなたはちょっと華奢さとか脆さとかがいささか足りないかもしれないけど」

「ユーノだと華奢で脆そうで可愛いつて言うのか」

アシャがゆっくり目を細めてナストをねめつけた。紫の瞳がどうにも不穏な光を漂わせているが、ユーノにも当のナストにも意味がわからない。

「あの？」

「あーえーと、うん、アシャは女装すると、確かに女に見えるんだよ、ナスト」

引きそうにないと見て、ユーノは苦笑した。

「ってか、たぶんナストが知ってるどんな女の人より綺麗だとは思う」

「アレノを外せ！」

「マノーダ以外ですね」

イルファとナストが同時に受けて、はいはい、とユーノは手を振った。
「ごめん、失言、はいその通り。とにかく、アシャが女装すると、少なくともボクよりうんと美人にはなる」
「.....それじゃあ、お願いしても...?」
「そんな気持ちを抱いてるやつに見せてたまるか」
「は？」
ぼそりとアシャが唸って、ナストが再び固まり、ユーノは戸惑った。
「アシャ、なんか話が食い違ってるような気がする」
(なんでこんなに女装したがつってるんだろう?)
ユーノは眉を寄せる。
(『山賊(コール)』のやつで嵌まったのかな、それとも)
ユーノの女装なんて見たくないほどみっともない、ということだろうか。
そうかもしれない、とちよつと落ち込みかけたユーノに、アシャはとにかく水浴びして整えてくる、と身を翻した。

「ユーノの女装だと？」
アシャはぼやきつつ、湖の側で衣服を脱ぎ捨てる。
そんなもの、どうして他の男に見せてやらなくちゃならない。
少し離れたところから、今もまた湖に何かを投げ捨てようとした娘が、アシャに気づいてはっとした顔でそれを胸元に抱え込んだ。そのまま棒を飲み込んだように立ち竦んだ相手を振り向き、にっこり笑ってやると見る見る真っ赤になるのも道理、アシャは既に下着一つの半裸姿だ。そちらを眺めたまま下着に手をかけ、なおも笑みを深めながら首を傾げてみせると、娘はきや、と小さな声を上げながら慌てて走り去っていく。
ドレスを派手に蹴散らしていくその後ろ姿を微笑のまま見送って、相手が木立の向こうへ消えるとアシャは一気に下着も脱ぎ落とした。がしがしと乱暴に頭をかきむしりながら、一転して笑みを消し、そのまま湖の中へ入っていく。
足先を浸した水は痺れるほど冷たい。構わずに踏み込み、少し先の岩棚からざぶりと前方に倒れ込むように水に体を沈める。急速に体温が奪われる、目を閉じたまま息を止めて沈み込む、まるで石像になったように。まもなく、とん、と軽く当たった水底は、手を伸ばしたあたりでもう一段深くなる。
薄く目を開けて固まった腕を伸ばし、岩棚を掴んで下を覗き込むと、水は色を深めながら底へ底へと緩やかに流れ落ちていく。じっとしているつもりなのに、じわじわと底の砂とともに引き攫われていきそうな感覚、冷えて透明な水が重さを増して水底で流れを作っているのが、水面からは見えないから、知らずに水遊びをしようとした者が時に引き込まれて還れなくなるのはそのせいだ。
ゆらめく金髪、見かけよりは筋肉のついた腕に煌めく陽光、ゆっくり瞬きしていると物憂い疲れが体を覆う。

少し迷ったが、そのままぐいと身を翻して戻り、凍えた手足を無理矢理引き起こして立ち上がった。
「.....」
ざぶざぶと体を滑って零れ落ちる水、光を跳ねる肩に濡れた髪が張り付いている。数々の闘いを繰り返してきた割りにはあまり傷が残っていない滑らかな胸から腹の上を、数々の美女が愛しんでくれたものだが。

「あいつは.....無理だな」
ユーノが触れてくれるまでにはどれぐらいの時間が必要なのだろう。
それとも、そんな機会など永遠に来ないのだろうか。
自分の体をじっくり見下ろしながら、そこに寄り添うユーノを思い浮かべてみる。見上げてくる顔は上気しているだろう、呼吸を喘がせて甘い瞳になっているだろう、だが、そこから先の想像がどうにも繋がらない。
所詮この体も、所謂『ラズーン』においては。
「.....ちっ」
アシャは小さく舌打ちして向きを変えた。太陽を浴びて体を乾かしながら、岸辺へと歩く。

ユーノとの先を思いつけない理由はわかっている。今まで出会ったどんな女性とも違う振る舞いをするだろう、そう思うからだ。

ユーノはアシャの美貌に揺らがない。アシャの視線に蕩けない。アシャの囁きに身を委ねてこない。普通なら甘やかに優しく誘えば堕ちるところを、逆に詰られ攻撃されかねない。距離をとって別れをほのめかせば切り捨てられかねない。友人のままで付き合おうとすれば、本当にそれだけで終わってしまいかねない。

風に吹かれて熱を奪われていくのに、それに齒向かうように体が熱を帯びていく。

欲しい。

もっと近い場所で強い絆で深い関係を結びたい。

だが、しかし。

アシャはゆっくり俯いた。

それは、為していいことだろうか。

「為していいこと、か」

女性との関係をこんな風に考えたのは初めてかもしれない、とアシャは思った。

自分の容姿に魅かれてくる女は後を断たない。それを時には利用もしたし、支えられてきたこともある。けれど、そこに一生をかけて繋がっていたいという願いを重ねなかったのは、それらがアシャの外見によるものだとわかっているからだ。そして、アシャの外見は普通の人間と同じではない、成り立つところからが既に違う。ある意味では魅かれても当然、計算ずくの幻に憧れているだけだとわかっているからだ。

それを今まで納得はしなくても諦観はしていたつもりだったが、ユーノと向き合ってその存在を欲しいと思う今、急に自分の拠って立つ意味が気になる。

「そうか...」

ユーノはおそらく特殊な『銀の王族』で、それはこの二百年祭のために準備された存在なのだ。ユーノがその苦痛を受け取るのは『ラズーン』の切なる祈りを満たすため、その祈りとアシャは直結している。言わば、ユーノの苦難はアシャの存在を支えるものでもある。

だからこそ、ユーノを苦しめたくないと思う気持ちはアシャに自分の存在の意味を疑わせ問いかけさせる。捨て去ったはずの場所や忘れたはずの地位を甦らせる。世界を担う男が、世界を支える小さな一片である少女に、確かにその価値があるものなのかと問われているのだ。

「だから俺はこれほど...」

ユーノの苦痛が苦しく、それに値しないかもしれないと自分で自分を追い詰めてしまうのか。

「なるほどな」

では、このユーノへの思いは本当に彼女を望んでのものだろうか、それとも自分の価値を脅かされないために負い目を軽くしようとしている、それだけのものだろうか。

「.....」

ゆっくり濡れた髪をかきあげた瞬間、ふ、と側の茂みでうろたえて引く気配がした。

「誰だ！」

誰何と同時に岸辺に放置した衣服と短剣を掴み、羽織りながら飛びかかる。

さっきの少女かそれとも好き者のうっとうしい野郎どもか。

苛立った気持ちそのままに、茂みの中へ消え去ろうとする相手の手首を握って、一気に引き倒してのしかかり。

「っ、あ！」

「...え...？」

体の下に倒れていたのは大きく目を見開いたユーノだった。

「遅いですね」

ナストの不安そうな声に、そうだね、と応じてユーノは湖の方向を眺めた。

「やっぱり無理なんじゃ...」

「大丈夫だって.....でも、ちょっと見てくるね」

「はい...」

ナストに笑ってユーノは湖に向かう。

「アシャーっ？」

呼んでみたが返事はない。

「どこへ行ったんだろ」

きよろきよろ周囲を見回していると、ふいに慌てた様子でばたばたと走ってくる娘に出くわした。顔は真っ赤、それでも気になる様子で何度も湖の方を振り返っている。

「っ！」

振り向いた矢先、ユーノと視線があって、娘はなおも赤くなった。

「？」

「あ、あの、私、あの、『ラズーン』の神が降りられたのかと」

それだけ慌ただしくつぶやいて、また急ぎ足に立ち去っていく。

「『ラズーン』の神……？……ああ」

ひょっとしてそれは、と思い当たった。

初めてアシャを見たとき、あの煌めく瞳を見たとき、ユーノも思った、『ラズーン』の性別のない神とはこういう存在なのではないかと。

娘の駆けてきた方向に向かっていくと、そこは湖の岸辺に向かって胸近くまで細長い草が茂っている。微かに道がついているのは、何度もここを通う者がいるということ、ひょっとすると湖に何かを捨て去る決まった場所にでもなっているのかもしれない。

ゆっくり草波をかき分け、どうにかこうにか湖の端に顔を出せる、そうほっとして踏み出そうとしたとたん、ざぶりと水を跳ねて起き上がった姿があった。

金色の髪に水滴が光を放って砕け散る。きららかな日差しを集めて眩い飛沫を艶やかな肩から零れ落とす、その整った体つきはまるで特別に作られた彫像のようだ。水に体温を奪われたのか、微かに緊張していた肌が陽光を浴びてみるみるふわりと緩む気配は甘やかで美しい。一瞬何かを考えるように俯いていたが、

「ちっ」

鋭い舌打ちをしてどんどん岸辺へ歩いてくる、その姿は一糸まとわぬ全裸で。

「わ…」

まずい、と思ったのに、体がじんと痺れたような感覚で動けなくなった。

濡れた髪が雫を滴らせて揺れる。瞬きしている睫毛からも水滴は落ちる。微かに開いた口は何かをつぶやいているが、次第に赤みを取り戻していく唇は蕾から花開く鮮やかな花卉を思わせる。無駄がないのにしっかりと存在感のある胸板、そのまま引き絞られるような曲線を辿れば張りつめた腹と大胆に動く脚があって。

「……つつ」

体が熱くなってユーノは唇を噛んで必死に顔を背けた。ここにいちやいけない、そう意識ではわかっているのに、体が震えて言うことを聞かない。

（バカっ、動けっ）

泣きそうになって何とか力が抜けた体を引き起こして逃げようとした矢先、

「誰だ！」

「！」

舌打ちよりもきつい声が飛んできたと思う間もなく、立ち上がりかけた右手を掴まれ、振りほどく間もなく一気に引き出され押し倒された。

「っ、あ！」

どすっ、と体の上に重くて熱い衝撃、目を見開いて見上げればそこに呆気にとられたアシャの顔がある。

右手を掴まれているだけではない、いつの間にか喉もとに突きつけられた短剣、しかも左手と体はアシャの膝と脚で目一杯地面に張りつけられていて。

（動けない）

アシャがこちらの気配に始めから気づいていたとは思えない。少なくとも湖の中では裸で、最も無防備だったはずなのに、今自由を奪われ命の瀬戸際に断たされているのは、明らかにユーノだ。

（普通の反応速度じゃない）

だが、ぞくりと震えてしまったのはそれだけではない、まだ半分濡れたままのアシャが体に巻き付けているのは上着一枚、前も碌にあわせていないと気づいたからだ。

「ユーノ...」

「ユーノ、じゃないだろっ！」

自分の格好のきわどさに自覚がないらしく、きょんとした顔のアシャに怒鳴った。

「どけっっ！」

「え？」

「どけったらどけっっ！ あんまり遅いんで見に来てやったら、なんだよいきなりこれはっっ！」

こうなったら強気に出たものが勝ちだ。とにかくこの居たたまれない状況を何とかしなくてはならない。

「あ、ああ、悪い、てつきり俺は」

アシャが苦笑しながら剣を外して体を起こしかけ。

「.....」

そのままユーノを地面に張りつけたまま見下ろしてきた。

「.....何やってんだ、さっさとどけよ、重いだろ、アシャ...っ！」

「水浴びしてたんだよな...だから」

「だからっ」

「すまん、お前まで濡れたみたいだ」

つぶやきつつ、剣だけを片付け、再びゆっくり体を降ろしてくる。

「アシャ...」

「ほら...」

ぼた、とアシャの髪から滴った雫が、ユーノの唇に落ちたのは、故意かそれとも偶然か。

「唇も」

濡れたから。

「拭わないと、な」

「あ...」

囁く声は低くて優しい。そのまま睫毛を伏せて近づいてくる顔、柔らかな熱がじんわりと体を包んでくるのにユーノは飲み込まれそうになる。アシャが軽く口を開いてユーノの強張った唇に落ちた水滴を吸い取ろうとするように顔を寄せてくる、次の瞬間、ぼさり、と仮にあわせていただけの上着がはだけた。

「わあっ」

「っ」

悲鳴を上げたのはユーノ、一瞬怯んだアシャの下で体を捻り、顔を腕で覆って叫ぶ。

「バカっ、変態っ、露出狂っ！」

「悪いつ」

力の限り詰られて、思わずアシャがユーノの上から飛び退いた。

「さっさと服着ろよっ、品性とか恥じらいっていうのはないのかよっっ！」

無言で渡されたドレスを手に、アシャが近くの木立へ飛び込むまで、ユーノは轟く胸を抱えて必死に踞る。

（熱い、苦しい、息が、詰まりそう）

「ばかっ！」

ばかばかばかばかばか！！

叫び続けて熱を逃がさないと、体が揺れた一瞬にめまいがしそうになる。

「.....おい.....」

やがて溜め息まじりの声が背後で響いた。

「悪かったって.....。そのあたりで許してくれ」

「...ったく、いいかげんにしろよな、大体自覚ってもの...が.....」

振り向いて、ユーノはまたことばを失った。

『ラズーン』におわす神は性別を持たないという。

あの娘がそれと見まがったのも不思議はない、薄緑の薄物仕立ての衣をまとい、金髪を羽飾りでまとめ、今の騒ぎのせいだろうか、戸惑ったような表情で苦笑しているアシャの姿は、どこから見ても艶やかな女性だ。その表情の中に関く鋭さが微笑をあやうげに見せる。細めた紫の瞳は揺らめくようにユーノの視線を捕らえてしまう。

「どうだ、これで？」

低く掠れた声も女性が誘惑して耳をくすぐる響きに聞こえる、まこと、神々はこの男に性別を越え

ることを意図したとしか思えない。

「あいかわらず」

綺麗な男だ。

綺麗で艶やかで華やかで。

その相手の側に自分を並べて切なくなった。

似合うわけがない、今も、そしてこれからも。

アシャに似合うのはきっと。

きっと、この姿の側でもやはり同じぐらい光を放つだろう女性で。

セレドに居ても世界にその噂が響く、皇女レアナ、その人ぐらいで。

「.....女っばいよな！」

服の汚れを払い、くすくす笑って保証した。

「大丈夫、どこからどう見ても女に見える！ ナストがきっと驚くよ」

アシャなら脱がされかけても女で通るかも。

「.....ふうん」

てっきり囁みついてくるかと思った相手が目を細めて腕を組んだ。

「なるほど」

「なるほど？」

「じゃあ、今なら不自然じゃないな？」

「は？」

「俺は女だし、お前は男だろ？」

「え？」

「ちょうどいい」

薄笑いを浮かべてずいずいとアシャが近寄ってきた。

「しゃべり鳥（ライノ）の時のキスを返してもらうか」

「え...っ」

思わぬ突っ込みにユーノは凍った。

「ん？ 何だ？ お前は剣士だよな？ ちゃんとした剣士が約束を違えるのか？」

「う」

「ひどいわ」

ふいにアシャは悲しげな表情で両頬に指を伸ばした掌をあてて見せた。肩を寄せ、身を竦め、そうすると男として華奢ではあるがそれなりに筋肉質の体が、一回り小さく見える。

「ユーノったら、そんなに私が嫌いなのか？」

「く...」

気持ち悪い、とはねつけてしまえば、どれほど楽か。

大嫌いだと叫べるなら、どんなにすっきりするか。

（ああ、くそ）

いっそイルファに女装させておけば、好き放題にけなせたものを。回し蹴り一つぐらいお見舞いできたものを。

「名だたるセレドのユーナ・セレディス皇女ともあろう方が、しがない旅人との口約束だからって...」

「アシャ！」

いい加減にしろ。

唸ると相手はそのままの格好でくすり、と目を微笑ませた。

「で？」

「してやる。座れ」

「座れ？」

「.....このままじゃ無理だろ」

じろりと相手をねめつける。どれほど女装が似合ったところで、どれほど絶世の美女に見えたって、アシャの方が歴然と背が高い。

「ああなるほど」

アシャはにこやかに微笑んでいそいそと近づいてきた。こぶしを握ってわなわな震えているユーノの前に、片膝をついて腰を落とし、

「はい、どうぞ」

嫣然とユーノを見上げれば、遠く離れた場所でこそこそとうらやましげに見ていく男も居て。

「.....はあ.....」

溜め息をついてがちっとアシャの両肩を掴んだ。

「おい...」

「何」

「いや、もうちょっと優しくしてくれても」

「不満だって？」

相手の両肩を押さえつけるように睨みつければ、アシャはふいと瞳を和らげる。

「.....いや.....ま...いいか」

「十分だろ」

で。

「目ぐらい閉じろ」

「閉じるなど言わなかったか？」

「は？.....あ」

それが出会った時のことを揶揄したのだと気づいて、ユーノはこのまま相手の肩を掴んでがくがく揺さぶりたくなった。

「あ.....しや.....」

「すまんすまん、悪かった悪かった」

ぎりっ、と歯を鳴らす音を響かせれば、ちっとも悪かったと思っていない口調で謝って、アシャはますます楽しげだ。

「じゃあ、どうぞ」

ゆっくり目を閉じて軽く上向くアシャを見下ろし、ユーノは改めてしみじみと見惚れる。

長い睫毛、滑らかそうな肌、唇は紅もさしていないのに仄かに明るくて柔らかそうだ。両肩を掴んだ手が緊張に震えるのを堪えながら、そっと目を伏せ口を寄せていく。

（いいんだろうか、いいんだよね）

これは約束だ、求められた支払いだ、ユーノが向けた渴望ではない、ユーノが奪っていくのではない、差し出されて、ただ受け取ればいいだけの。

（きっとレアナ姉さまは）

こうして幾度もアシャから、愛しい相手への恭順として差し出される唇を受け取るのだろう。当然のように、自然なふうに、ユーノみたいにぎごちなくなく、消えてしまいたいほどの困惑ではなく、ただただ当たり前のこととして。

（二度とはない）

ここでキスを返してしまえば、きっと二度とこんな機会はない。

（逃げ、たら）

今は無理だと逃げればどうだろう、いつかまた、違う場所で違う形で、誰も傷つけないままに近い場所に立つことができるのではないか、今のままのユーノでも。

今にも唇が触れあいそうな位置でユーノはごくりと唾を飲み込んだ。

（でも）

ふいに脳裏を掠めたのは、闇に蠢く敵の気配。

（違う意味で二度とはないかも）

たとえば今夜の作戦で、万が一生き延びられなくなったとき、後悔しないか、最後の機会を自分で手放したことを。

（ならば、このままで）

触れ合うことなく、けれど離れることなく、この距離で、誰より近い場所で居たい、せめてレアナとの婚姻を見届けるまで。

「.....ユーノ.....？」

動かないユーノに業を煮やしたのか、アシャは囁いて目を開いた。太陽の光に眩げに揺れる、鮮やかな紫色の乱舞、金色の睫毛に光が躍る、瞬きしながらきらきらと弾く瞳が、子どものように頼りなく見上げてくる。

「キスを...」

低い声が響いた。

「俺に.....キスを」

「.....」

ねだられて、引き寄せられて、堕ちるように落ち込むように、全ての理性を手放してユーノは相手

の頬を包む。満足そうに綻ぶ相手の唇に応じて、吐息から先に届かせた、その瞬間。

「アシャーっ！ ユーノーっ！ どこにいるーっ！」

響き渡る蛮声。

「こうしてる間にもアレノがどんなひどい目にあっているかわからんだぞーっ、おいーっ！」

瞬時に目が覚めた。慌てて両手を放して飛び退く。唇に感じていた温もりが一気に冷めて、ユーノは全身熱くなった。

「わ...っ、わたし...っ」

「.....おい」

「い、イルファ、が！」

イルファが呼んでるよ、うんっ！

「おい、待て、その前に.....！」

ひきつった顔のアシャがうろたえた顔で立ち上がろうとして、はっとしたように湖を見る。

「何？」

ただならぬ様子でユーノも急いで視線を転じた。

水面が視界に入った時、ふいに尖った波が盛り上がったように見えて、数歩湖へ歩み寄る。覗き込もうとした先の水中を、黒く濁った大きな影がゆらりと身を翻したようにも見えた。

「アシャ、あれは...」

「.....」

振り向くと相手は険しい顔で湖を凝視している。ユーノも再び水面へ目をやったが、もうその影の気配はない。

「アシャーっ！ ユーノーーっ！」

一体着替えにどれだけ時間をかけてるんだ、お前達は！

まもなくどたととイルファが足音荒く駆け寄ってきた。

「準備はもう.....おお！ なかなかだな、アシャ！」

さっそくアシャを見つけたイルファが嬉しそうに大手を広げて近寄ってくる。

「今までで一番美人だぞ！」

「アレノはいいのか」

極寒の囚人牢を思わせる冷たさでアシャが言い放ってくるりと身を翻した。ユーノを振り向きもしないで、さっさと離れていく。

「いやもちろん、アレノは別だ！ なんだお前、嫉妬してるのか、大丈夫だぞ、お前はいい友人だぞ！」

イルファが慌てて後を追っていくのを、ちらりと振り返ったアシャが、一瞬イルファを見るのと同じぐらい冷ややかな視線でこちらを見やった気がして、ユーノはどきりとした。

（嫌われた？）

自分の行動を思い返してひやりとしたものが広がってくる。

「ああ.....」

約束をただけなのに。ユーノを望んでのキスじゃなかったのに。お礼だけのはずなのに、つい、アシャに魅せられてふらふらと。

「どう、しよ...」

ひょっとして、自分の目の中にアシャへの欲望が透けていたのではないか。

「しまった...」

口を押さえてももう遅い。大事な相手の妹だから、付き人だからという範疇を、ユーノが越えそうになっているのに、アシャが気づいたのかもしれない。

「しまった、なあ...」

急いで二人の後を追いながら、くしゃくしゃと顔を歪める。

「近づいちゃ.....だめなんだ...」

心が零れ落ちてしまうから。

「近づくだけでも.....だめなんだ.....」

滲みそうになる涙を必死に振り払って、ユーノはきつく唇を噛んで駆け出した。

2.闇の巫女達

「レス、いいか？」

「ん...もうちょっと、まって」

「ナスト.....いいかげんに口閉めたら」

「いや.....けれどこれはしかし...」

天幕（カサン）の中で向かい合って座っているレスファートとアシャを、惚けた表情で見守っているナストを見かねて、ユーノが声をかけた。

「確かに女性に見えます、かなり見えます.....というより、あなたは本当に男なんですか？」

「あのな」

アシャがうんざりした顔になる。

「なんならここで脱ぐか？」

「いや、いえいえいえいいです、ええ」

ナストが見る見る赤くなって両手をばたばたと振った。

「それでも、アレノよりは劣るぞ、気品においては！」

「わかったわかった」

イルファが気合いを込めて唸るのに、アシャがますますぐったりした顔でレスに向き直る。

「どうせ俺は下品で、慎重深くもないし節操もないよ」

「なんだそれは？」

「...こっちの話だ」

思わず口をついた愚痴に一瞬ユーノが顔を曇らせたのに、我ながら情けなくなってアシャは溜め息をついた。

もう少しだったのに。

もう少しイルファの声が遅ければ、もう少し早くユーノが揺れてくれれば、きっとあの唇を味わえたのに。

だが。

（何より情けないのは）

どんな手段を使ってもユーノを望もうとした自分が、事もあるうに最後にとった手というのが、欲望を満たすためにあれこれ培った手管の一つだったということで。気持ちを揺さぶって追い詰めて、距離を縮めて抜き差しならぬ羽目に追いやって、もうそれしか選択肢はないのだと思い込ませる話術、自分の美貌を餌に欲しいものを力づくで奪い取るやり方そのものだったということ。

（そんなもので、墮とせるはずもなかったんだ）

国を背負い、家族を背負い、闇の不安を、孤独の傷みを、死の淵を覗き込み続ける恐怖をしのいで耐え抜いた心が、そんな姑息な手段で手にできると一瞬でも考えた自分の浅はかさ愚かさが、とにかくくじくじと身にしみて痛い。

こんなに惨めな気持ちになったのは久しぶりだ。

それはもう、追い詰められ追いやられているのは、ユーノではなくアシャ自身だという証明にしか他ならない。

（圧倒的な片思い、ってやつか...？）

まさか自分がそんな思いをすることになろうとは。

「はあ...」

「もうすこし、まってね、アシャ」

レスファートが溜め息に慌てたように瞬きした。

「なんか...むずかしいの、アシャの感じって」

レスファートがあっさりと核心を突くようなことばを口にしてどきりとした。

「誰だってそうだろう？」

ユーノが不思議そうに首を傾げる。

「誰だってみんな、気持ちや考えを全部形にしたり、意識してたりするわけじゃないんだろ？」

「んーと...」

レスファートは軽く眉を寄せた。

「そうなんだけど、そうじゃないの」

「そうなんだけど、そうじゃない？」

「えーと、あの、感じるものはいろいろくつついてたりからんでたりするんだけど、全体として、えーと、一つの絵っていうか、場所っていうか、色とか形とかにってるの」

ことばにしにくい分野を一所懸命言語化しようとするせいで、いよいよわかりにくくなっているが、本人はかなりわかりやすく話していると思っているらしく、ね、とユーノに同意を求める。

「う」

ね、って言われても。

ユーノが困惑した顔になるのに、レスファートはもうちょっとまってね、とアシャに向き直って、再び集中し始める。

「えーと、だから、果物があつたり、野菜があつたり、肉があつたり、布があつたり、そういうものがいっぱいならんで、人がうろうろしてて、そういうところを『市場』っていうでしょ？」

いつもより数段大人びた声のことば遣いは、普段使わない部分を動かしているせいか。

「うん」

「だけど、果物はならんで、なのに野菜はどんどん料理されてて、人が泣いたりおこったりしてて、そばで大きな建物がくずれてって、おなべに土がほうりこまれてって、ガラスびんに水をいれて、それをたくさんならべて、でも、その中にびかびかしていなずまが走る……そんな感じ」

「何、それ？」

「……わかんない」

そういう場所をなんて言えばいいのか、ぼくはわからない。

レスファートが眉を寄せたまま、澄んだアクアマリンの瞳でアシャを射抜く。

「アシャの中にそれがあるのに、アシャはそれの名前を知らない」

だから、ぼくはもっとわかんない。

「だから、それをまるごとおぼえるしかないんだよ、アシャの感じをもっとくのに」

ユーノは簡単だったんだけどな、とレスファートは一人ごちる。

「すごくきれいな、虹色の布、ところどころに銀色の糸が入ってて、宝石みたいに光ってる。ずっと見ててあきないし、見てるだけで楽しいし」

「へえ…」

ボクはそんなふうに見えるんだ。

ユーノが照れたように薄赤くなる側で、アシャはひやりとした感覚を漏らさないようにするのに手一杯だった。

確かにレクスファの王族は心象を読む。アシャもその力に自分を晒すのは初めてではない。

だがしかし、レスファート、この幼い王子ほど、その才能に恵まれた世代はいなかったのではないだろうか。

なぜなら、今レスファートが読み取ったアシャの『心象』は、まさに『ラズーン』そのものであり、また『ラズーン』の成り立ちそのものでもある。アシャは『ラズーン』のものではあるが、『ラズーン』の成り立ちについて記憶しているわけではなく、それは『太皇（スーグ）』のみが有する記憶だ。だが、それをアシャが全く受け継いでいないかというと、ある意味アシャそのものが『ラズーン』の闇の側面とも言うべき存在であるが故に、その体に当然刻まれているはずのものでもある。

レスファートが表現した『市場』などという概念でまとめきれないというのは、それが長大な時間を封じ込めたものであり、無数の命を内包しているという意味でもある。

それをあえて何かの概念で表現しろというのなら、それは『ラズーン』としか言えないものだ。

果物と野菜は命、鍋はこの世界、そう翻訳すれば、人間の悲嘆、建造物の崩壊を加えて、レスファートの表現はかなり正確な描写になる。

（そしてガラス瓶と稲妻は俺の）

目を伏せて、目に浮かんだだろう殺気を隠す。

（俺の）

「……はい、いいよ、アシャ」

ようやくレスファートが眉根を緩めた。少し目を閉じ、今読み終えた心象をひとしきりなぞるように、眼瞼の下で人を動かす。

「うん……追いかけるれると思う……一つ、見つけたから」

「一つ見つけた？」

「うん……泉」

「っ」

さすがに一瞬顔が凍った。

(まさか、そこまで読めるのか)

そのことばを聞けば、きっと『太皇（スーグ）』も驚くだろう。世界に甦りつつある命の無限の可能性を喜ぶだろう。

遠き彼方の白い城壁を思い出す。そこに含まれた切なさとともに。

だが続くレスファートのことばは、なおアシャを驚愕させた。

「泉？」

ユーノが確認する。

「うん……白い、泉、それでうまく追いかけるれる」

ユーノの時は虹色の布、それと同じように、アシャは白い泉。

(白い、泉、だと?)

泉、だけではなく、青いとか澄み切ったとかの形容でもなく、白、と。

(見抜けるのか)

ただ、アシャを通してだけで。

(なんてことだ)

苦々しい傷み。

「そういうふうに……名前をつけたら……いけるって気がする」

アシャの煩悶に気づかないレスファートは、どうやらユーノの心象を思い出したことで、アシャを把握する方法を見つけたらしい。

ぱちりと目を開いて嬉しそうに笑った少年に、アシャはかろうじて笑み返した。

「じゃあ……後から俺を追ってこれるな？」

「まかせて」

ぼくがちゃんと案内するよ。

「アシャが居るところまで」

無邪気に言い放ったことばの意味を、レスファートはどこまで理解しているだろう。

「……じゃあ、よろしく頼む」

微かに震えそうになった体にぐっと力を込めて、アシャは静かに立ち上がった。

神殿は夜の闇が降りつつある中で、ほの白く姿を浮かび上がらせていた。

「確かに『運命（リマイン）』が好みそうだな」

アシャはつぶやいて、するりと樹間から歩み出した。数歩進んではためらう、また思い切ったように数歩進む、そういう不安そうな足取りで入り口に近づいていくと、まるでその姿を見ていたように、白くて長い裾をひきずる衣をまとった女が戸口から現れる。

「何か御用でしょうか」

微笑む口元は優しげだが、アシャの全身に走らせる瞳は冷ややかで猛々しい。猛禽類の前に素肌を晒すような感覚だ。

「ここは、湖の神さまにお仕えする巫女さま達のいらっしゃる神殿でしょうか」

片手を口元に添え、囁くように尋ねてみせると、相手はゆっくりと目を細めた。

「そうですが……あなたは？」

緑色の瞳が一層光を増して、アシャを舐め回すように見つめる。何かの違和感がある、だがそれが何だかわからない、そう警戒する顔だ。

「ああ、やっぱり」

アシャは小さく吐息をついて、涙ぐむように俯いて衣の袖で目元を押さえた。

「私、アーシャ、と申します。居場所を求めて、ずいぶん彷徨い歩いて参りました」

「それはそれは」

「実は数日前に……恋人を……失いました…」

「まあ」
「.....もうこの世に何の望みも持っておりません。が、親兄弟は私が死ぬのを許してくれません」
「そうでしょうか」
「ならば一生どなたにも嫁がぬと言いますと、とんだ親不孝ものだと言われ、ついには家を追い出されてしまいました」

ひた、と上目づかいに相手を見つめる。
「旅の途中でこちらの湖の神さまのことをお聞きし、悲しい過去を弔うような情け深い神さまならば、きっと私の献身をお受け下さるだろうと思って、ようやくここまで辿りつきました」

「遠い所からいらっしゃったのね」
「ええ.....近くの人々の情けにすがり、何とか身なりは整えましたが」
もう行くところなどないのです。

体を竦めて顔を覆うと、
「すると、身寄りはないも同然、そういうことですね」

「はい」
「なるほど、ご事情、よくわかりました」
女はにっこりと親しげに微笑んだ。

「確かに我が神は情け深い方、どのような献身も受け入れて下さいますが、あなたのように美しい方が巫女に加われれば、我が神の力もいや増すというもの...」

くすり、と最後に零した笑い声が妙にねっとり響いて、え、と首を傾げると、
「ほほほ、いえ、こちらのことです。さあいらっしゃい、こんな夜中に可哀想に」
女はいそいそと扉を大きく開いてアシャを迎え入れた。

「.....これは.....」
入ってすぐに小さな広間があった。そこからいくつかの通路が奥へと伸びているが、明かりはほとんど灯されていなくて薄暗い。窓から入る月光がわずかに通路を照らす程度だ。

「嘆きを受け取るのは闇の深さと安らぎです.....足下に気をつけておいでなさい」
こちらへ、と女はアシャを一本の通路に招き入れた。

微かなざわめきが遠くから響いてくるが、どこから聞こえてくるのかわからない。廊下は少し先で分岐していて、なるほど、こじんまりとした外見を裏切る複雑な造りになっているようだ。

「こちらでお待ちなさい」
「はい」

言いおいて女が部屋を出て行き、アシャはゆっくり周囲を見回した。
通されたのは並んだ小部屋の一つ、窓がないせいか、小さな灯皿が祖末な木の机の上で光を揺らせている。石の床には、簡素なベッド、一人用の机と椅子、私物を入れておくらしい木の箱が一つ置かれているだけだ。ごつごつとした壁、低い天井が押し迫るようで、こういう施設にありがちな敬う神の絵姿さえない。

「牢屋、か」
意外にそれが真実かもしれない。巫女志願の娘達が、本当に儀式を行い神に仕えているかどうかとも怪しいものだ。

油断なく両腕で体を抱き締め、不安そうに振る舞いながら、アシャはさっきのざわめきを探る。意識の隅をちくちくと苛立たせる不快な感触、確かにただの神殿ではなさそうだ。

それほど待つまでもなく、再び扉が開いて先ほどの女が戻ってきた。
「幸いでした、大巫女さまが誓いの間でこれから我が神に捧げる儀式を行うところです。あなたも参加できるように取りはからってくださいましたよ」

「まあ、嬉しい」
「さあ、こちらへ」

女の後について部屋を出、再び奥へと廊下を進んだ。静まり返った神殿内、両側には似たような小部屋と思われる扉が幾つも幾つも並んでいる。

「ずいぶんとたくさんのお部屋がありますのね」

「我が神に仕える巫女達の部屋です。この方達はまだ位が低くて修行中なので、神に直接お会いすることはなりません」

「湖の神にお会いできるのですか」

一体どのような方なのでしょう。

「そのうちに」

女は肩越しに薄く笑った。それきり何も言わずに廊下の奥へ奥へと進んでいく。

相変わらず飾り気のない薄暗い廊下を進んでいくに従って、脇から一本また一本と幾つもの通路が合わさっていく造り、やがて廊下は一枚の白く塗られた木の扉で終わった。

「ここが誓いの間ですよ。我が神に永遠の誓いをたてるのです。さあ、どうぞ」

女が扉を開いて促すのに、アシャは静かに中に入って目を見張った。

「まあ...」

あのささやかな神殿のどこに、これだけの広間が隠されていたのだろう。それとも分岐し散らばった廊下がそれぞれに多くの部屋を巡りながら、この広間を構成する外郭にでもなっているのだろうか。

思った以上に高く開いた天井、数十人はゆうに収容できる空間だ。壁に灯された光は、暗い通路と対照的に広間を光り輝かせている。

正面には数段の階段が壁に向かって作られている。中央のなお数段高くなったところに、背の高い真っ黒な玉座、両側には其の者が座るのか、玉座と対照的に粗末な椅子が左右二客ずつ並び、背後には重そうな真っ黒な布が天井近くから床まで壁面全体を覆うように垂れ下がっている。

玉座の正面、広間のほぼ中央には、黒い筋が模様のように入っている白い石で造られた水盤があった。差し渡しアシャの背の倍はある大きなもの、中にはどす黒い妙な粘り気を持つ水が、風もなく地面も揺れていないのに、たぽ...ん、たぽ...ん、と音をたてている。

水盤を挟んで玉座と相対する位置、アシャの前方には、衣服も様々な娘達が前後列に並んで膝をついていた。みな頭を垂れ、大巫女とやらが来るのを待っているようだ。

「さ、こちらへ」

導いた女に促されて、アシャも娘達の後に膝をついた。と同時に娘達の間に微かなざわめきが走る。

目立たぬように頭を下げながら、胸の奥にきしるような不快感を感じた。心臓の裏をなで回すような冷たい悪意、娘達も敏感な者が居るのだろう、不安そうに胸を押さえた者も居る。

正面の黒い布の両側から二人ずつ、四人の娘が現れた。さっきの女と同じような白くて長い衣を引きずり、玉座の側の木の椅子の前に並ぶ。その娘達に気をとられている間に、もう一人の女がどこからかしずしずと歩いてきて、玉座の前に立った。

娘達と同じ白い衣、ただ玉座の女は肩からもう一枚、厚手の生地の上衣のようなものをなびかせている。細面の顔は尖った表情で、傷ついた人々の祈りをまとめるものというよりは、人の弱みを見つけ出すのを喜びとするような鋭い視線を娘達に投げかけたと思うと、ぐいと傲慢そうに顎を上げて見下ろした。

「聖なる湖の神よ！」

きんきんと響く耳障りな声が広間を満たす。

「ああ我らが願いを聞き届けたまえ！ 我らが平安を永遠に守りたまえ！」

両手を高々と振り上げる。干涸びたような細い腕、茶色の髪が波打って流れ落ち、それをうるさそうに払う姿がまるで憤りに我を失ったようにせわしない。

「今ここに！ ここにあなたの娘を！ あなたに仕える娘達を連れて参りました！ 湖の神よ、我らが祈りを聞き届け、姿を現したまええ！」

両手を振り回す女の背後にゆらりと黒い影が立ち上がった。もやもやと彼女を包み、いとおしむように絡みつく奇妙な影、それを感じたらしく女は一層顔を紅潮させて大声でわめく。

「神よ！ 神よ！ 我が神よ！」

（やはり、『運命（リマイン）』）

女はすっかり取り憑かれている。影に愛撫されているように身をくねらせながら、繰り返し叫ぶ顔が陶酔していく。

「湖におわす我が神よ！」

と、それまで重苦しい音をたてて、ただ揺れていただけの水盤の水がふいに激しくざわめいて水音をたてた。壇上の娘達は平然としているが、女の奇声にとられていた手前の娘達が息を呑んで見守る中、ずぼりと重い音をたてて生き物のように水が立ち上がる。

「あ...っ」

小さな悲鳴が漏れたが慌てたように呑み込まれたのも道理、立ち上がった水を破って現れたのは異形の怪物だった。

「ひ…」

誰かが鋭く息を引く。

「や…」

半泣きになった掠れ声、聞き咎めたように怪物はゆっくりと体を捻り、こちらを振り向いた。ざぶつ、と怪物の腹の辺りで水が砕け、娘達が真っ青になって腰を浮かせる。

（ガジェス！）

アシャは強く眉根を寄せた。

（まさかこんなものまで復活しているとは）

アシャの背丈の三倍はある。魚の胴の部分長く長く引き延ばしたような体躯、その末端には折れ曲がった枯れ木と見える足がある。

えらの下に小さな、やはり干涸びて曲がった木の枝に似た尖った爪のある手が二対、顔は魚に似て、平べったい顎の上に鈍く光る金の目が一對。頭頂部から背中へ、逆立ってとげとげした背びれが続き、短い尾までびっしり黒い鱗に覆われている。

（まずい）

十分に育って、しかも餓えているガジェスは生きた人間の温かな血を好む。太古生物の中でも凶暴な種類だ。

「ちっ」

急いで周囲を見回して、恐怖に動けなくなっている娘達に舌打ちしたアシャの耳に、

「湖の神よ！」

玉座の女が上ずった喜びの声を響かせるのが届いた。

「我らはあなたに仕えております、我らの全てはあなたのものです、今その証拠をお目にかけます！」

壇上に居た娘達四人がいきなり駆け下りてきて、手近の娘達の腕を掴んだ。

「…ひっ」

何をされるのか察したらしい娘二人が自分達を捕まえた相手に両手を振り回し足を踏ん張り、力の限り抵抗した。

「い、やあっっ」

（く、そ）

勝算はともかく出るしかない、そうアシャが身構えた矢先、ふいにばらばらと黒づくめの男達が現れてぎょっとした。

（カザド？）

「な、なにっ」

「誰、何なの…っ」

戸口からなだれ込んできて、壁に沿って娘達を囲い込むように展開したのは確かにカザド兵、一斉に剣を抜き放って威嚇する。そのうち二人が、抵抗する娘達の側に駆け寄り、迷うことなく剣先を向け、娘達が凍った。

（カザドが『運命（リマイン）』と結んだだと？）

『運命（リマイン）』と組む末路をわかっていてするとは思えない暴挙、だがあの欲望に満ちた王ならありえると言えればありえるが。

（愚かなことを）

だが、この先、目先の利益に気を取られて『運命（リマイン）』に組する輩はもっと現れるだろう。

「いや…いや………いや…っ」

「誰か……お願い……お…お願い……っ！」

引き立てられていく娘が残った娘達に懇願を向けるが、誰がどうできるわけもない。むしろ、いずれは自分もあなるのだ、そう証されるような恐怖にある者は顔を背け踞り、ある者は既に泣き崩れつつある。

「ええい、うるさい！ 静かにさせなさい！」

「はい！」

四人の娘達が顔を引き攣らせながら二人の娘の両頬を代わる代わる打った。乾いた容赦ない音が響き、ぐったりとした娘達が引きずられるように水盤へ押し出される。

見下ろしたガジェスががばり、と口を開いた。気配に顔を上げた娘達が見入られたように身動きしないのに、ゆっくりと身を屈めて覗き込む。開いた口からぼたぼたと腐臭漂う液体が滴り落ち、娘の頬を濡らした次の瞬間、

「ぎゃっ！」

思わぬ素早さで伸びたガジェスの手が娘達を掴み上げた。そのまま一気に握り込む。

「ぎゃあああっ」

激痛に痙攣する娘の体から紅の飛沫が散る。なおも食い込むガジェスの爪がぎちぎちと娘を握り締める。

「ぐふ……う…」

静まり返った広間に呻き声が弱々しく響いた。

「あ、あ」

アシャの隣の娘が揺らめき、縋りつくように身を寄せてくる。そっと支え返しながら、アシャは静かに事態を見守る。

ガジェスは手に掴んだ二人を、じっくりと顔を近づけ眺めた。金色の目に捕らえられ、それでも痛みを失うことも叶わない娘達が歯を鳴らしながらガジェスを見返す。

居並ぶ娘達の喉も渇き切っているのだろう、声を上げる者もない。

しばらく気に入りのおもちゃを見定めるように、ガジェスは鈍く光る目で二人の娘を見比べていたが、やがて飽きてしまったように片方をぐしゃり、と握り潰した。

「いやああああっ！！」

真横で原型をとどめぬまでに弾けた姿に、残った娘が引き裂かれたような悲鳴を上げた。頓着した様子もなく、二人の娘をしっかりと両手で握りしめつつ、ガジェスは再び水中に戻り始める。

「ひどい…」

「なんてこと…」

溜め息のような声を漏らした娘達はお互いにすがりつくように抱き合っている。半狂乱で叫び続ける娘は天を仰ぎ、身もがきし、そのたびに真紅の粒を滴らせながら、水盤の奥、ガジェスの闇の住処へ引きずり込まれていく。

「もう…いや……あ…っ」

娘達がすすり泣きながら耳を押さえる。誰もがみな、自分の向かう未来に怯え切っている。泣き声をかき消すような悲痛な娘の悲鳴が、がばがばと響く恐ろしい水音とともに広間を満たしていく。

「消えて消えて消えて…」

隣の娘が全身震えて踞りながら恐ろしい祈りを捧げている、その意味を考えることもなく。

「、あ！」

やがて、響き続けていた悲鳴は唐突に消えた。

沈黙。

娘達は誰も顔を上げない。

静まり返った広間に、響くのはただ、眠たげな水音だけ。

たぽ。たぽ。と、ぷん。

「は…っ…あ」

零れた吐息を漏らして、どさりと崩れた娘が居る。だが、誰も面倒を見ようとしない。娘達はただ座り惚けている。

「お前達は湖の神に受け入れられた」

玉座の前で髪の毛を振り乱し興奮に酔い痴れた顔で立っていた大巫女が、感情のこもらない声で申し渡した。

居並ぶ娘達が虚ろな顔で見上げる。魂の抜けたような表情で、頬に涙の跡を伝わせながら、今見た光景を忘れようとでもするように、きつく目を閉じて項垂れる。

「後ほど、また、神のお召しがあるだろう」

びっくりと娘達が震えたのを、女は嬉しそうに見やった。

「部屋にて修行に精進し、休むがよい」

白い上衣を翻し、大巫女は玉座の前から歩み去っていく。

座り込んで動けなくなった娘達を壁際に控えていたカザド兵が下卑た表情で追い立てながら立ち上がらせた。廊下へ連れ出していく者も居るが、一物ありげな顔で娘に囁きつつ、どこかへ連れていこうとする者も居る。さしづめ、恐怖で我を失った相手をいいようにしようという目論みなのだろう。崩れた娘は早々に二人のカザド兵に連れ去られていく。

「下衆には下衆が寄り集まる、か」

アシャは衣の裾でさりげなく口元を隠して俯きつつ、周囲の娘に紛れ込むように身を縮めて立ち上がった。

（ガジェスの贄として娘達を集めていたのか）

よろめく隣の娘を支えるふりで、覗き込もうとするカザド兵をやり過ごす。

（おまけにカザドまで噛んでいる）

どうする。

足下の確かなアシャに寄りかかるような娘を隠れ蓑に、廊下に出て引き立てられつつ頭を働かせる。（さすがに俺一人じゃ厳しい）

これだけの兵士に『運命（リマイン）』、それにガジェス相手にやり合うなら、アシャも手加減などしてられない。ラズーンのアシャここにあり、と大声で怒鳴るような闘い方になってしまう。へたをすれば、『野戦部隊（シーガリオン）』や『泉の狩人（オーミノ）』の出動を要請する慌て者も出てくるかもしれない。

（どうも俺はユーノがらみは緩くなる）

今回は特に事前情報収集が甘かった。自分一人で入れば何とでもなる、手早く動けばユーノが入る前に始末がつけられると過信したのがこの有様だ。

（どうする？）

既にユーノ達は動いている。このままではユーノをみすみすカザドにくれてやるようなことになりかねない。

（それともいっそ）

一気にカタをつけてしまうか？

（最悪ユーノやナスト達あたりが無事ならいいわけだ）

怪しげな神殿の一つや二つ消えたところで、噂が『野戦部隊（シーガリオン）』や『泉の狩人（オーミノ）』に届く前に終わってしまっていれば、巷に漂う与太話としてそのうち消えてしまうだろう、と物騒なことを考えたとなん、

「おい！ お前はここだ！」

ふいに怒鳴られ押されて、アシャは我に返った。あ、と慌ててよろめいた振りで小部屋の扉の中へ入り込む。

なるほど、牢屋に見えたのも静まり返っていたのも無理もない。ガジェスの贄にすべく、逃げる覇気さえ奪われた娘達が小部屋に押し込まれているのだろう。

背後でぱたりと扉が閉まり、部屋の中ではったように先客が立ち上がるのが見えた。華奢な骨格、白い粗末な服、不安そうにそそけだった顔をこちらに向ける。

（レアナ？ いや.....違う）

「あの...」

瞬きする瞳を見返して気づいた。

（そうか、この娘がマノードか）

なるほど、レアナに似ている。顔かたちというより発する気配の柔らかさが余計にそう思わせるのかもしれない。

「あなた、マノード？」

「え？」

名乗っていないのに名前を呼ばれて、相手は警戒した顔になった。

「あなたは...？」

「私はアーシャ.....ごめんなさい、驚かせて。実はナストに頼まれてきたの」

「ナストから？」

「しっ.....。そう、あなたを助けてくれるように、と」

「ナストが」

マノードが花開くように笑って、レアナの笑みを思い起こさせた、そして。

『なっってほしいよ、誰かのためにも』

なぜか切なげに響くユーノの声。

『姉さまを大事に想う人のためにも、さ』
(レアナを大事に想う人のため)
あの声は、まるで愛しい相手を語るようだった、と思い出した。
(一体誰だ?)
胸の奥が甘く疼く。
(ユーノがあそこまで幸福を願う相手とは)
『.....アシャには、わからないよ』
挑むような鋭い怒り。
『アシャには絶対わからないっ』
アシャにはわからない、レアナを大事に想う誰かが居て。
(ひょっとして)
ユーノもまた、その誰か、を大事に想っているのだろうか。
脳裏を掠めたセレド皇宮での日々、そういう男は居ただろうかと思いつくが、レアナは皆に公平に優しく、誰かを特別扱いしている様子はなかった。
(それとも)
裏では公認されているような相手が密かに居て。
(そいつをユーノも好きだったとか)
だからセレドを離れることにしたのだろうか?
自分が全てを引き受けてセレドを旅立ったのも、レアナはもとより、その男を守るためでもあった、とか?
(誰だ?)
「ナストは無事だったんですね？」
「え、ええ」
思わず険しく眉を寄せたとたん、マノーダに問われて我に返った。
「あなたのことを大変心配していますわ」
「そうですか.....でも」
マノーダは顔を曇らせた。
「あなたも儀式を見たでしょう？ あんな怪物が居て.....たくさんの兵士が居て.....とても逃げ出すなんて無理です」
さすがに姉のために神殿に乗り込むような娘、儀式を見ても気力が尽きることはなかったらしいが、脱出策は思い浮かばなかったようだ。
「大丈夫」
アシャはにっこり笑った
「私には仲間がいますし、誰も彼も腕が立ちますよ」
「でも...私一人じゃいけないわ。アレノ姉さまを放っていくなんて」
「ああ.....ではアレノはどこに？」
「どこかの部屋に閉じ込められているはずなんです。金色の髪をしていて.....あなたに少し似ているわ」
「じゃあアレノも助けなくてはね」
そうそうのんびりもしてられないわね、何とか隙を見つけましょう。
そうつぶやいたとたん、がたり、と背後の扉が開いた。
「おい！」
殺気立った声が響き渡る。
「その女！ こっちを向け！」
これはこれは。
にんまりとアシャは目を細めた。
あっちから隙が来てくれたようだ。
「...なんですか？」
「こっちを向けと言ってるんだ！」
カザド兵らしい怒鳴り声が不安を含んで響き渡る。
「どうもお前を見たことがあるぞ！」
「あら」
アレノが驚いた顔でアシャを見上げるのに、安心させるように小さく笑ってみせる。
(レス、届くか?)

儀式の最中は周囲にも目を配れなかっただろうから、もう既にレスファートはアシャの気配を追って潜入を開始しているだろう。

（始めるぞ）

幾つもの壁と通路を越えて、闇から忍び入ってくる相手に意識を送る。

「私と会ったことがある？」

微笑みながら振り向いた。間抜けな男の背後の扉は、女二人と高をくくっているのか開いたままだ。

「どちらでかしら」

「おい、寄るな」

「キャサラン？ モス？」

「寄るなと言ってるだろう、お前、お前のその、紫の目はどうも」

「私の目が」

どうにかしまして？

「ぎゃっ！」

首を傾げて目を細め、唇に当てた指を誘うように男に伸ばしたその矢先、翻ったドレスの裾から爪先の一撃で男の脇腹を強襲する。

「おぐ...ううっ...」

「せっかちな方だこと.....おやすみなさいませ、っと」

「ぐぶ！」

倒れ込んでアシャの腰にしがみついてくる男の後頭部に肘を落とし、伸びた男から素早く剣を奪って、脱がせた上着で拘束する。

「あ...あなた...あなた」

引き攣った声に振り返ると、マノーダが茫然としていた。

「ひょっとして、おと...」

「あら」

見えた？

にっこり笑って裾を直すとマノーダがますます顔を引き攣らせる。せっかくの助けなのに、ひょっとすると関わらない方がよかったかもしれない、そういう表情で軽く後ずさりした。

「大丈夫よ、ちょっとずれてるかもしれないけれど」

危害は加えないから安心して？

「いえあのそういう意味では...っ」

「曲者だーっ！」

うろたえて弁解しようとするマノーダの声を遮るように怒号が響いた。喧噪が見る見る神殿に広がっていく。

「どうやら仲間が来たようね」

にやりと笑って、剣を片手に開いたドアを指し示す。

「脱出するわよ」

「は、はいっ」

慌てた顔でマノーダが走り寄ってきた。

「レスッ！」

鈍い打撃音を響かせ、襲い掛かってきた兵士を倒し、ユーノは必死に周囲を見回す。

（カザドの奴らが居るなんて！）

込み上げる怒りは『運命（リマイン）』に組みした相手の非道さと、自分に追っ手を引きつけることでセレドを守れると考えた自分の浅はかさの両方にだ。

（またここで、大事な仲間を巻き込んでいる.....！）

「レスッ！ どこにいるっ！」

見る間に押し寄せてきたカザド兵の中を、一筋の閃光のように切り抜けながら、レスファートの姿を探し求める。

「ナスト！ レスファート...ッ！」

ユーノ達が神殿に忍び込んだのは、つい先ほどのことだ。ずっとアシャの位置を感覚で追いかけていたレスファートが、アシャが動かなくなった、と告げて、おそらくはどこかの部屋に落ち着いたのだろうと判断した。

忍び込んだのはナストが示した、建物の横手にある小さな扉。

表で迎えるほどではない、あるいは表で迎えたくない客人用にと作られたそれは、今ではほとんど利用されていなかったらしく、イルファが隙間から剣を差し入れ数回激しく揺さぶると、がたりと掛けがねが外れた。

そのまま闇にまぎれて入り込み、レスファートが時々目を閉じてアシャの位置を確かめるのに従って奥へ進んだ。

迷路のような回廊の、重要な分岐には見張りの女が立っていたが、いずれも命じられて立っていただけらしく、ユーノがアシャ直伝の当て身で眠らせるだけで済んだ。

カザド兵に気づいたのは神殿の中央ほどまで来た時だった。

神殿の暗い廊下を我がもの顔に三々五々、時に巫女志願と思われる娘を乱暴に抱え込み引きずりながらのし歩く黒づくめの兵士達。よもやこんな処にいるはずもない姿、しかもその背後に、禍々しくも妖しい闇の影。

（カザドが『運命（リマイン）』と組んだのか！）

カザドの方は『運命（リマイン）』を利用するつもりだったのかもしれないが、たびたび『運命（リマイン）』に向き合ってきたユーノにはその思い込みの愚かさに背骨の付け根が縮こまってしまうような想いになる。いずれは乗っ取られ、人としての意識を食い尽くされていくかもしれない、そういう相手を御せると考えると。

一瞬立ち竦んだユーノの気配が届いたのか、今しも手近の部屋に娘を押し込み消えようとしたカザド兵の一人が、何かに呼ばれたように振り向いた。闇に見を潜めているユーノの視線に射抜かれ、息を呑みたじろぐ。

その瞬間、ユーノは床を蹴った。抜き放った剣を懐から一閃、右肩から首へ向けて体重を乗せ、一気に切り降ろす。声を千切らせた相手が扉に倒れ込み、中から響く悲鳴と一緒に床に沈む。

直前、男の背後から暗い影が走り去った。同時に遠くで「曲者だーっ！」と呼ばわる叫び、『運命（リマイン）』を通じて侵入は既に気づかれたのだろう、気づけばイルファは既にその場におらず、前方遥かにアレノの名前を連呼しながら突進していく。

「イルファ！ おい、待て！」

「アーレノーッ！」

「ちいっ」

恋する男は岩をもくり貫く、そう言った昔の賢人はたいしたものですね。

あっけにとられてつぶやいたナストが小さな悲鳴を上げたのに振り向けば、レスファートと共に押し寄せてきたカザド兵に呑み込まれていく。はっとして駆けつけようとしたユーノと二人の間に、あちらこちらの部屋から溢れた兵が入り込み、見る見る人波の向こうに消えていく姿に焦りが募った。

「く、そっ！」

過信していた、油断していた、そんなことは重々わかった、だから今は一刻も早く二人の元へ辿りつかせてほしい。

苛立ちながら次々兵士を倒して進むと、

「きゃああーっ」

か細い悲鳴が喧噪をくぐり抜けてきた。

「そっちか！」

目の前の一人を倒した向こう、回廊が数本集まった小さな広間の壁際に、追い詰められたナストとその背中に庇われながらアクアマリンの瞳を大きく見開いているレスファートの姿を見て取る。

「レスッ！ ナストッ！」

右から切り掛かるカザド兵の腹を蹴り付けながら剣を翻し、左のカザド兵の手首を掻き切る。

「ぎゃ！」「ぐあっ！」

倒れる二人の間を走り抜け、

「邪魔するなっ！」

前方を塞ごうとした兵士を一喝、怯んだ瞬間体を縮めて懐へ飛び込み、剣の柄で鳩尾を殴りつけ、勢いに戻る剣で背後から迫っていた男を貫く。思わぬ急襲に後から崩れてきた相手の顎を左のこぶしで叩き上げつつ剣を抜き、鳩尾を突かれてよろめいた男が気を取り直して前からかかってくるのを薙ぎ払った。

(ゆっくり右へ、円を描いて脚を上げ、爪先は次の敵へ叩き込む)

アシャのことばが過熱した頭に清涼な水のように広がる。そのことばに導かれるまま、覚えた動きを速度を上げてなぞれば、あっという間に周囲に空間ができた。

「は、あっ！」

体を回す、切っ先を左に持ち替えた剣で受け、右手の甲で相手の肘を跳ね上げる。腕を引き寄せ、慌てたように腕を戻す相手の懐に入り込むように身を縮め、相手の右脇へすり抜けると同時に左から来た敵の踏み込んだ膝を蹴る。驚いた顔で体勢を崩した相手の手首には右手に移した剣を見舞う。

「がっ」「ぎゃっ」

「く、そっ！」

「手強いぞ！」

弾かれたように跳ね飛ぶ兵士、周囲が悔しげに距離を取る。

「あっちの男はどうした！」

「止めろ、奥へ向かってる！」

ユーノに向かうよりはイルファの方が倒しやすいと思い直したのか、うろたえたように数人が向きを変え、見る間に包囲が緩んでいく。

「ユーノ！」

ようやくできた隙を狙って、レスファートがナストの後から走り出してしがみついてきた。

「お...まえ...」

吹っ飛んだ男が低く呻いて半身を起こした。はっとしてレスファートをナストの方へ押しやり、右手に無造作に剣を下げて近づくユーノを見上げ、それでも反撃はできないと見てとったのだろう、再びぐずぐずと体を沈めながら、濁った眼で問いかけてきた。

「その...戦い方は.....なんだ...？」

「戦い方？」

ユーノは眉を寄せた。見かけの華奢さを裏切るユーノの剣に屠られたくはないと思ったのだろう、奥へ向かうイルファを制する方がいいと格好の理由をつけて、あっという間に周囲から姿を消した兵達を、用心深く見送りながら、転がったカザド兵を見下ろす。

「その.....戦い方は.....っ」

ごぶり、と突然相手が真っ黒な液体を吐いてぎょっとした。

元は血、だったのではないだろうか。ところどころに紅の色は残っているが、まるで業火に焼かれて焦げ腐ったような臭いをたてながら、カザド兵の口から溢れ落ちる液体は、よく見るとぐしゃぐしゃになった髪を濡らして耳からも滴っているばかりか、瞳の中にもひたひたと薄赤く続いて見る見る黒く滲み出していく。

「ひ...」

レスファートが小さく息を引いたのも道理、ユーノの剣が裂いていないはずの男の体の下からもどろどろとした液体が広がり始めている。

「お...べの.....もの...」

「オベ？」

ユーノははっとした。

「オベの戦い方だということのか！」

思わず覗き込み、腐臭に一瞬吐きそうになりながら、ことばを押し出した。

「オベとは、視察官、のことだな？ お前は何か知ってるのか！」

視察官がラズーンへの忠誠を見定めるものとは想像がつく、だがその視察官たる存在は国々で王族を集めて回っている。

「なぜ.....おまえが.....金のオーラももっていない.....『銀の王族』の.....おまえがなぜ...」

「金のオーラ？」

「『銀の王族』...？」

ユーノのことばをなぞるように、レスファートが繰り返す。

「『視察官(オベ)は金のオーラ、を持っているのか？」

ユーノは重ねて尋ねた。

確かに、アシャは黄金の髪を持っている、黄金の気配を持っている、黄金の容姿を持っている。

だがしかし、金色のオーラなどは見たことがない。賢者が深遠なる知恵をこらすとき、その姿の周囲を淡く輝く銀色の霧のようなものが取り囲む、それがオーラだと聞いたことはあるが。

「賢者を包むようなものか？」

賢者が真理を見えない世界から持ち帰るために、あのオーラを出す、ならば金のオーラとは一体何を起こすのだ？

「教えて、視察官（オペ）とは、本当は何をしているんだ？」

尋ねて気づく、自分がそれにずっと引っ掛かっていたことを。

「視察官（オペ）は何をしてるんだ？ いや」

ラズーンは今、何をしようとしている？

（ああ、そうだ）

セレドを出たときは単なる忠誠の使いだと思っていた。世界の動乱も感じていなかったわけではない、だが、旅を続けるに従って、太古生物が次々現れていること、急に寂れた街や魔物（パルーク）が跳梁する場所、ユーノが考えていたよりずっと世界は変動していると感じる。

その最中のこの、招集というに近い、あちこちから集められていく人々は一体何なのだ？ どういう意味があるのだ？

一体ユーノはラズーンで、何をすることになるのだ？

（きっとアシャは知ってる）

何かを詳しく知っている。

だからこそ、時折深く考え込み、旅を早くに急がせようともするのだ、人々をラズーンへ導く視察官（オペ）として。

「ラズーン.....ラズーンか...」

だが、男の耳にはもうユーノのことばは届いていないようだった。薄赤く染まった眼球を虚ろに空中に彷徨わせ、悪夢にうなされているように、切れ切れのつぶやきを漏らし続ける。

「ラズーン.....ラズーンよ.....二百年の平和は終わるぞ.....これを逃し.....我らに勝機はない.....みてる.....見ているがいい.....我らは.....我らは.....必ずやこの世界を.....愚かな平和に.....眠る世界を.....握り潰し.....」

にやりと男の顔が大きく歪んだ。剥き出された歯がずるりと歯茎から抜け落ちるのに、レスファートが悲鳴を上げる。

「我ら.....『運命（リマイン）』...が.....全てを.....掌中に.....い...お...さ...げえ.....」

男がのろのろ動かした手首から肉が融け落ちた。ぼたぼたと黒く粘りつく液体になって、脚に滴り、その脚も衣服の内側で形を無くしていくのだろう、どろどろと足首あたりから融解していく。

「い、やあああっ！」

「見るな、レスっ！」

飛びついてきたレスファートを庇うユーノも震えていた。目の前で溶け落ちていく男はまるで一気に風化していく死体のように、皮が崩れ肉が流れ、白く残るはずの骨も黒くて鈍く光る棒杭が組み合わさったような姿を一瞬見せただけで、ぐしゃりぐしゃりと壊れ流れ落ちていく。

「う...ああ...」

ナストが口を押さえて壁際に走り、しかしそこでもまた、転がった死体が同様に得体の知れない腐臭漂う液体になっていく様にぶつかって、真っ青になって飛び退いて戻ってくる。

「く...」

思わず口元を袖口で覆い、周囲を見渡せば、倒した敵、先ほどまで傷みに呻いていたはずの命ある肉体が、まるで最後の繋ぎを引き抜かれたように次々崩れ落ちている。

「ひどい.....ひどい、よおっ！」

レスファートがもがきながら喚いた。

「ひどいひどいひどいっ！」

こんなのあんまりだ、てきだけど、あんまりだ！ みんなみんなこわがってる、こころのそこでこわがってる！！

「とけるって！ とけたくないって！ たすけてって...っっ！」

レスファートの悲鳴に、心を切り離せ、と少年を抱え込みつつ、その耳元で囁きながら、ユーノはふと、それらの液化していく死体の上にもやもやと固まっていく黒い煙のようなものを見咎めた。

「あれは...」

ユーノのつぶやきに、それ、がゆらりと向きを変えた、ように見えた。

「.....おまえ.....」

相手もユーノを認めたのだろう、じりじりと次第に人の形を取っていく。

「ナスト...」

「は...はい」

頼りなく、口を開きながら、ぐう、と喉を鳴らしつつ近寄ってきたナストに、ユーノはそっとレスファートを押しやった。そのレスファートを追うように、黒い塊が揺れるのに両者の間に立ちはだかる。

レスファートは格好の獲物になってしまうかもしれない。心を開き、共感しやすい、『運命（リマイン）』の好む依代の器として。

「ユーノ...」

「レスを連れて.....神殿の奥へ.....アシャに合流して...」

「で...でも」

「いいね」

びしりと決めつけた。

イルファは当てにならない。こいつをここで足止めしなくては、次はレスファートがああ融け崩れた死体になるかもしれない。

「し...しかし、あなたは...」

「ボクはこいつを引き止める」

面白い。

黒い塊は薄く嗤ったように、ユーノに向き直った。密度を高めつつ、じりじりと距離を詰めてくる。

「ユーノ！　だめ！　こいつは、強いよ！」

「だろう、な」

冷えた声で応えて、ユーノは剣を抜いた。不意打ちは効かない。こけおどしは意味がない。

「行くんだ、ナスト」

「は、はい」

「ユーノ！」

「レス、アシャを見つけるんだよ！」

そうしなければ、ここから出られないかもしれない。

胸の内ですぶやいた声をレスファートが聴き取ってくれているといいが。

動き出したナストとレスファートに、そうはさせまいとするように人の影のような形になった黒い塊が動いた。真っ黒な剣が影の内側からいきなり抜き放たれてナストに打ちかかる。寸前、間に体を滑り込ませたユーノが、ナストの肩を削りかけた切っ先をкаろうじて受け止める。

ガキッ、と鈍く重い音が響き渡り、一瞬衝撃を堪えるように影が止まる。

「へえ、実体なんだ？」

ユーノは相手を睨みつけて嗤った。それから振り返らないまま、

「走れっ、ナストっ！」

「や、ゆ、ゆーの！」

「ごめんよっ！」

ナストが真っ青な顔をして、レスファートを抱え込みながら視界の端を駆ける。

「ユーノ、ユーノ、ユーノお！！！」

身もがきしながら叫ぶレスファートに応える余裕はユーノにはなかった。じりじりと剣を押し返されていく。

「姿を.....見せろよ...」

そいつは実体じゃないんだろ...？

堪えながら呻くユーノに、黒い影は嘲笑するように揺らめいた。剣を構えた手から揺らめきが波のように伝わっていき、そこから黒い鉄粉が剥がれ落ちていくように、いつか見たことのある姿が現れる。

漆黒の髪が肩から背中に流れている。真紅の瞳はこちらの心を侵すような禍々しさに満ちている。瞳に劣らず赤い唇がにんまりと笑む。黒づくめの服をぎっちり身にまとっている、のに、その内側には虚ろな空間が感じられ、開いてみても肉体はないかもしれない。

ぎち、と合わせた剣が音をたてた。噛み合った部分から黒い剣がユーノの剣に齧りついてくるようだ。汗が、ほてる頬を、弾む息に熱気を吹き上げる体を滑り落ちていく。

「く、う」

剣を両手で支え直してなお、ユーノは押される。

『運命（リマイン）』は眼を細め、満足そうに剣もろともユーノの上にのしかかってくる。

「ばか！ ばかばか！ ナストのばかあつ！」

あんまり暴れるので、ついにナストの肩に担がれたレスファートが手足をばたばたさせて喚く。

「どうしてっ！ どうしてユーノ、放ってきちゃうんだよ！」

身をもがき、ナストの肩からずり落ちそうになりながら、レスファートはなお一層暴れた。

「ユーノ一人じゃ無理だよ！」

しゃくりあげたとたんに、大粒の涙が零れ落ちた。

「あんなばけものに、一人で...っ」

『レス、アシャを見つけるんだよ！』

ユーノの声を思い出して、また涙が溢れる。

「ユーノ、一人で...っ」

そうしなければ、ここから出られないかもしれない。

耳の奥で響いた甘い声は緊迫していた。

アシャを見つけなくては逃げられない、そうユーノは覚悟している。そんな相手をユーノに任せて無力に運ばれているしかない自分が、悲しくてたまらない。

「ユーノが死んじやったら...っ」

どうするんだよ！

悲痛な声でレスファートは叫ぶ。

力になれない、そんなことはわかっている、けれど力になれなくても一緒にいたい、そうずっと思っている。今まで側に付き添っていたのに。

「どうするんだよっ、ぼく...っ！！」

剣を与えた、身を捧げると言った、『忠誠』の意味はわからなくても、その行為の意味と重さは知っている。

「ぼくはユーノを、ユーノを...っ」

守るために。

「おかしな、話だが！」

暴れるレスファートによろめきながら、ナストが声を上げた。

「あそこに、いない、方が、いいんだ、きっと！」

「なんでっ！」

「足手まとい、に、なる！」

「っ」

「だま、って！」

角からカザド兵が駆け出してくるのに、ナストが慌ててレスファートを庇って身を潜める。

「あしで.....まとい.....？」

レスファートは目の前をカザド兵が駆け抜けていくのに、小さくつぶやいた。

「.....ぼくたち.....あしで...まといなの...？」

「し...っ」

「ぼく...なにも.....できない...の.....？」

しばらく周囲を伺っていたナストの服を握り締めると、相手が緊張した顔でそっと振り返った。

「.....できるよ」

「え...？」

「君はアシャを見つけられるんだろ？」

「あ...」

「見つけるんだ、できるだけ早く」

そうすれば、彼の元に早く戻れる。

「うん！」

レスファートは大きくうなずいた。そのまま、遠い所で鳴っている雷を追うように首を傾げ、アシャの気配を追う。

白い泉、入り交じる光景。

こんとん、って何だっけ...？

アシャの心象はとても難しい。同じようなものを、昔父親はこんとん、そう言わなかったか。

見失わないように必死に絞り込んで、建物の中を追いかける。

「...こっち！」

やがて、レスファートは広い廊下を指差した。

「こっちへ向かって走ってきてる！」

「よし、...っ！」

レスファートが示した方向へ走り出そうとしたナストは、飛び出してきた女にぎよっとした。剣で打ちかかられてかろうじて避け、レスファートを押しのけて女を背後から抱え込み、必死に応戦する。

「く、そ...っ」

女は無表情に跳ね返してくる。ナストの拘束はじりじり抜かれていく。

「先に、行って！」

焦った声でナストが唸った。

「で、でも！」

「っそう、押さえておけない、よ.....すごい力だ.....っ！」

ナストの腕は今にも振りほどかれそう。

「う、うん.....、あ！」

泣きそうになりながら、背中を向けて走ろうとしたレスファートははっとした。

近づいてくる強い力の印象、猛々しくて謎めいた、その気配は。

「アシャ！」

「レスかっ！」

振り向いた先、廊下の向こうから二人の女性が近づいてくる。片方の女性がもう一人を引きずるように走り寄る、その姿は光を放つほど眩い美しい女性だが、

「ち、いっ！」

相手は荒々しい舌打ちを花のような唇から一つ漏らした。もう一人の女性を振り回してこちらへ突き放し、立ち止まるや否や、すぐ背後まで迫ってきていた数人の男達に飛び込む。

「アシャ！」

はっとして叫んだレスファートの前で、薄青の衣が噴水のように吹き上がり翻る中で剣が跳ね回り、たちまち二人、カザド兵が血しぶきを上げて倒れた。無言の攻撃、しかも気合い一つ漏らさないまま、円を描く動きを女性が繰り返していくたびに、床に転がる死体がみるみる増える。

「す、ご...」

ナストもナストが抱えた女性も動きを止めて茫然としている。アシャの凄さはレスファートもよく知っている、だがその圧倒的な力の差は、女性一人を庇いながら、まるで宮中での舞踏会を思わせる鮮やかさ、くるくると身を翻すアシャの腕に時に抱かれ時に導かれ、蒼白な顔さえなければマノーダもまた、自分が修羅場にいると思っていないかもしれない。

「つく！」

ナストがいきなり振り解かれそうになっていた女性を手放した。一瞬止まった相手の動きに、容赦のない一撃を首筋へ、そのままレスファートも放り捨てて、アシャの元にいるマノーダに向かって走り出す。

「マノーダ！」

「、ナストっ！」

名前を呼ばれたマノーダもアシャの側から走り出した。そのまま二人、互いに駆け寄って抱きあう、それを横目に追っ手を倒したアシャがまっすぐレスファートに向かって走ってくる。

「ユーノは?!」

「っ」

その名前はレスファートの胸を貫いた。一気に視界を満たし溢れ落ちた涙のままに、アシャに飛びついていく。

「アシャ.....っ！」

「どうしたっ？」

「ユーノが.....ユーノが.....」

レスファートが必死に事の顛末を語るにつれ、みるみるアシャの顔色が変わった。吊り上がっていく眉も見開かれていく瞳も、ぎらぎらとした殺気に塗り潰されていく。

「イルファはどうしてたんだ！」

「わかんない、アレノを探しに...」

「あの、くそ野郎!!」

アシャの語気の激しさに、再会できたことをひたすら喜んでいたナストとマノーダがうろたえたように振り返った。

「どうしよう、どうしたらいいの、ぼく...っ！」

「.....今、イルファはどこにいる？」

猛々しく眉をしかめてアシャが尋ねた。

「イルファ？ ユーノは？」

「ユーノは大丈夫だ」

一瞬眼を細めたアシャがひんやりと言い放った。

「あいつは天才だ。それに俺がすぐに追いつく」

だが、イルファやアレノを庇ってたら、しのぎにくくなる。

「う.....ん」

あしでまとい、そのことばが再びレスファートの胸を掠めた。

ぼくも、イルファも、ユーノを助けられないんだ、やっぱり。

レスファートは唇を噛み、泣きそうになりながら眼を閉じ、眉を寄せた。直前にイルファの心象を確かめていない分、位置が捉えにくい。これまでの時間が積み重ねた心象を頼りに神殿の中を探し求める。こぶしを握りしめて集中し、ようやく慣れ親しんだ気配を捕まえた。

「わかったよ、どっか、すごく広い所。広間みたい」

「あんの...」

その場所がどこかすぐに思いついたらしいアシャが、再びの罵倒をぎりぎり呑み込んだ。

「よりもよって.....こっちに来そうにはないか？」

「だめ、みたい」

レスファートはイルファの側で消えたり現れたりする、もう一つの気配を確かめる。

「だれか、いっしょ.....女の人、マノーダにいてる」

「アレノか！」

ぎりっとアシャの歯が鳴った。

「ナスト！」

「はいっ！」

慌てて駆け寄ってきた二人に、アシャはてきぱきと指示を下す。

「マノーダを連れて逃げろ！ ここをまっすぐ、角を右へ曲がって、その次の角を左に行けば、神殿の入り口に出るはずだ」

「あ.....でも、アレノ.....」

「イルファが助け出している。すぐに後を追わせるから、心配するな」

アシャにしてはひどくぶっきらぼうに言い捨て、二人に背を向けてレスファートに向き直る。

「レス、ナストと一緒に...」

「いや！」

聞かずともわかった。あしでまといになるかもしれないということも、十分わかった。それでも、レスファートは大きく首を振った。ナストのことばが頭をよぎる。

「ぼくだけだよ、ユーノのいばしょ、知ってるの」

「...」

アシャが目を細める。紫の瞳が揺らめく炎をたたえていて、まるで平原竜（タロ）と呼ばれる竜族の眼のようだ。冷酷なほど見定める眼差し、それに負けまいと唇を引く。

「ぼくだけだ」

アシャにもユーノの位置は掴めない。辿り着くまでに時間がかかれば、ユーノの危険は倍加する。意地だけでなく、気持ちだけでなく、今ここでレスファートはアシャに従う気にはなれない。

「わかった」

アシャがうなずく。

「じゃあ僕達は、逃げ、ます！」

ナストが一瞬苦しそうにことばをとぎらせつつ、それでも一気に言い切って、なお振り返ろうとするマノーダをひきずるように、教えられた出口へ走り出す。

「来い、レス！」

「うんっ！」

まって、ユーノ、今ぼくが行くから！

身を翻すアシャの足下で、レスファートは全力で走り始める。

ぎり……っ、がっ！

ユーノは剣に渾身の力を込めて弾き、『運命（リメイン）』から飛び離れた。

頬に走った傷から新たに生温かなものが流れ落ちていく。あちらこちらと切り裂かれ、むきだしになった腕や肩にも、赤い筋が幾本も刻まれている。荒い呼吸音が響く中の一瞬の静寂を狙ったように、ぽと…っ、と柔らかい音をたてて、顎の先から流れ落ちた血の雫が滴った。

「…」

無言で睨む『運命（リメイン）』は相変わらず張り付いたような薄い笑みを浮かべている。構えている黒い剣は何度もユーノの肌と肉を滑って食い込み、気のせいか薄赤く濡れているようにも見える。

体の髄が凍てついていくような、重く確かな死の予感とユーノは対峙していた。

（ナスト達は無事にアシャの所まで行き着けただろうか）

そう考えた瞬間、攻撃の気配さえ感じさせずに襲いかかってきた黒剣の切っ先をまたかろうじて避け、身を翻して剣で受け止めた。いつ斬られたのか、チュニクの裾がはらりと床に流れる。床に広がった血溜まりの上に落ち、みるみる血を吸って赤黒く染まり床に張り付く。視界の端で感じ取りながら、それが数瞬後に訪れる自分の未来のような恐怖に顔を歪めると、傷みとともに頬の上を止まり切らぬ血が滑り落ちていくのがわかった。

（さっきから何度同じことを）

考えているのだろう、考えると同時に釣り合いを崩され、咄嗟に力を加減して黒剣の圧力をしのぐ。くつくつと笑う相手の声が聞こえたような、それともそれは繰り返す攻撃に疲れた心が聴かせたものだろうか。

「くっ」

迷いを振り払い剣に一瞬力を込め、攻撃すると見せかけて蹴りを繰り出す、が。

「！」

受け止めたはずの黒剣がふいにくねるようにするすると離れる。合わせ損ねて引き込まれそうになるユーノの剣の隙を知ってでもいるように突き出された剣に、蹴りを入れた脚を掠められ、かろうじて向きを変えて体を引いた。切っ先は逸らしたが鋭い痛みが走って、べたりとした温かな感触が一気に脚を覆う。怯む間もなく、『運命（リメイン）』の手が伸び、剣で追い込んでくる。

「っ、く」

受け止めたのは幻、巧みに間をかいくぐられ、首筋へ一閃、必死に身を伏せたユーノの髪が一房、首のかわりに飛び散った。伏せながら飛ばした手刀は空を切る。伸ばした腕を道筋にするように目の前に黒剣が突き込まれてくる。体が竦むのを舌打ちしながらなお沈め、そのまま腰を中心に円弧を描いて背後へ半身振り上げ、攻撃に転じようとしたが、その目の前まで黒剣は自在に追ってくる。

（だめだ）

力の差がありすぎる。とても交わしきれない。交わしながら攻撃をしかける、防御と見せて隙を伺う、そういった小細工が一先きかない。読み取られ、読み切られ、競り合われ、競り落とされていく。体が震えてしまうのは、凍えるような周囲の冷気のせいか、それとも殺される瞬間の傷みを思うせいかな。

神の名を唱えることはとうに忘れていた。全ての神経を目の前の敵に注ぐしかない、一刻でも長く相手の攻撃をしのぐしかない、生き抜くためのただ一つの道にユーノの神経は研ぎすまされていく。

「は、っ」

呼吸が乱れたのは引いた背後にあたった固い感触のせい、壁だ。左右に逃げられるほど隙はない、無言の『運命（リメイン）』の攻撃は疲れを知らない。数度剣が絡み合う、離れかける、だがそれは儚い望み、罫とわかっていても空かされた右へ動くしかない。

（しまった！）

一歩右へ、そのとたん、足下のぬるりとした血溜まりに動きを奪われた。

「く、…っ！」

声を上げる間もなく尻餅をつくユーノ、床に叩きつけられ、眉をしかめて見上げた視界に、黒剣が不気味な輝きを放ちながら突っ込んでくる。床についた手の黒剣を差し上げている暇はなかった。無意識に懷に突っ込んだ左手で握りしめたものが何か、思い出す間もなく鞘から抜き放ち、のしかかってくる『運命（リメイン）』の腹めがけて右手を添えて力の限り押し上げる。

「ぐうあっ！」

初めて『運命（リメイン）』が悲鳴を上げてのけぞった。

「？」

理由がわからない、けれどその隙を逃すほど余裕はない。力を込めてなおも突き上げたのは、とても戦闘に向くとは思えない金色の護り刀のような短剣、それを柄まで通れと相手の胴に押し込み跳ね上げる。

「う、ぎゃあああ！」

絶叫が空間を圧した。差し上げた姿勢のまま息を荒げて凍りついたユーノのすぐ側に、今まさに覆い被さろうとしていた『運命（リメイン）』の手から落ちた剣が落ち、そればかりか見る間に黒い煙をあげていじけたくしゃくしゃした燃え滓のような塊に変わってしまう。

（なに？）

剣だけではなかった。

『運命（リメイン）』自身にも同様の変化が起こり始めていた。よろめくように体を引く、その短剣の傷跡から煙が立ち上り始めたかと思うと、その傷の周囲がまるで見えないこてに焼き焦がされてもいくように、じりじりと黒く変色していく。

「ふ、ぐ、ぐ…」

ゆらり、と『運命（リメイン）』はユーノから離れて後ずさった。真紅の瞳に開いていた黒い瞳孔が小さく小さく縮んでいく。唇を異様な形に振じれさせて、何か言いたげにユーノの手の短剣を見つめる。その視線に促されるように、ユーノもまだ激しく喘ぎながらのろのろと手を下ろして、手に掴んだ短剣を見た。

（アシャの、もの）

そうだ、これは確か、作戦に入る前に、アシャがユーノに貸してくれたものだ。アシャがこれを身につけていたのは知っている。こんな装飾品のような剣をなぜ大事にしているのだろう、由緒あるもの、意味あるものなのかと思ったことはあるが、剣として優れているとは思ったことはない。

だが、こうして手にしてみると、何か底知れない震えを感じる。今『運命（リメイン）』の腹を切り裂いたばかりだというのに、その刃は一点の曇りもなく澄み渡り、冴え冴えとした青みがかった刀身は殺気さえ感じさせる逸品だ。

（でも、どうして、この剣が）

ユーノの剣では『運命（リメイン）』には手傷一つ負わせることはできなかった。確かにほとんど攻撃が当たらなかったこともあるが、確実に入ったと思った一撃でも効果がなかったのに。

（視察官（オペ）のもの、だからか？）

「ふ…ふふ」

時ならぬ含み笑いが響いて、ユーノは振り返った。

惨たらしい傷を抱え込むようにして立っていた『運命（リメイン）』の唇にへばりついていた薄い笑みが、微かに零れ落ち溢れ落ち、やがて声を限りの嘲笑に変わる。

「は、ははは…っ、ははははははああっ！」

「っ！」

疲労に崩れ落ちそうな体を支えてユーノが必死に立ち上がるのと、『運命（リメイン）』が身を翻し、高々と笑い声を響かせながら走り出すのがほぼ同時だった。

「待て！」

一瞬茫然とはしたものの、ユーノはすぐに死体が転がる中を駆け抜けていく『運命（リメイン）』を追った。

（まずい）

まずい。

まだあれほど走れるなんて。

まだあれほど動けるなんて。

傷口の血が乾いて頬が引きつれる。

（ここで逃がすわけには）

また被害が増える。今は少なくとも多少の手傷は負わせた。けれど次に回復されたら、しとめる術

がない。

（走れ）

震え出しそうな体、今にものめりそうな脚を叱咤して追う。

（今逃がしたら、次は）

屠られるのはアシャ、イルファ、それとも。

（レス）

背中を走り上がった悪寒に堪え、短剣を懷に、長剣を引っさげて走る。

すぐ目の前を、黒づくめの後ろ姿は踊るように跳ねるように走っていく。速い。手負いとはとても思えない。追いつきそうになるたび、巧みに回廊の角を曲がり、一步また一步と距離が開いていく。

（畜生！）

ユーノは舌打ちした。脚の傷が一つ二つ口を開けたのか、ぬめるような感覚が絡み付いてきて速度を鈍らせる。

『運命（リマイン）』の姿が消えた角を曲がったとたん、ばん、と扉が開いたのが視界に飛び込む。

「そこか！」

「うおあ！」

「邪魔だっ！」

待ち構えていたのか偶然か、襲いかかってきたカザド兵数人の間をすり抜け、なおも立ち塞がる輩を剣一閃二閃、倒れかかってくるのを背中に扉に突っ込む。

「?!」

そこは大きな部屋だった。

右手に黒の玉座、中央には妙に粘度のあるどす黒い水をたたえた水盤がある。

『運命（リマイン）』はユーノを振り返ることもなく、一直線に水盤に走り寄った。と、まるで応じるようにむくりと盛り上がった水の中から、全身鱗に覆われた異形の姿が立ち上がり、威嚇するようにユーノを金色の眼で見据える。緩やかに差し伸べた枯れ枝を思わせる手が『運命（リマイン）』が飛び乗るままに受け止めた。

「待てっ！」

「それ以上近寄りなさるな！」

追いつがろうとしたユーノと怪物の間に、唐突に白い衣の巫女達が立ち塞がる。虚ろな眼、生気のない無表情な顔、その先頭に巫女達の長らしい白いマントの女が叫びを上げた。

「聖なる湖の神なるぞ！」

「何が聖なる、っ」

吐き捨てかけたユーノは女が笑みを浮かべて指し示した玉座を見た。

「ナスト！」

「すみません、ユーノ！」

玉座には後ろ手に縛られたナストが、別の巫女達に引っ立てられている。その側にマノーダはいない。

「マノーダは?!」

「僕が囷になったんですが...」

情けなさそうなナストのことばは、入り口から躍り込んできた一群に遮られた。

「こっちだ、マノーダ.....ユーノ！」

振り向くと、マノーダを腕に抱えたアシャが、わらわらと襲いかかるカザド兵を切り捨てながら走ってくる。

「よし、いいぞ、アシャ！」

一瞬そちらに集まった注意、前後して玉座横の垂れ幕の片方から、イルファがどら声を張り上げつつ走り出し、巫女達を倒してナストの戒めを解く。その傍らにはアレノとレスファートの姿、巫女達の動揺が広がる中、ユーノはほっと一息をついた、そのとたん。

刺すような視線。

はっとして振り返った視界で、水盤の暗い水の中へ沈んでいく怪物の姿、そしてその掌に身を伏せながらにんまりと、勝利の確信に唇を釣り上げる『運命（リマイン）』の邪悪な笑みがまっすぐにユーノを射る。

（逃がさない！）

「ユーノ！」

「だめ、ユーノおっ！」

アシャの制止、レスファートの悲鳴、一瞬目に映ったのは、マノーダを抱えたアシャの姿。

それはまた、遠い彼方に訪れる、傷みに満ちた光景をも思わせて。

（私が、いなくても）

きっとセレドは安泰だ。

（でも、今こいつを逃がしたら）

きっと多くの人が傷つく。

「ユーノ！」

レスファートの懇願を耳に、身を翻し襲いかかる巫女達を打ち倒し、水盤めがけてユーノは走る。怪物の姿は『運命（リマイン）』もろとも今やほとんど水に没している、そこへ。

「馬鹿！ ユーノ！！」

アシャの叫びを振り切るように、ユーノは水盤に身を躍らせた。

3.死闘

時は少し遡る。

アシャはナスト達と別れた後、レスファートの手引きで、ユーノと『運命（リマイン）』がぶつかっている場所へと急いでいた。

（頼むから）

俺が行くまで無事でいてくれ。

強く何度も心の中で祈りを繰り返す、ラズーンのアシャ、ともあろうものが。

『運命（リマイン）』は生半可の腕でどうにかできる相手ではない。視察官（オベ）でも熟練した者ではないと逆に屠られることがあるぐらいだ。それもそのはず、『運命（リマイン）』は所謂『ラズーン』の暗部、こちらの手の内など知り尽くしているし、何より積年耐えに耐えてきた恨みと傷みが拍車をかけている。この世界を破壊してしまいたいという強い願いの前に、命や弱さ脆さへのためらいなどあろうはずがない。

（ユーノ）

その殺意の前に今ただ一人身を晒している相手を思っ、斬られてもいないのに体が痛む。

「！」

ふいにレスファートが体を強張らせてはととする。

「どうした！」

「イルファ、が、こっち、くる」

とぎれとぎれに訴えて視線を流した先で、数瞬後に華々しい派手な声で音が響き渡った。

「おーらおー、どけどけ！ どけよーっ！ くそ野郎ども!!」

前方の角を曲がって突進してくるのは、まぎれもなくイルファの姿、しかも腕に荷物のように一人の女を小脇に抱えて、さながら重量級の戦車だ。

「イルファ！」

「おお、アシャか！」

イルファはぱっと顔をほころばせた。

「こいつらをどうにかしてくれ、こうるさくてかなわん！」

「おまっ…」

追手はカザド兵と巫女達の混合軍、それをぞろぞろ引き連れたままアシャとレスファートの元へ駆け寄ってきたものだから、たちまり辺りが乱戦状態になる。

「きゃ」

「レス！」

危うく巻き込まれて切られかけたレスファートを咄嗟に引き寄せる。

「どうだ、アシャ、これがアレノだ！」

イルファは楽しげに手近の兵をぶち倒しながら、嬉しそうに声を上げる。

「美しいだろう！」

「女の自慢なぞ後にしろ！」

ユーノの安否が気にかかっているアシャの気持ちを逆撫でしたことに全く気づかぬ相手に怒鳴る。

「自分で多少は始末してこようとは思わなかったのか！」

「アレノがいるだろう！ 庇ってやらなくては！」

「なら、さっさとどっかへ逃げてしまえ、ユーノが危ないんだぞ！」

「本当か？」

この期に及んでなぜ嘘などつく必要があるのかと首を締め上げたいのを、切り掛かってきた二人を仕留めることで鬱憤をはらした。

「それはまずいな」

今さらのように、イルファもアレノを腕から降ろし、例の赤いリボン付きの大刀を振り回し始める。たちまち数人のカザド兵が吹き飛び、巫女達が座り込み、腰を落とした。

「くそ、手間取った！」

急所を一撃、操り人形の巫女達は当て身で落とし、アシャも次々と追手を倒し、最後の一人を倒すや否や身を翻す。

「ユーノはどうしたんだ」

「一人で『運命（リマイン）』を追ったらしい」

「まずいな」

「ああ、まずい」

「あ！」

レスファートがびくりと目を見開いて遠くの彼方を見る。

「ユーノ動き出した！」

「どこへ！」

「こっち！」

「アレノ姉さま!!」

イルファも加え一団となって走り出そうとした矢先、再び近くの通路から飛び出してきた者に立ち止まった。

「マノーダ?!!」

泣きながらしがみついていたマノーダは一人だ。

「ナストは？」

「あの兵達に捕まりそうになって。彼、囹になるって……でも、捕まっちゃったんです！」

「間抜けだな」

それをお前が言うのか、と突っ込みかけたアシャに、再びレスファートが緊迫した声を上げる。

「ユーノ、さっきイルファがいた広間にいる！ よくわかんないけど、こまって、る！」

「ナストも広間に連れていかれるな」

アシャは素早く考えをまとめた。

「よし。イルファはレスとアレノを連れてナストを助けてくれ。俺はユーノと『運命（リマイン）』を何とかする」

「わかった！」

広間と言えば、あの魔物（パルーク）と得体の知れない水盤がある。竦みかけた脚を放り出すように、アシャは残りを引き連れて広間に向かったのだが。

「ユーノ！」

ナスト奪回はうまくいった。広間の制圧もできる、後は退却だけ、そう踏んだアシャの目の前で、ユーノは振り返り、小さく笑った。

（え？）

ほんの一瞬の表情、甘い曲線を描いた唇が、不思議な穏やかさと切なさをたたえた黒い瞳が、何か言いたげにアシャを見つめ返したと思った次の瞬間には、身を翻して巫女達の中へ、水盤へ向かってまっすぐに走り出す。その先には、ごぼごぼと重苦しい水音をたてて沈んでいこうとする例の魔物（パルーク）と、掌に載る『運命（リマイン）』の姿。

「馬鹿！ ユーノ！」

ぞっとした。

何をする気だ、そう聞かなくても、もう振り返らない背中が、ためらうことなくまっしぐらに進む細い体が、アシャを見る見る置き去っていく。

「ユーノ!!」

自分の声が悲鳴じみている、そう感じた時には、ユーノの体が草の種が弾かれるように見事な弧を描いて、怪物が沈んだどす黒い水の中に消えていた。

（馬鹿な！）

「ぎゃあああ！」

周囲で絶叫が上がった。それまで手傷でおさめていた巫女達を容赦なく切り捨てて走る自分が止められない。魔物（パルーク）が姿を消すと同時に腑抜け同然に座り込んだ者は幸い、たまたまにせよ進路を遮った相手を片端から床に伏す。

「！」

水盤に辿り着いてまた、アシャは自分の頭がぽかりと空白になるのを感じた。

床から水盤へと点々と散る紅の汚点。

（怪我を、している）

ユーノが、怪我をしている。

「どうした、アシャ……おっ」
「これ…血、血だよ、アシャ！」
駆け寄ってきたイルファが唸り、レスファートがうろたえたように見上げてくる。
「ユーノ、けがしてるっ?！」
「ああ、そうだな」
自分の声が異常に平板だった。考える間もなく邪魔な衣服を脱ぎ捨てる。
「何をする気だ」
「この水盤はたぶん湖に繋がってる」
アシャが男だとわかって茫然としているらしいアレノや不安そうに眉を寄せるマノダを振り返り、
「ナストと一緒にマノダとアレノを村へ送っていってくれ。湖の方で落ち合えるはずだ。ユーノを助けて、天幕（カサン）に戻る」
そうできればな。
冷徹で理性的な自分がそう付け加えるのに軽く吐き気がした。
「お、おお、わかった」
どん、とイルファが胸を叩いた。
「アレノのことは任せておいてくれ」
恨めしげにナストがイルファを見やったが、それには構わず、背中を向ける。
「アシャ！」
レスファートがすがりつくように手を掴んできた。アクアマリンの瞳を潤ませながら、必死に訴える。
「ユーノ、どんどん湖の奥へ行ってるみたい、追いつける？」
「任せておけ」
薄く笑った自分がどんな顔をしていたのか、イルファがひくりと顔を凍らせる。
「イルファ、頼むぞ」
「わかった」
「アシャ…」
「大丈夫だ」
今にも泣きそうなレスファートの頭を一つ軽く叩いて、アシャは短めの剣を一振り手にし、底知れない黒い水に飛び込んだ。

一方、ユーノは。
(体が、凍りつきそうだ)
視界はほとんどきかなかった。どす黒く濁った水は、深く重く四肢を縛り体を押さえ込みにかかってくる。深く、なお深く潜っていく、その少し先にあの怪物が居ると気配が知らせる。体のあちこちの傷に水の冷たさがぎりぎり食い込んで、疲れ切った感覚を呼ぶ甘い眠りに引き込まれずにすんだ。
潜り始めてすぐ、水の抵抗を考えて長剣をおさめ、アシャの短剣だけを手にしていた。その手を先に伸ばすと、濁った泥のような水の中で短剣は淡い光を放っている。
(不思議な剣だ)
剣の輝きにアシャの黄金の髪を思い出して安堵し、続いて、水に飛び込む寸前に見たアシャとマノダの姿を脳裏に甦らせて、胸が痛んだ。
旅を終わらせた暁には見るのだろう。アシャとレアナが寄り添う、同じような光景を。
(幸せに、なって)
苦しい息をなお封じ込めるように唇を噛む。
(他の、誰よりも)
レアナと結ばれれば幸福なのだ。セレドで何度もそう聞いた。レアナを妻にすることは、男にとって至福の喜び、永遠の幸福を意味するのだと。ましてや、アシャがレアナを望み、レアナもまたアシャを望むのなら、そこに傷みのあろうはずもない。
(アシャ)
初めて自分の姿を忘れるほど心を奪われた人。
その幸福以外に何も望まない。
(どうか、どうか)
自分ができることなら、命かけて貫くから。
(幸せに)

固く眼を閉じ祈りを込め、振り切るように、強く唇を噛みしめて、再び眼を開く。

水盤からは微かな流れがあるようで、四肢をゆったりと広げて両手を動かすと、薄闇のような水の中をそれほど苦勞することなく運ばれてきた。自力で泳ぐよりはうんと速く深く潜ることができた様子、それでもかなり息苦しさが増してきたころ、ふいに周囲の雰囲気静まったのに体を立て直す。（水が、動かなくなった）

同時にわずかながら周囲に空間が広がり、視界が戻ってきたようだ。

（ひょっとして、ここは）

藍色に霞む水の色に覚えがある。

（忘却の湖？）

水盤の底が湖の中に続いているのだ、そう思った瞬間、前方に黒々とした塊が動いた。はっとする間もなく、『それ』が物凄い勢いで突進してくる。

（っ！）

思いきりぶつかられて、口から漏れた空気が銀の玉となって頭の上の方へ飛び散ったのが見えた。かろうじて腕を交差して受け止めたつもり、それでも水中であることを越えた衝撃に飛ばされ、くると体が舞う。乱れる視界の片隅で、突進してきた『もの』の背中にしがみつくと、黒い人影を見た気がした。

（『運命（リメイン）』！）

目を見開いたユーノは、叩きつけられる寸前で岩を蹴りつけて向きを変えた。通り過ぎた怪物が滑らかに身を翻し、再び真正面から突っ込んでくる。濁った水の中でも光る眼が、自分をしっかり凝視しているのを感じて、ぞくりとしたのを叱咤する。

（しっかりしろ！）

狙われるのが初めてってわけじゃない、怯えてる間に屠られるぞ。

（く、そ！）

怪物の背に掴まった『運命（リメイン）』の髪が、水流にわらわらと巻き上がっている。怪物とともに押し寄せてくる水圧に肺が押しつぶされそう。背後へ押し流されて岩と岩の間に埋め込まれそうになるのを、岩を蹴り直して必死に逃げる。何とか進路から外れたものの、暴れ狂う水流に飛ばされ、どことも知れない場所へ放り出される。

（くう、き）

水面を求めて見回した目と、怪物の金色の目が合った。互いに相手の意志を読み取り、同時に動き出す、ユーノは上へ、怪物はなおその上から行く手を遮ろうとして。必死に岩場をすり抜けて逃げる、急速に明るくなってくる水は、水面に近いことを知らせている。焼け付く肺に僅かでもいい、新しい空気を取り込みたい。

（もう、すこし、もう）

手を伸ばす、指先が一瞬水の皮膜を突き破りそうになる、瞬間、足首を握られた。

（っっ！）

振り向いた視界、いつの間に怪物の背中から離れていたのか、『運命（リメイン）』の冷たい笑いが間近にある。

「っぐ！」

とっさに蹴ろうとしたもう片足を掴まれ、両足をしっかり握られて、突然巨大な岩塊になったように重さを増した相手に、一気に水底へ引きずりこまれる。

「っあ」

ごぶっ。

ユーノの唇から残り少ない空気が溢れて、彼方の高みへ逃げ去る。

「！！」

干涸びて互いの組織を張り付かせたような肺の痛み、顔を歪めてユーノは『運命（リメイン）』を睨み降ろした。アシャの短剣を抜き放ち、体を潜り込ませてねじ曲げる、だがその意図を察した『運命（リメイン）』もまた、黒剣を手にとり体を伸ばし、水中とは思えない素早さでユーノの片腕を薙ぐ。

「ぐ！」

激痛に視界が眩んだ。

もわり、と黒い煙のように、ユーノの腕から水中に血が広がる。剣を放しかけたユーノを見つめる『運命（リマイン）』の眼、真紅の輝きが残忍な喜びをたたえて笑み綻ぶ。力をなくしたユーノを引き寄せ腕、勝利を確信したその時、『運命（リマイン）』に僅かな隙ができる。引き寄せられるのに乗じて咄嗟に短剣を構え直し、はっとして身を引く『運命（リマイン）』の肩を掴む。そのまま自ら水底へ突っ込むようにのしかかって、相手の胸に短剣を突き立てる。

「ぎゅ！」

『運命（リマイン）』がもがいてユーノの足首を放した。白く黒く不気味な泡を吹き出す傷口を押さえて沈む『運命（リマイン）』を蹴り、ユーノは一気に水面へ浮上する。

「ぶっ、はっ、は、はあっっ」

セレドには海はない。水練の必要性もなかったが、それでも敵に水面下に体を沈められることはあった。もし深い湖に追い込まれたら、そう考えて密かに呼吸訓練をしていたのが役立った。

荒い呼吸を繰り返しつつ、傷と冷水に痺れて無感覚になる右腕から、短剣を左腕に持ち代える。あんな一撃で終わる相手ではないだろう、そう思って転じた目に、水面下から急速に迫ってくる影がある。

（来たな）

こちらが助かったと安堵しているところを不意打ちするつもり、そう踏んで、思い切り息を吸い込み逆襲しようと潜ったとたん、目の前一杯に怪物の顔が広がった。

（速い！）

「っっ！」

反射的に短剣の柄を右手で支え、怪物にまっすぐ突き立てた。一瞬短剣が黄金に光り、怪物が激しくもがき暴れる。水が波打ち、ユーノの傷という傷をこじあける。

「あぁっ！」

跳ね飛ばされた、次にはもう水中深くに引きずり込まれていた。必死に吸い込んだ空気が圧力で口から零れる。かろうじて抜いた短剣が、左手の先で微かに輝いている。

ほんのわずか、意識が肉体を離れたのだろう。我に返った時には、背後から首を絞めつけられていた、抵抗しようとする右腕の傷を強く捻られ、激痛に悲鳴を絞り出して息を吐く。体が硬直し、視界が真っ黒になり、頭の中が闇に沈む、けれど気を失わない何か、ユーノの左腕を動かしていた。ゆっくりゆっくり水流を巻き起こさない、気配を消した緩慢な動き、だが、ある一点を越えたとたん、ためらいなく『運命（リマイン）』の脾腹へ貫き通さんばかりに、短剣の切っ先を突き入れる。

「ごぶぁぁぁあ！」

重苦しい絶叫を放って、『運命（リマイン）』がユーノの体を放そうとした、が、今度はユーノが放さない。食い込ませた短剣に渾身の力を込め、傷ついた右腕で相手を抱え込みながら、なおも深く突き込んでいく。

「がぶっがばぁ！！」

白く濁った煙じみたものが『運命（リマイン）』の傷口から広がり、焦げ跡のような裂け目がみるみる大きくなっていった。顔をひきつらせ、痙攣し、大きく口を開けて空気の奔流を吐き出しながら、『運命（リマイン）』はもがく、もがく、もがき続け、ふいにくたりと力が抜けた。抱えていたユーノの腕からも短剣からも、得体の知れない物体のように崩れて抜け落ちていく。

「っ…」

そのぞろりとした感触に無意識にユーノは震えた。

（人、じゃ、ない？）

あれはあれはまるで、なにか、生きている人形、のような。

（あれは、一体）

何、なんだろう？

（あんなものが、世界に居る、なんて）

ぞくぞくするのは水中だからではない、恐怖や痛みだけでもない、命の根源を否定されるような不安のせいだ。

（なぜ、あんなものが、存在するんだろう？）

ふいに湧き上がったその問いに、アシャの姿が重なるのは、この手にした短剣がアシャのもの、だからだろうか。

そのまま、岸から捨てられた金銀財宝があちらこちらに点在する水底へ、『運命（リマイン）』の体は土人形のように二つ、三つ、五つと砕け、やがて数え切れない無数の破片となって融け落ちていく。

(とにかく、やった、んだ...)

それを見下ろしながら、ユーノは襲ってきためまいをこらえた。体力も気力も限界だった。のろのろと上空へ向けて水を掻き始める。少しでも速く水面に辿りつかなくてはならないと思うのに、それがひどく難しいことのように思えた。揺らめく視界、揺らめく髪、ふわりと顔を包む、その瞬間。

(！)

本能が警報を鳴らした。

「つつっ！」

振り返ると、すぐ真後ろに怪物の顔、とっさに振り上げた短剣が、眩い金に輝きながら怪物の眼と眼の間に突き立つ。だが、怪物も怯んではいない、深く体を折り曲げ、ユーノを二対の枯れ枝のような手で掴んだ。そのまま左右に引き裂こうとでもするように、ユーノの体を両側へ引きながら剣からユーノをもぎ離す。

「っ！...、...一っ!!」

ユーノは激痛にもがいた。唇から残り少ない空気が吹き出る。必死に怪物の眉間に突き立てた短剣を取ろうとするのに届かない。視界が曇るのは意識が遠のいているせいばかりではない、水中に広がる血、ユーノの傷が吐き出す命の残量。競り上がってくる呼吸、怪物はまだまだ余裕だ、剣を額に受けたまま、ユーノを捕らえて抱え込み、水底へ引きずり込んでいく。

(いや、だ...ここで、死ぬ、なんて...っ)

いつ死んでもいい、全力を尽くしていればいい、どこかでそう覚悟を決めていたはずだった、なのに今、脳裏を横切り煌めき、幻のように切ない叫びに繋がるのは、アシャの黄金の髪、深く透き通った瞳、あの色をもう一度、そう思う願い、ただ一つ。

(いや、だ、ああ...っ)

自分の体を必死にまさぐって、長剣に触れた。怪物に効果があるとは思えない、だが素手で殴るより虚しい蹴りを繰り返すよりはましだと信じたい。痺れる右手で剣の柄を探る。指が触れ、掴みかけ、逃す。

「く...」

水温がいきなり落ちた。水の色も光の差し込まぬ暗く重い澱みに似た色が、すぐそこ、足先にまで近づいてきている。底へ底へ、怪物は潜る。きっとそこに棲み処があるのだろう。右手がようやく柄を包んだ。指先を丸める。力が入らない。水圧が、水温が、水の中に秘められた見えない力が、ユーノの力と気力を削ぎ落としていく。他の手足から力を抜く。なお強く握り締められ、ごう、とまた唇から悲鳴まじりの空気があつという間に頭上に飛び上がって消えていく。肺に空気はもうほとんど残っていない。苦しい息を呑み込み、怪物の動きをはかる、呼吸をはかり、気配を読み、なお深く潜ろうとした一瞬に、一気に体を掴んだ手を抜き放った剣先で払った。

「ぎょおおああっ!!」

耳を圧する轟音、水中に響き渡った衝撃が水圧を伴った波となってユーノの脳味噌を叩きつける。絶叫を繰り返しながら、怪物が手を振り回し、ユーノを絡んだしつこい水草のように何度か岩に叩きつけながら振り放した。激突しなかったのは水中の緩衝力と幸運、それでも呼吸も意識も何もかも吹っ飛ばされる。

「！」

上はどこだ。

「！」

外はどこだ。

「！」

誰か、止めて。

「！！！！.....」

やがて、数瞬が過ぎた。

気がつけば、ただ一人で水中に漂っていた。

(生きて...る...)

怪物をやっつけたのかどうかはわからないが、とにかく側には居ない。のろのろと周囲を見回したが、濁った暗い水の中に、ユーノ以外に動くものはないようだ。

と、視界の端をきらりと何かが光った。小魚か何か、そう思って視線を動かしていくと、凍りついたような右手がまだ長剣を握りしめていて、その切っ先がきら、きら、と微かに光を跳ねているとわかる。

(水面.....近い.....?)

右手を少し動かしてみる。揺れた切っ先がまた、光を跳ねる。いつの間にか夜明けを迎え、怪物とやりあっている間に水面近くまで浮き上がっていたのかもしれない。

(くう、き)

気を失いそうになりながら、上を見上げる。どちらが水面に近いのかよくわからない、けれど長剣が次第に光を増していくようだから、浮き上がってはいるのだろう。

髪がゆらゆらと顔にかかり視界を遮る。振り払う気力もないし、水を掻く力も残っていないが、瞬きすると髪のゆらめきとは違った波が動く気がする。水面を吹く風の動きか、それほど戻ってこれたのか。

(も.....す.....こし.....)

次の瞬間。

底から湧き上がってきた水流に乗った気配が、いきなり背後に実体化した。がしりと掴まれた胴、無理矢理振り向かされた視界に映ったのは眉間に突き立つ金色の短剣、今度こそ逃れる気力も体力もない、とっさに長剣を握りしめるユーノを怪物は残った一対の手で易々と捕まえ、ぎりっ、と力を込めた。

「い...!!!」

相手の方も死の寸前まで来ているようだった。鈍い光をたたえた瞳が表現し難い残忍な色を浮かべてユーノを見返し、最後の気力を絞るようにユーノを掴んだ指に渾身の力を込め続ける。

「!!.....!!!」

指先の鋭く光る爪が深々と肋骨の隙間に、脾腹に、肉も骨も断ち切ろうとするように食い込んでくる。終わることのない激痛、今感じるそれよりもなお強い激痛、それを越えるより鮮烈な痛みの感覚に意識が砕けた。

「うあああああああああ一つっっ！」

絶叫する。手にした剣があっさり抜け落ち、一気に暗闇に消えていく。吹き零れたのは涙か血か、それとも命そのものか。体に残る空気を全てを吐き尽くしても、痛みはなおも鋭く閃光のように砕け続ける。

(!!!!)

視界はなくなった。握りしめた意識の破片もぼろぼろと崩れ落ちる。

(!...!)

千切れていく。

砕けていく。

自分の全てが。

(.....)

残ったのは、深くて安らかで、静かな闇だけだった。

(!)

ふいに頭を貫いていった痛みのアシャは眉をしかめた。

アシャの短剣が持ち主を失い、主を探して呼んでいる。どこかに置き去られ捨て去られているのだ。

(まさか、ユーノ)

ぞくりと身を震わせて、アシャは泳ぐ速度をなお早めた。

あの短剣は視察官(オペ)の持ち物だ。力を増幅し、命の均衡を破る働きを強めている。それが、『ラズーン』の力で限りなく巧みな制御を保っている『運命(リマイン)』の体に効果的なのは、その回復よりも速く組織を分解していくからだ。危険極まりない代物、だからこそ視察官(オペ)一人一人に条件づけられ、万が一奪われるようなことがあったとしても、視察官(オペ)が許可しない相手であったなら、短剣は必ずもとの主に所在を知らせる。

その短剣が今、誰の管理下にもないとアシャに所在を訴えている。

(ユーノがあれを手放すはずがない)

武人ならば、誰でも獲物へのこだわりは持っている。ましてや、ユーノがああ短剣を祖末に扱うは

ずもない。

それでは？ それはということなのだ？

アシャは必死に痛みの方向へと水中を進んだ。痛みはますます強くなり、距離が縮まっているはずなのに、前方にはユーノどころか、あの巨大なガジェスの影も形もない。

(ユーノ！)

堪え切れず、胸の中で強く呼んだ。

(どこにいる！)

水は静かだ。戦闘の気配は残っていない。ユーノは無事に切り抜けたのか、それで短剣を手放す羽目になったのか。それならいい、それの方がずっといい、けれど危機感は募るばかり、短剣の伝えてくる強い痛みが悲壮感をかきたてる。

(どこにいるんだ！)

これほど苛立ったことはない。これほど不安だったことはない。

数々の戦闘を指揮してきても、これほど自分の無力を感じたことがない。

(生きていてくれ)

死なないでくれ。あんな形で、俺を置き去りに、一人で逝ってしまわないでくれ。

(探すしかできない)

他には何も、そう、祈るだけ。

(滑稽だ)

みっともないにもほどがある、だが。

(ユーノ！)

胸が願いを叫び続ける。

やがて前方の深みにぼうつとした黒い塊が見えてきた。岩に引っ掛かったせいで、それ以上沈まずにすんでいる、その不安定な姿勢でぐたりとした塊の端にきらきら光るものがある。

「っ！」

見間違えるはずもない、身を翻して塊に近づき、それが息絶えたガジェスと気づく。

巨大な怪物の眼には既に薄い被膜がかかっていた。アシャが泳ぎ寄っても身動き一つせず、とっくの昔に事切れているとわかる。致命傷は眉間に突き立った短剣、額を左右に断ち割るかのように深々と刺さった正確な一撃、ガジェスの唯一の急所がここだと知っていたとしか思えないほどの見事な一撃、だが、それを遂げたはずのユーノの姿がどこにもない。

(どこに...)

周囲を見回し、泳ぎ回り、岩陰や絡まる水草の間に傷ついた姿を見つけられないかと探したが見つからなかった。もちろん、遥か上空、水面近くに至るまで、人影はない。

(ひょっとして)

ガジェスの顔を踏みつけて短剣を抜いた。固まり切っていない血がゆらゆらと立ち上り、冷えた水をより冷やし、汚していく。よく見ると二対あるはずの手の一対がない。切り落とされた傷口、一緒にいた『運命（リマイン）』の姿もない。

(殺られたか、相打ちか)

ガジェスの体に立って、端から底を覗き込む。暗く濺み光を拒む水底へ、ガジェスの体から零れ落ちた重い血が岩を染めながら流れ落ちていくのが見える。やはりユーノの姿はない。だが、なお底へと目を凝らすとそこに。

「...」

さながら枯れ枝に絡まれたように、ガジェスの手に引き裂かれて残る、見覚えのある衣の切れ端を、アシャはぼんやりと眺めた。

(この、底か)

潜るなら、酸素発生剤がいる。

のろのろと向きを変える。

息苦しさに焼け付く胸がどうでもよくなった。

(何と言う失態、アシャともあろう視察官(オペ)が)
手にした短剣の輝きを眺める。
(レスファートに、何と言う?)
脚の下にあるガジェスの硬直した体を見下ろす。
(ラズーンにどう申し開きを?)
貴重な『銀の王族』を太古生物に殺されてしまいました、ええ私はついておりました、ラズーンの
アシャが、視察官(オペ)屈指の私が。
(貴重な)
相手を。
(かけがえのない)
世界にとって、ラズーンにとって。
(ユーノを)
俺は失った。
「つつつつつ！」
ふいに込み上げた激しい怒りに我を忘れた。
短剣を逆手に持ち、一気に足下へ突き立て、ガジェスを貫き、そのまま激情を解放する。
「つつつつつああ！」
口から溢れ出す空気と絶叫、ガジェスの体が膨れ上がり圧力を高め。
「あああああ！！！！」
爆発するように飛び散る。
水が泡立ち、周囲が一気に血潮に濁り、視界を闇が閉ざし、怒りが思考を沸騰させる。
(俺は、俺は、俺は)
一体何をしている。
(付き人じゃないのか、主じゃないのか！)
選んで側に侍って、なのになんだこの無様な結果は。
何度も仲間の死に立ち会った。作戦のミス、思わぬ突発事態、無茶をする部下、異常な状況、急激
な展開と緊急退避。それでもその経過は、その時選べる最善の道だったと今でも言い切れる。自分の
根本的に虚しい命でも、それもまた世界の在り方の一つなのだと受け入れてきたと同じように。
だが。
(ユーノ！)
鼓膜を破る自分の悲鳴を聞いている。
(ユーノ！)
吹き零れる涙が湖の水を増やすほどに思える。
(ユーノお！)
嘆きが幼いの気づいている、それはレスファートの声と同じ、逆らい難い運命に向かう自分の小
ささへの怒りだ。
周囲から吹き飛んだ屍体と岩と水草がばらばらと振り落ちてきた。アシャの周囲を真っ黒な雨のよ
うに満たし、より深い水底へ落ちて落ちて落ちていき……。
やがて、水が冷ややかに澄んでいく、まるで何事も起こらなかったかのように。
「……」
アシャは静かに顔を上げた。
遠い水面が明るく光を帯びている。
短剣を持ち上げ、鞘に納める。
自分の心が固まり、凍りつき、動かなくなったのを感じる。
残ったのは強烈な殺意。
(殲滅してやる)
薄く笑う自分に制御が外れていくのがわかる。
(『運命(リメイン)』全て)
その前に。
「……」
砕けた岩がなおも転がり落ちる水底をそっと見下ろす。
(もう一度潜る)
酸素発生剤を取ってきて、ユーノを探し出して、全部拾い集めて。

(それを手に)

ラズーンへ戻る、全ての覇者として進むために、あそこに納められた力を取り出すために。

岩を蹴り、まっすぐ水面を目指して浮き上がっていく。

(ユーノ)

どうして俺は。

(ユーノ)

お前の側を離れたりしたんだろう。

(主なの)

付き人失格だ。

「っ、ぶはっ」

水から跳ね飛ぶように顔を出し、さすがに整わない呼吸を繰り返しながら泳ぎ出す。思った通り、夜明けを迎えた空は白々として、斜め左にイルファ達がいる天幕（カサン）の周囲にも人影が見える。今しがた、アシャが湖の中で発した気に気づいた者も居るのだろう、そう思ったとたん、視界の端にちらりと白いものが翻った。

「？」

岸へ泳ぎながら頭を巡らし、樹間の中へ紛れ込む白馬を見つける。軽く振り向いた顔にある目はたった一つ、その異形を隠すようにすぐに姿を消していく。

(ミネルバ?)

妙な予感がした。

もう一度天幕（カサン）の方向を見やると、確かに人影が集まっている、けれどそれは湖のアシャを見ているのではなく、今水から引き上げられたような誰かを取り囲んでいるとわかる。

(まさ、か！)

胸が躍り上がる。慌てて水を掻き、最後は倒れ込みそうなほど体を急かして駆け寄っていくアシャに、レスファートが振り返った。

「アシャ！ ユーノが！」

言われるまでもなかった。

イルファ、レスファート、ナスト達の前に崩れ込むように座っている姿、血と水に濡れそぼった体をのろのろと振り返らせた相手が、アシャを見つける。

「ユーノ！」

「あ...しゃ...」

「っっ！」

微かに笑ったその顔に、差し伸べた腕に崩れ込んできた体に、アシャの血がたぎった。

「ユーノっ！」

「レス、寝床の用意を！ イルファ、俺の袋を！」

悲鳴じみた声を上げて取りすがろうとするレスファートを押しのけ叫ぶ。幾筋もの刀傷、脇腹を胸を引き裂く爪痕、ぼろぼろになっている衣服は血に塗れ、今もますます赤みを濃くしていく。

「あの、私達は」

「布と火を！」

うろたえるナスト達にも指示を下す。

呼吸が弱い。体温がない。血が止まらない。

またこんな姿になっている。またこんなことをしている。

「っく」

腹立たしさと、けれど見て取った傷がアシャの対応出来る範囲だと知って湧き上がった喜びとで叫びたくなるのを、必死に堪えてぐったりとしたユーノを抱き上げ、火が準備できるまで抱き包む。

「ユーノ...ユーノ」

囁く声に相手はわずかに反応した。薄く目を開ける、それだけで甘く広がる興奮にアシャはくらくらする。

「ユーノ、もう、置いていくな」

懇願は届こうと届くまいと構わない。

「俺を、置いていくな」

お前を失いたくない。

「一人で、行くな」

俺を連れていけ。

「どこでも、いつでも」

俺を側に。

「頼むから」

そうすれば、もうこんな思いはしなくて済む、二度とあれほどの孤独と怒りを味わわなくて済む。

「アシャ、ねどこ、できた！」

「火、起こせました！」

「よし！」

動くぞ、ちょっと痛むが、すぐに楽にしてやるから。

「ん…」

小さく頷く顎、せわしく繰り返す呼吸、額に髪が張り付いていて、激痛を堪えているのだろう、眉を潜めた表情が愛おしく切なく、胸苦しくて、閉じられた瞼に唇を当て、アシャはユーノを抱き上げて天幕（カサン）へ入った。

夜半。

「どうした、レス？」

天幕（カサン）の外でじっと湖を見つめているレスファートに、イルファが声をかけてきた。側で揺れる火、今夜はイルファが火の番、レスファートはそれに付き合うとくつついている。

「ユーノが心配なのか？ アシャがついてりゃ、大丈夫だぞ」

「ううん」

覗き込む無骨な男の顔に笑み返す。

「そうじゃなくて」

首を振って、頬にかかったプラチナブロンドをそっと指で払う。

「ユーノ……アシャ見て、笑った」

「あん？」

「ぼくらには、平気だっていって……あんなに苦しそうだったのに、大丈夫だっていって」

今にも倒れそうだ、そうわかるのに、ユーノはなおも平気だと繰り返そうとして。

「鈍感なのかね」

「ちがう、苦しかった、うんと、痛くて」

体を起こしているのも、きついほど、なのに。

レスファートを気遣って。そのいたわりがレスファートにまっすぐ届いてしまうのさえ、気づかないほど弱っていたのに。

「アシャ見て」

笑った。

「すごく、きれいに」

今まで見たより、うんときれいな顔で。

「そうだったか？」

「うん」

湖は静まり返っている。そこでどんな死闘が繰り広げられたのか、レスファートには想像するしか術がない、けれど。

ユーノがあれほどぼろぼろになるほどの出来事だったはずなのだ。

それも幻のように呑み込む湖の深さに、レスファートはかすかに震えてイルファに身を寄せる。

「それがどうした？」

「わかんない……でも」

イルファががしりと頭を掴んで撫でてくれる。

「むねが、くるしい」

「食い過ぎか？」

「ユーノがきれいに笑って、うれしい、のに」

「うん」

ごしごしと頭を撫でる大きな手に甘えて、レスファートは眉を寄せて目を閉じる。

「くるしくて」
かなしい。
胸の中に響いた小さな声はこう続ける。
ぼくじゃ、やっぱり、だめなんだ。

「よし」
アシャはようやく溜め息まじりに体を起こした。
さっきまでひそひそと聴こえていたレスファートとイルファの話し声も聞こえなくなった。暖を取りながら火の番をしてくれるというイルファに甘えたのは、ユーノの容態が急変した時に清潔な湯がいるかと考えたからだ。
ユーノは今、全身包帯とリバテープに包まれるような状態で、呼吸を荒げながらぐったりと横になっている。熱はあったが、傷からすれば不思議なほどの安定した回復力、いや、それだけではなく。
ふ、と天幕（カサン）の外に気配が動いた。
「やはり、あなたか」
『そなたの想い人と思うて助けたのではないがな』
アシャの低い問いかけに、イルファ達と反対の方向から、暗く陰鬱な響きのミネルバの声が戻ってきた。
『まこと、たいした娘よのう。ガジェスの爪に挟まれて息絶えたかと思うておったが、いつの間にやら水面まで浮き上がっておったわ。私がしたのは、そこから岸へ運んだまで、礼には及ぶまいよ』
「いや」
アシャは静かに首を振った。
「私にとっては百万の礼に値する」
『ほ...ほほ』
天幕（カサン）の外の気配は、陰惨な笑い声で応じた。
『まさかのう、アシャから、そのようなことばを聞けるとは思わなんだ。それほど、その娘が愛しいか』
「.....愛しい」
ふいに、その思いが胸に強く激しく広がって、アシャは痛みに眉を潜めた。
『これは又、素直な』
ミネルバがからかう。苦笑して応じる。
「自分でも不思議に思っている」
『違うない』
ミネルバはしばらくくつつつと嗤っていたが、口調を改めた。
『ラズーンの二百年祭は近い。「運命（リマイン）」も本格的に手を繰り出してこよう。狩りにはいいが、そなた達には辛いな』
「視察官（オベ）の名にかけて、ユーノは無事ラズーンへ送り届けてみせる」
『ほう』
間髪を入れずに答えたアシャにミネルバが冷たく嗤う。
『アシャの名にかければ、その後のことも誓えるだろう。さすればその娘の体も心も思うがままだぞ』
「ミネルバ」
それをあなたが言うのか、と苦ると、用心深い男だなと返された。
そのまま気配が消え、辺りは再び静かな夜に戻る。
（体も心も思うがまま）
ミネルバのことばを頭の中で繰り返しながら、床のユーノを見やる。
「体は、まあ」
つぶやいた自分の声の妖しさに居心地悪くなったが、心はどうだろう、とごちてみる。
「無理...かもしれない、だろ」
我ながら気弱な台詞だ、と溜め息をついたとたん、ユーノが身動きした。
「み...ず...」
「ちょっと待て」
アシャは近くの壺から水を掬い出し、当然のように口に含んだ。熱で意識が朦朧としているユーノの微かに開いた唇に、そっと口づけて水を送る。

だがユーノは、何をしようとしているのかわからないらしく、薄く開いた黒い瞳に虚ろな優しさをたたえて、アシャを見つめ返す。その瞳の潤んだ優しさに、逆にどぎまぎした。

「ん…」

少し強く口を押し付けて相手の唇を開く。僅かに抵抗しようとしたユーノは、口の中に流れ込んできた水にようやく気づいたのだろう、目を閉じてこくん、と飲み下した。そのまま喉へ流れた潤いを求めて、貪るようにアシャの唇に吸い付いてくる。

(ユーノ)

これは手当て、気持ちも感情も伴わない緊急措置のようなもの、そう言い聞かせつつ、重ねた柔らかさにアシャもまた目を閉じて夢中になっていく。

(ユーノ)

いつか互いを求めあって、こんな風に唇を重ねることなどあるのだろうか。その時、ユーノは確かにアシャだと、そう感じつつ唇を与えてくれるのだろうか、今の自分がユーノを感じながら口づけているように。

アシャの口から受け取れるだけの水を受け取って、ユーノは静かに口を離した。ぼんやりとした顔で、熱っぽい体をアシャの腕の中にそっと委ねてくる。

「もういいか？」

問いに微かに首を縦に振る。そのまま、重く息を吐きながら、甦った痛みを堪えるように体を竦めるユーノを、そっと抱えて包み込む。熱が立ち上らせるユーノの体の香りが、自分の腕の中で豊かに熟していくような気がして、とても手放せない。

(もっと欲しがってくれ)

俺を。俺の全てを。

口に出せない、状況に不似合いな渴望を胸に押し込めようと目を閉じると、脳裏に蒼白な顔で笑ったユーノの顔が過った。

(すぎるような、目)

今にも崩れ落ちそうな、セレド皇宮でほんの一瞬わずか数回、感情を自制し損ねた時のみ揺れた、深くて脆い眼差し。手を差し伸べずにはいられない、その目をユーノはめったに見せようとしな

(だがもし)

それを見た者なら、その目に見つめられたなら、人は魅かれるに違いない、この相手を支えられるのは自分しかない、そういう自負に煽られて。

(それでも)

ユーノを支えるのは並大抵の覚悟でも努力でも無理だ、そうアシャにもわかりつつあった。何よりこの気丈な魂は、容易には人の手を受け入れない、想いを、願いを受け止めようとしな

「あんまり、無茶をしないでくれ」

無駄だとわかっているが口にした。

「俺の方がどうにかなりそうだ」

危うい境界を、自覚のないまま越えそうになる。

胸に頬を預けて、静かな寝息を紡ぎ出した相手を、力の限り抱き締めたくて、必死にこらえながら床に降ろした。

「あ、つ…っ」

はっ、と呼吸を乱して、ユーノがアシャを見上げてくる。

「痛むか？」

「大丈夫」

苦しそうに笑う顔に、またこいつは、と苦笑しながら、馬の上から静かにユーノを抱え込んだ。下でユーノの体を差し上げているイルファがぎゅっと力を込めて、びくりとユーノが体を震わせる。

「ねえ、もっとそっとして、おねがいだから」

レスファートが不安そうに見守る前、イルファは鷹揚にうなずきながら、アシャの腕にユーノを任せる。

ユーノの傷はガジェスにやられた腹部のものがひどかった。天幕（カサン）では十分に回復しきれないだろうと、ナストが自分の家を宿にと勧め、それを有難く受け入れて、ユーノ達は今ナストの家へ移動しようとしている。

「もたれろ。…苦しいのか？」

「ちょ……と……ま……て」

ユーノはきつく眉をしかめて、一気に膨れ上がった痛みに耐える。体を抱えてくれているアシャの腕の温かさがなければ、激痛に血の気が引きそうだ。

「……ん……いいよ」

「よし」

苦しかったらすぐに言えよ、そう言って、アシャが馬を進め始めた。振動が一つ一つ堪えるが、ナストの家までは結構な距離があり、車なども碌にないとのことなので仕方がない。

「レス」

「はい！」

イルファの差し出した手に掴まって、ひらりとレスファートがイルファの馬に乗る。

乗り手がないヒストが不満そうに進み出した一行の後から付き従ってくる。

「イルファ……何か……不機嫌…だね」

痛みから気を逸らせようと、ユーノはアシャを見上げて笑った。

「ああ」

にやりとしたアシャが、

「実はアレノに恋人がいたことがわかったんだ。お前が寝てる間に天幕（カサン）へ訪ねてきてな。

イルファの落胆ぶりときたら、そりや大変なものだったぞ」

「あは…そりや……かわいそ………つ、つ」

思わず笑いかけて、ユーノは腹を押さえた。

「……それより、ユーノ」

馬を進めながら、アシャはふいと前方に逸らせた。

「お前、湖から上がってきた後を覚えていないって？」

「うん…」

ユーノは少し目を閉じた。

体が熱っぽくて、頭の芯が重くてだるい。

身も凍る湖の中の戦いでユーノが覚えている最後の出来事は、ガジェスに危うく握り潰されかけたことだった。食い込む爪と激痛、流れていく血と…。

ひやりとした黒い影が体の内側を駆けて、まだ湖の中にいるような気がして、慌てて目を開く。再び自分を見下ろしているアシャの顔が淡く陰になっている。

「まったく？」

「うん」

どこか不満そうな響きでアシャが続ける。

「ほんとうに？」

「この間…目を覚ますまで……ね。……迷惑、かけたんだろう……？」

あ、と思いついてユーノは謝った。

「手を……わずらわせて……ごめん」

「……いや」

そうか、とアシャが何とも言えない奇妙な表情になって、小さく溜め息をつく。

「何？」

「いや、何でもない」

もう一度小さく息をついて、その後はむっつりと黙り込んだまま、馬を進める。

（本当は）

ユーノは薄ぼんやりとした夢を覚えている。

内容は詳しく覚えていないが、それを思い出そうとすると、なぜかふんわりとした安堵が心を温める。

（きつといい夢だったんだ）

いい夢なのに覚えていないのは惜しいな。

（何かとても、いい………アシャが出てきたような、気がするんだけど）

アシャのすぐ近くに居て、その顔を見て笑っていたような気がする。安心して、気持ちが楽になって、ああ、このままここでずっと居られるといいのに、そう思ったような。

（ふっきろうって考えたのに……情けない）

唇をそっと噛む。その視界の端に抱えてくれているアシャの腕を、頬にしっかりと支えてくれている胸を感じる。

（レアナ姉さまの場所、なのに）

今はユーノが一人占めにしている。怪我をしているから。身動きできないから。誰に言い訳せずとも、誰に申し開きをしなくても、ただアシャが優しい医術師であるという理由だけで。

(ただ、それだけ)

「っ」

「ん？」

ふいにこぼれた涙を、とっさにアシャの胸に顔を埋めるようにして隠す。

「どうした？」

「ちょっと」

光が、まぶしい。

何もかもあからさまにしてしまう叡智の姿が、太陽の光となって降り注ぐようで。

これは一瞬の夢だ。

これは一瞬の幻だ。

温かな安堵も、優しいいたわりも、本来受け取るべきはレアナ・セレディス、それを忘れないようにしなくては。

「大丈夫か？」

「大丈夫」

唇を笑ませ、声が震えないように声を張る。

「ボクは、いつも、大丈夫、だ」

「こらこら」

そういつてまた無茶をするんじゃないぞ。

微かな笑い声に、ほんとそうだね、とつぶやき返す。

そのユーノの髪を撫で、風邪が柔らかく吹き過ぎていった。

4.視察官達

「ユーノ！」

扉を開けたとたん、視界に飛び込んできた光景にアシャは声を上げた。

「何をやってる」

「着替えてる」

むっつりした顔で答えて、ユーノはチュニクを被った。腕を伸ばす際に包帯の下の傷口に痛みが走ったのか、軽く眉をしかめる。

「ばか、まだ無理だ」

アシャは慌てて手にしていた盆を近くの机に置いた。朝食にと準備されたスープとパンだ。

「、だって...！」

一瞬声を飲み、じれったそうにことばを続けるユーノに近づき、アシャは厳しく言った。

「どれほどひどい傷だったのか、わかってるのか。.....生きてた方が不思議なくらいだったんだぞ」

(ほんとうに、無茶ばかりする)

眉をしかめてユーノを見ると、ちらりと一瞬視線を上げたユーノが苦しそうに顔を背け、唇を噛んだ。うつむいてしばしの沈黙、やがて、

「サルトみたいになるのはごめんだ」

ぼつりと低くつぶやく。

「サルト？」

アシャにとっては聞き捨てならない名前の一つ、確かユーノの前の付き人だったはず、と思い返した。

「突然家に戻ったとかいう」

「戻っていない」

アシャの顔を見返さないまま、ユーノはベッドから離れて窓辺に近づく。差し込む日差しで顔を洗おうとでもするように身を乗り出しながら、

「ボクの身代わりになった」

「...」

「その時、やっぱり怪我をしてて、十分に治りきっていなかった.....ううん、完全に回復させようと珍しくゆっくり時間をかけて休んでいた」

なまっちゃったんだよね、きっと。

小さく笑う声は冷たい。

「カザドが狙ってたのを忘れていなかったのに、ちゃんと休めるまで待つはずもなかったのに」

襲われた時、自分の身も守れなかった。間拔けたことに剣もベッドに備えてなかった。

「転がって逃げて、逃げて、でも逃げ切れなくて」

もうこれまでかと身を竦めた矢先、サルトが飛び込んでカザドの剣を受け止めた。

「ボクなんかのために、盾になって」

本望なんだってさ。

「本望ですって。付き人の本分です、って」

窓になお強く乗り出したユーノが目を細める。その頬に涙は伝わっていない。だが微かに震える指先が、怒りを堪えて窓枠を握り締めている。

「...くそくらえっ...」

激しい語調で吐き出されたことばは苦くて厳しかった。

「ボクのために死ぬのが本望なはず、ないだろ。ボクのために死ぬのが、付き人なはず、ない」

なのに。

なのに。

「.....ボクのためなら、死なないで、ずっと生きて、側、に」

(くそくらえ)

ユーノの切ないことばにアシャはぶすりと唸る自分の内側の声を聞く。

だからユーノは付き人を拒むのだ。だからユーノはいざとなったら、アシャが自分を捨てて生きのびてくれなどと願うのだ。

(本望じゃないか)

おそらく、そのサルトという男は心底ユーノに仕えたのだろう。唯一の主として認めていたのだろ

う。

（そんな相手のために、命をかけることができたら）

日差しの中でしばらく寝込んでいたせいでなお華奢になってしまったように見えるユーノの後ろ姿に、苛立たしさと悔しさを感じる。

（これほどの想いを向けられたなら）

アシャだってすぐにユーノの盾になってみせる、機会さえ与えてくれたなら。

だがユーノはそんなアシャの気持ちを全く気づいていない顔で続けた。

「ボクは、ボクを大事にしてくれる人が苦しむのは嫌だ」

ましてや、ボクのためなんかに死ぬのはまっぴらだ。

「.....俺やイルファの腕があてにならないのか？」

僅かに振り返った視線に、ようやく自分の番を感じてアシャは溜め息をつく。

（なのに、これだ）

アシャをサルトほどの距離に近づける気さえないらしい。

「...そんなことはないよ」

ユーノはうっすらと赤くなった。

「ただ、カザドが『運命（リマイン）』と組んでる.....多勢に無勢なら、のんびり休んでられる場合じゃないってこと」

淡々と応じて、再び何かを探すように遠くの空を見上げる。

そうして普通に振る舞っているのもかなり苦しいはずだ。三日大人しくしてはいたが、傷は治りきっていない。化膿していないだけ幸いだった、それだけだ。熱はまだ下がっていないし、回復していないのは食欲の戻りが悪いのでもわかる。レスファートの懇願に渋々じっとしていたが、どうにも耐え切れなくなったというところだろう。

（仕方ない）

アシャは吐息をついた。言い聞かせて頷く相手でもない。

さりげなくスープに白い粉を落とし入れる。すぐに溶けて粉が見えなくなったスープを軽くかき混ぜ、

「わかったから、こっちへ来て座れ。ちゃんと食べる、そう約束したはずだな？」

「う、ん」

ゆっくりと窓際を離れたのは、食欲がないだけではない、そんな動きさえまだ早くこなせないのだ。

どこか危うい足取りで近づいてくると、ユーノは崩れるようにベッドに腰を落とした。呼吸が弾んでいるのを必死に堪えてごまかそうとする。

（がたがたの体のくせに）

だから、こういう手も使わざるを得ない。何食わぬ顔で薬入りのスープを差し出す。

溜め息をついて、ユーノが中身を掬って一さじ一さじ呑み込んでいく。

「ん...おいし...」

満足そうな甘い声が零れた。

「マノーダって料理がうまいんだね」

「ああ、ナストもそこに惚れたらいいな。三日手放しでのろけられていたから、どんな料理がどううまいか、俺でも説明できるぐらいだぞ？」

「ふふ...っ」

どこか寂しく響く声で笑って食事を終えたユーノが、ふわ、と小さなあくびを漏らした。

「あ...れ...」

「どうした？」

素知らぬ顔で尋ねる。

「ん...どうしたのかな.....」

ユーノはとろんとした顔で瞬きした。

「なにか.....急に.....ねむく...」

「っと」

ふゆふゆと倒れ込んだユーノの体を、アシャは軽々と支えた。その肩にユーノが頭をもたせかけてくる。柔らかく首筋をくすぐる髪に、アシャは薄く笑う。

「役得だな」

本当ならそのまましばらく抱き込んでいて、温もりや吐息を楽しみたいところだが、傷によくないのは重々承知、くうくうと気持ちよさそうな寝息をたてだしたユーノを、少々未練がましくゆっくりとベッドに横たえる。

「いくら俺の腕が良くてももたんだろ？」

独り言は使った薬の性質の悪さに対する言い訳だ。

「まあ恨んでくれても全く構わんが」

それだけ俺にこだわり執着してくれるということだからな、とにつこりしかけて、はたと自分の願いの屈折に気づく。

「ああ、いや、そうじゃなくてだな」

できればサルトのように、自分の命を任せて悔いない相手とか。

いやもっとはつきり言ってしまえば、唯一自分の全てを開こうとする相手とか。

「...ん」

「つまり俺は」

お前が欲しいということだ。

低く囁いて、軽くユーノの額を指で突く。

伏せた臉が青白い。唇がうっすら開いている。眠っている表情は当たり前の少女の顔、それを見つめているうちに、アシャは思わず知らずユーノの花嫁姿を想像している自分に気づいて苦笑する。

(ミネルバが知ったら、さぞかし嗤うだろう)

ラズーンでは、アシャは腕のたつ剣士として、冷静な医師として、その並ならぬ美貌で、かてて加えてその特殊な称号（クラノ）で知られている。彼を追いつく女性には後をたたなかったが、誰一人として生涯の相手として選んだことはない。女性が欲しくなかったわけではない、だがそれよりも厳しい選択が常に頭の隅にあった。

ついたあだ名が『氷のアシャ』、物腰柔らかく笑顔は甘くとも、人の心の情熱は持ち合わせぬ者としても、アシャはよく知られていたのだが。

(その俺が)

これほど一人の娘を守りたいと思っている。側に居ることさえ望まれていないのに、その指先の一つでも傷つけられることに我慢できない怒りが湧く。見つめられることも滅多にないのに、視界の端に入ればいいなどと、自分のどこにこれほど殊勝な気持ちが封じられていたのだろう。

特別な称号（クラノ）を持っていたとしても、その命が人とは違っていても、心は心に応えて誰かを求めてしまうのか。

「.....」

ユーノは邪気なく眠り続けている。

(今なら何も気づかない)

そう、何をされても、気づかないだろう、深い眠り。

そうとうやうやしく頭を下げていく。

温かで尊いこの宝石に敬意を表するだけだ、狡さも欲望もない、そう己をごまかしながら。

「ユーノ」

お前をくれ。

「おーい！ 飯だぞ、アシャ！」

突然、部屋の外からイルファの浮き立った声が轟いた。

「.....」

もう少しで触れそうな肌を目の前にアシャは固まる。それでも名残惜しく、離れ難く俯いていたが、

「アシャーっ！」

響き渡る大声は苛立ってなお大きくなる。

「.....はあ」

がっくり、と項垂れた。

「アシャアアア！」

「今行くっ！」

どうせこういうことになるんだ。

「行けばいいんだろっ、行けばっつっつ！！！」

神々は俺に何の恨みを抱いている。

アシャはきりきりしながらユーノの側を離れた。

(吐息が...甘い...)

ユーノはぼんやりまどろみながら考えている。

(誰の吐息.....？頬に触れる.....微かに.....でも.....ひどく近くに.....そっと...)

抱きとめられている、そんな温もりを感じて眉をひそめる。

そんなことがあるはずはない、そう打ち消す心を揺らすように温もりは静かに熱を増していく。

その温もりにもし名前をつけるとしたら。

(ア...シャ...)

そっと呼んで、夢の中、ユーノは慌てて口を両手で押さえる。同時にずきりと両腕と腹に灼熱感が走り、体を強張らせた。

(あ.....っ.....っ...)

口を覆った手をそろそろと降ろし、体の両側へ力を抜いて投げ出してじっとする。だが、痛みは絶え間なくユーノの神経に牙をたててくる。

(ん、...ん.....っ)

唇を噛む。呻くことさえ焼けた金属の棒を押し当てられたような痛みに関わり、呼吸を喘がせた。

(でも.....寝てるわけには...いかない...)

熱いうねりの同心円が幾重にも体を浸していつて、意識を陽炎のようにぼやけさせる。遠い場所から逃げようのない圧迫感を伴っためまいが、緩やかにけれど確実に、繰り返しユーノの感覚を砕いていく。

(気を.....失い.....そうだ...)

痛みに関ざされた闇の中で、ユーノはなおも抵抗を続ける。眠っていても体のどこかは起きていてくれるはずだった。だが、今迫ってくる闇はユーノの全てを眠り込ませてしまうような危うさに満ちている。

(違う...こと.....考えなくちゃ.....何か.....違う.....こと...)

空間が大きく揺れた。感覚全てが揺さぶられる。歯を食い縛る。底のない泥沼に呑み込まれていく意識は、脆く頼りなく、確保する先から崩れていく。

(違う.....こと...)

汗が額を滑り落ちていく感覚が僅かに戻る。

(汗...かいて、る.....あ、うっ!)

ふいに激痛に意識が吹き飛ばされた。ガジェスの爪のように心に食い込んで、切れ切れになるまで引き裂いていく炎の感覚だ。体のどこにも力が入らない。溶けていく平面にぐったりと身を任せながら、暴走していく痛みを感じるのが精一杯だ。心のどこかが絶叫している。頬に熱いものが流れていく。閃光のように、溝虫(エグルガ)のように、意識をぼろぼろに食い千切っていく苦痛、苦痛、苦痛...

「はっ...」

激しく息を吐いて、堪えきれずにユーノを目を開けた。引きむしらんばかりに掴んでいた掛け物に気づいて、指の力を緩めようとしたが、再び襲って来た痛みに関息を呑んで掴み直す。閉じた目の奥で光の玉が無数に砕けた。

「あ.....あ...っ」

思わず漏らした声は人の気配を感じなかったため、しかしそれに対して穏やかな声が応じた。

「大丈夫かい？」

「...っ！」

いつもよりは数瞬、遅れた。だが痛みを凌ぐ危機感に攫われて、近くに置かれていた剣を掴んで引き寄せ、跳ね起きる。

「！！」

「だ...れ...っ」

目の前にユーノと同年ぐらいに見える少年が居た。息を弾ませながら誰何したユーノに、淡い色の髪の下で、人なつこそうな青い瞳を瞬いた。体を固くしつつ、

「僕、ハイラカって言うんだけど...」

ためらいながら、心配そうに首を傾げる。

「ねえ、大丈夫かい、君。かなり苦しそうだけど」

(ハイラカ...)

剣の柄を握りしめたまま、どこかで聞いた名前だ、とユーノは考えた。

「僕、何もしないよ」

ハイラカが静かに続けた。

「剣って、扱ったことがないんだ」

ユーノの目に、机の上に置かれた焼き物の水入れと器、枕元に落ちた濡れ手拭いが映る。

「...ひょっとして...君が.....世話を.....？」

「ああ」

ハイラカは柔らかに微笑した。

「呻き声が聞こえたから.....覗いたら、あんまり君が苦しそうだったから...つい、ね」

そのままより近寄ってきて、ぐいと手を突き出す。

「改めて。僕はハイラカ・コジャン。よろしく」

人を信じ切った無防備な態度、つられてユーノも剣を手から離れた。差し出されたハイラカの手を握る。

「ひどい傷らしいね.....熱がある。寝てた方がいいよ」

「う...ん」

ユーノはのろのろと横になった。ハイラカは当たり前のように手拭いを拾い、水に浸して絞り直し、ユーノの額に載せてくれる。

「あり...がとう...」

「君の名前は？」

「.....ユーノ...」

「ユーノ、か。いい名前だね、まっすぐで強そう」

ハイラカのことばに苦笑する。

「君も旅をしてるんだってね。僕はこれからラズーンに行くところなんだけど、君は？」

「あ...」

にっこり笑った相手の顔に、ユーノはダノマでのことを思い出した。そう言えば、ダノマからラズーンへ向かって旅立った者の名前もハイラカと言ったはずだ。

（じゃあ、この人も『銀の王族』...）

「あ、無理に言わなくてもいいよ？」

ユーノの沈黙をハイラカは別の意味に解釈した。

「僕にはラズーンから使いが来たんだ。若者達を何年かに一度、勉強のためにラズーンに招待しているんだそうだ。今まで聞いたことがなかったけれど、なるほどそうやって、中央の進んだ知識や技術を地方に伝えているんだね。僕がどうして選ばれたのかは知らないけど、幸運だったな。きっとすばらしい所なんだろう。使者の方はとても丁寧だったよ」

ハイラカはあけっぴろげな生き生きとした表情で笑った。

（この世の幸福を約束された『銀の王族』...）

いつか聞いたことばがユーノの胸に蘇る。

今ではユーノも、ラズーンが『銀の王族』と呼ばれる人間達を集めていることを知っている。ハイラカが教えられたように、若者達の研鑽のためというには厳密すぎるその選定基準のことも。そして、それに視察官（オペ）という役職が絡んでいることも。

（でも、一体何のために）

『銀の王族』とは一体何なんだろう？

「ユーノ？」

「ああ...ごめん.....」

ごくり、と唾を吞む。ハイラカがもう少し何かを知っているだろうか？

「実はボクも...ラズーンへ行く途中なんだ」

「へえ！ やっぱ、ラズーンからの使いが来て？」

「いや、そういう...わけじゃない...けど」

曖昧にことばを濁して、仲間を見つけたと嬉しそうなハイラカに尋ねる。

「君は一人で...旅してるの...？」

「ううん。ボクの所へ来た使いの方と一緒になんだ」

ハイラカはああ、そうだ、と思いついたように微笑んだ。

「最近、あちこち物騒になったそうだから、もし君さえよければ、一緒に行こうか？ 人数が多い方が安全かもしれないし」

人数が多いから安全。

たぶん、ハイラカもしばらく行動を共にすれば、それが大きな間違いだとわかるだろう。少なくとも、ユーノと同行するのは安全どころか、危険を引き寄せて歩くようなものだ。

「いや...ちょっと.....無理.....かも」

(私と居ることは危険以外のなにものでもない)

「.....んっ...」

落ち込みが刺激したのか、またぶり返してきた痛みに眉を寄せて目を閉じる。

「苦しいのかい？ ごめんね、無理をさせたみたいだな」

ハイラカの声が遠くにうねった。

「今お兄さんと呼んでくるね」

「.....え...？」

「お兄さんだろ？ 違うのかな？ さっきまで君の面倒を見てた、金色の髪の毛。.....そういえば、あまり似てないね？」

「兄、だよ」

苦しい息を整えながら吐き捨てた。

「おせっかいで.....性格の悪い、兄、き.....」

再び波のように振幅を増してくる痛みの理由によりやく思い至る。回復期に入っているはずなのに、これほど苛立ち神経を疲れさせる痛みは経験したことがない。

(アシャの...やろ.....)

「悪いけど.....呼んできて...くれる...」

再び競り上がってくる痛みに気を失うしかないかもしれないし、それはアシャの意図した深い眠りに続くものだろうけど。

(人の体に...何してくれる.....)

一言罵倒してやりたい。

「わかった。待っててね」

ハイラカが慌てたように側から離れていくのを、喘ぎながら見送ると、それほど待つまでもなくアシャが入ってくる。案の定、ユーノが苦しそうなを見ても、顔色一つ変えずにかがみ込んできた。

「苦しいか」

「アシャ...」

じろりと見上げる。

「薬.....もったろ...」

「わかったか」

うっすらと危ない微笑がアシャの目元に広がって呆れた。

「わかるよ...あんな風に.....ボクは.....眠り込まないし.....この.....いた、み...」

きつ、すぎる、だろ...っ。

アシャが使ったのは神経過敏をもたらす薬だ。痛みを増幅させ、疲労を増やし、少々のことでは飛び起きて動こうとしてしまうユーノを徹底的にくたくたにさせて、とことんまで眠り込ませようという魂胆なのだ。

「ただ眠らせただけでは起きるだろうが」

「...く...っ」

自業自得だと言いたげな苦笑にむかつくが、意識はどんどん痛みに侵蝕されていく。

「それでも.....医術...師...かよ」

「ラズーン随一、有能だと言われたが？」

冷笑にも見える表情が、こんなときにもなお綺麗で。

(くやしい...)

きっとレアナ姉さまならもっと優しく扱った、そんなことはわかっているけど。

「彼は.....ハイラカと.....言った」

引き込まれる意識を必死に引き戻しながら続ける。

「...ラズーンへ.....行くと...」

気を失う前に一つ確かめておきたいことがある。

「.....ハイラカも.....『銀の王族』.....？」

「そうだ」

問いを予測していたように、アシャの表情は静かだった。

「ラズーンは...『銀の王族』を.....集めてる.....？」

「そうだ」

「.....そのわけを.....」

あなたは知ってるの？

一瞬沈黙したアシャの深沈とした紫の瞳が、まっすぐにユーノを貫き、やがて静かに閉じられる。そこに浮かんだのは無言の肯定、そして、ユーノが知るべき事柄ではないと知らせる、圧倒的な拒否。

「やっぱり...ね...」

ラズーンの意図。

それを知る、ただの旅人など、居るものか。

(やっぱり、アシャは...)

ラズーンの何かと大きく関わっている人なんだ。

ようやくそれだけの思考をまとめて、ユーノは湖に沈む小石のように一気に意識を失った。

気を失う寸前、ユーノは微かに微笑んだ。全てをわかったかのように。全てを諦めたかのように。

(そうだ)

アシャは心の中で低くつぶやく。

(そうやって気を失っている)

できることなら、何も気づかず、何も知らぬままでラズーンに辿り着くのが、一番幸せなのだ、ハイラカや多くの『銀の王族』のように。

(死なせるぐらいなら、と思ったが)

「...辛いな」

アシャは温まってしまった手拭いを絞り直して、汗に濡れたユーノの額を顔をゆっくり拭う。

知性では自分の取った方法が間違っていないとわかっている。ただ眠らせただけでは、回復しきらぬままの体を押して、ユーノはすぐに、他の誰かのために走っていつてしまうだろう。走って走って、やがてガジェスの時のように、自ら命を捨ててしまう。

(『銀の王族』)

いずれユーノも全てを知るだろう。ラズーンのこと、世界のことも、アシャの存在が何を意味するのかも。

(俺が、どんな人間かも)

その時、ユーノはアシャを望むだろうか。

(ハイラカ・コジャン)

彼のように、まっすぐな気持ちを向けてくる相手に信頼と愛情を注ぎ、アシャには蔑みと怒りの視線しか向けてくれなくなるかもしれない。

(それとも、ラズーンの『洗礼』が終わった後に忘れさせるか)

すべてを。

ラズーンに関わる全てのことを。

アシャのことも何もかも。

(そしてどうする?)

もう一度出逢い直して、ユーノの前に一人の男として向かい合うなら、アシャにも希望は残っているか。

考え込んだアシャの背後で気配が動いた。振り返らないまま、ぼつりつぶやく。

「イシュタか」

「やっぱり、あなただったのか」

背後の声は詰めていた息を太く吐いた。

「あなたでしかありえないと思ったが、しかしまさか、アシャ・ラズ...」

「しっ」

アシャは相手のことばを素早く遮って振り返った。

戸口に、直毛銀髪、灰色の瞳の男が立っている。上級の役人、王族の使者といった身なりだ。

「久しぶりだな、イシュタ・ルス」

「セレド皇宮で一度会っている」

相手は淡々とした声音で否定した。

「あの時はまさか、あんな所にあなたがいるとは思ってもよらなかった。ラズーンのアシャ.....称号(クラノ)の持ち主が」

「私は称号(クラノ)持ちの中でも少々変わり者でね」

「しかし、ラズーンの名を継ぐものが、ラズーン支配下(ロダ)をうろついているとは」

イシュタは皮肉な口調で肩を竦めてみせた。

「いいじゃないか。それから、私は支配下(ロダ)ではただの『アシャ』だ、忘れるな」

「御意。……だが、それを言うなら、私もイシュタ・ルスではなく、ただのイシュトになるが」
「なるほどな、違いない」
アシャは苦笑して静かに近づいてくるイシュタを見やった。
「セレドの『銀の王族』…」
そうっとベッドを覗き込む相手がアシャを見て目を細める。
「何だ？」
「いや」
イシュタが微かに笑みを浮かべる。
「こうして話していれば全くかわりのない、ラズーンの『氷のアシャ』、笑顔は見せていても本心は見せない男のままなのに、この子にはどうしてそんな優しい目をするのかと思ってな」
「それはお前の誤解だろう」
アシャは素知らぬ顔で笑い返した。
「不要なもめ事を起こして歩く統治者などいるものか……旅はどうだ？」
「楽じゃない」
イシュタは小さく溜め息をついた。
「あなたの連れほど腕がたてばいいが、大抵の『銀の王族』は無邪気で純粋で人を信じやすい。この動乱の時代を渡っていくにはかなり手間がかかる。視察官（オベ）一人が『銀の王族』一人を護衛してラズーンに向かっている現状だ」
「一人で一人を？」
アシャは眉を寄せた。
「それほどラズーンは揺れているのか？　そこまで『銀の王族』を丁寧にかき集めた記録など目にしたことがない」
「太古生物の出現度合いも増えている……わかっていると思っていたが」
「……ああ」
「加えて人心の動揺は著しい。『運命（リマイン）』の方が成果を上げ過ぎているよ。裏切り者どもにたぶらかされて、ありもしない覇権の夢に溺れる国もでてきているしな」
「カザド、か」
アシャはユーノの寝顔を見下ろした。
「カザドだけでもない」
イシュタは物憂げに両手の指を組み、窓の外に視線を逸らせた。
「最新情報では、『運命（リマイン）』の勢いがラズーンと『銀の王族』存亡に及ぶようなら、『泉の狩人（オーミノ）』を繰り出すのも辞さないという強行論まで出ている」
アシャは思わずイシュタの横顔を睨んだ。
「『泉の狩人（オーミノ）』を、だと？」
脳裏を過るミネルバの面影、それに連なる禍々しい過去に視線を強める。
「誰が指揮を執る」
ゆるやかに首を巡らせ、眩そうにアシャを見返したイシュタが静かに応えた。
「おそらくはミネルバか……あなただ」
沈黙が満ちた。
空気さえも固まってしまったような緊張、息を詰めるように睨み合っていた二人の耳に、波のように微かで穏やかなユーノの寝息が響く。それをおそらくは同時に聞き取り、二人は緊張を解いた。
「『泉の狩人（オーミノ）』を出す、だと？」
アシャが苦い顔で首を振る。
「わかっておられるだろうが…」
打ってかわって遠慮がちな口調でイシュタが切り出す。
「ラズーンの崩壊は、この世界の秩序の崩壊だ。それを防ぐ為には最後の手段になろうとも『泉の狩人（オーミノ）』を使うのも仕方がないのだ………多少の被害は出るにしても」
「……『泉の狩人（オーミノ）』がこちらに味方するとは限らないというのわかっているんだろうな」
アシャは冷ややかに切り返した。
「私も……ミネルバも指揮を執る気はないだろう。彼女らを御せるのは『太皇（スーグ）』だけだ」
「そこを無理で押すことがないように祈るだけだ」
イシュタの沈んだ声に、アシャは窓の外へ視線を向けた。
（ラズーンの二百年祭）

覚悟していたとはいえ、ラズーンへ近づくにつれ、切り捨てたはずのものが否応なく絡みついてくる。それもどんどんアシャが認めたくない方向、望まない方向に向かって、速度を上げて逆巻く奔流のように。

（ユーノと出会ってから）

その応えはふいに天啓のように閃いてアシャを竦ませた。

（出会ったことが既に運命だったのか？）

アシャを悪夢へと引き戻す運命、玉座に達する唯一の道が、実はそれを選ばないと拒んで離れることだったとでも言うのだろうか。

（ギヌア）

思い出す、白髪の下の真紅の瞳。再び相見えて戦うしかないのだろうか。

（ここでユーノから離れれば）

ユーノをたとえばイシュタに託し、アシャがユーノの願う通りにセレドに戻ってレアナと結ばれれば、アシャはアシャの運命から逃れることができるのだろうか。

（その方が幸せ、か？）

アシャにとっても……ユーノにとっても。

「ん？」

ふと、視界に入ってきた二人連れに気づいた。

アレノとイルファ、仲良く肩を並べて話し続けていたかと思うと、イルファが重々しくうなずき、アレノが立ち止まる。繰り返し何かを確認するようにイルファを見上げると、もう一度うなずいたイルファにぱっと顔を輝かせて走り去った。残されたイルファは何度もうんうんとうなずいている。

（何だ？）

満足げなイルファの顔に妙な不安を感じた矢先、駆け寄ってきたレスファートがイルファに二言三言話しかけ、呆気にとられた顔になって立ち竦んだ。にこにこしているイルファと対照的にうろたえ、身を翻して歩き出したイルファに先だってこちらに駆け戻ってくる。

それほど待つまでもなく、レスファートは部屋に飛び込んできた。

「アシャ！」

興奮して頬を真っ赤にしている。

「イルファを止めてよ！」

「は？」

続いたことばにアシャも惚けた。

「これから湖に潜るっていつてるの！」

「俺は行くと言ったら行く」

イルファは断固として繰り返した。むっつりとしたアシャ、不安そうなレスファート、ナスト、マノーダと一通り見回して、ぐっと唇を曲げた。木の丸いテーブルについている顔触れには、事の成り行きを見守っているイシュタとハイラカの姿もある。

「で…でも」

おどおどとナストが口を挟んだ。

「湖の底の宝は全て湖の神のものですし、言い伝えによれば、恐ろしい魔物（パルーク）がいるとのことですよ」

現にユーノは手酷い傷を負って、湖から救い出された。

「そうだわ。湖は底がないと言われてるほど深いし……いくらアレノ姉さまが頼んだと言っても……もう、どうして、姉さまはそんなことを頼んだのかしら」

マノーダも困惑し不審がる。

「アレノは悪くない」

イルファはきっぱりと言って、少し赤くなった。

「ヒュークに振られたと思ひ込んで、贈られた首飾りを湖に投げたのも無理はない。そのせいであの騒ぎに巻き込まれたのも、アレノのせいじゃない。今度ヒュークと結婚するのに、それがないと結婚しにくいと言うのもわかるし、何よりも俺は、それを拾ってくる役目を俺に託してくれたことが嬉しいのだ」

わはは、と笑ったイルファは自信に満ちて続けた。

「第一、魔物（パルーク）はユーノが倒したんだろう？」

アシャは大きく溜め息をついた。

「何だ」

「いや、かなりおめでたいやつだと」

「最初に俺を振ったのは誰だ」

「...何の関係がある」

「とにかく！」

無然としたアシャに、イルファは声を張り上げた。

「今の俺には、アレノ以上の相手が見つかるとは思えんのだ。報われずともいい、俺はこの愛に生きる！」

「.....」

固まってしまった周囲をよそに、生き生きと瞳を輝かせているイルファに、アシャは溜め息を重ねる。

（これじゃ梃子でも動きそうにない）

イシュタの方へ視線を投げれば、相手は微妙な面持ちでこちらを見返している。

ぐずぐずしてはいられない、だが、ユーノの状態を考えれば、おいそれと旅立つわけにいかないのも確かだ。

（ユーノ）

力なく横たわっていた華奢な体を思い出す。ひそめた眉、青ざめた瞼、額から流れる汗、ほのかに開いた唇が紡いでいた荒くて熱っぽい吐息、細い手首がだらりと垂れる、何も拒めず、何も防げない無力な存在になっているユーノ。

一人で戦う夜を耐え抜く強い魂をあそこまで貶めてしまった魔物（パルク）と『運命（リマイン）』の残党が、おそらくはまだ、残っている。

（そうだ、まだあそこに残っているかもしれない、ユーノを傷つけた奴らが）

無意識に囁んでいた下唇が緩むのを感じる。冷え冷えとした胸に広がる残忍な喜び。

『運命（リマイン）』討伐は視察官（オベ）の役目ではないが、これほど勢力を伸ばしてきている動きを見過ごすこともあるまい？ しかもアシャにはそれを屠るだけの十分な能力があり.....今や十分すぎる理由がある。いきなり攻撃をしかけては諸侯の目を惹き、無用な挑発ともなろうが、イルファの宝探しというのは絶好の隠れ蓑にならないか？

（なるほど）

良い理由だ。

にやりと凄んだ笑みを浮かべる。

（忘却の湖ならば、そう易々と崩壊することもあるまい）

自分の中に横溢する不愉快で昏い熱の発散場所としては格好の広さと深さがあるのではないか？

「イルファ」

「何だ？ 止めても無駄だぞ」

「わかってるよ。俺も一緒に行こう」

「へっ...」

「あの神殿にまだカザド達がいると、後々面倒だからな」

「後々面倒って.....ここで一気に始末をつけるつもりなのか？」

それはさすがにお前でも無理だろう、魔物とやつらの両方を、というのは。

「ああ、もちろん無理だとも」

にっこりと微笑を返したとたん、イシュタが顔色をなくしてひやりとした顔になったのを目線で戒める。

「俺一人で、なんてな。偵察だけだ、やるときはお前の力を借りねば」

「ああ、わかった！ そのときは力を貸してやるぞ、声をかけろ！」

嬉しそうに頷くイルファと対照的にイシュタが寒々とした顔で目を逸らせる。アシャという視察官（オベ）が本気を出して何をやったのか、彼は重々知っている。ついくすくす笑ってしまうと、相手はますます白い顔で表情を消した。ぼそぼそと小さく、支配下（ロダ）だって自覚してくれているんだろうな、とつぶやく声が聞こえたが無視する。

「よし、そうと決まったら、腹ごしらえをして湖行きだ！」

イルファはそういう気配に気づいた様子もなく、威勢良く叫んで立ち上がる。

「あ。はい、すぐにご用意いたします！」

はっとしたようにマノーダが立ち上がり、次の間への戸を開けた。振り返りながら、
「ナスト、手伝って！」

「はい！」

慌てていそいそとマノーダに付き従うナストに、

「あれは尻に敷かれるなあ」

イルファがのんびりと感想を漏らす。それを小耳に、アシャは、

「俺とイルファが出ている間、ユーノの事を頼みたいんだが.....大丈夫か？」

レスファートに声をかけると、少年はぱっと顔を輝かせた。

「うん！　ぼく、ちゃんとユーノを見られるよ！　絶対側から離れたりしない！」

「あの」

ふいにじっと話を聞いていたハイラカが口を挟んで振り向く。

「僕も側についていましょう。ユーノって彼でしょう？　怪我をして休んでいる？」

「ハイラカ」

驚いたようにイシュタが続ける。

「しかし、我々の旅は急ぐものだ」

「でも、彼を放ってはけません。一日やそこら見ているぐらいの時間はあるでしょう、イシュト」

「う、む...」

「ねえ、アシャ、だめですか。僕とレスファートなら一層ユーノに気をつけてあげられると思うんですが」

なぜお前がそれほど親しげにあいつの名前を呼び捨てる、とか、出会ったばかりなのになぜそれほどあいつの側に居たがる、とか煮え詰まった思考に頭を占拠されて、すぐに答えられなかったアシャを、ハイラカは不思議そうに見上げる。

「あなたも彼が大事でしょう？」

誠意と善意に満ちた青い瞳。

意外に真っ向からの真摯は強いのかもしれない、とアシャはぐったりした。

「.....では、二人に頼む」

「はい」「はいっ」

答えるや否や、レスファートは身を翻した。ハイラカが後に続こうとすると、ちよいと振り返って不愉快そうに顔をしかめ、きょとんとしたハイラカにふん、と露骨に鼻を鳴らして先に立つ。

「んじゃ、俺も用意してくるぞ」

子どもはいい。

落ち着いたない気分を抱いたままぼんやりと考えたアシャに声をかけて、イルファが部屋を出ていく。

「ん、ああ」

全く俺は。

(どうしてユーノが絡むと身動き取れなくなってくるんだ)

舌打ちしながら立ち上がったアシャにイシュトが近づいてきた。

「典型的な『銀の王族』だろう？」

「ああ、そうだな、誠実で親切な少年らしい」

「甘ちゃんて困るよ、実際」

苦い顔になる相手に笑み返す。

「それこそ『銀の王族』たる所以だ」

世界のあらゆる不安や危機感という圧迫因子を取り除いて、できるだけ変異を起こさせないようにして守ってきた、その成果だ。

「ラズーンにとって十二分に有用な素材に仕上がっているということだ、ぼやくな」

答えながらその非人道性に苦笑する。

「けれど、ユーノは違う」

「.....ああ」

では、イシュタも気づいているのか、とアシャは目で問い返す。

「.....違う存在の『銀の王族』、ということか？」

「.....」

「その意味を私はたぶん本当には知らない」

その後続くことばをアシャは察して、窓の外を見やる。遠く高くに白く光る翼が翻るのが見えた

気がする。地上にあっては恐怖と違和感を持って語られる太古生物のクフィラも、高空にあっては普通の鳥と変わらない、気づかなければ世界の変化は誰の目にも留まらない。

「あなたは知っているんだろう？ 『氷のアシャ』」

静かに囁かれたイシュタの声はもっと低くなる。

『氷のアシャ』、それは人の情熱を持たぬ冷ややかな男という意味ではあるけれど、もう一つは閉ざされたラズーンの泉に生まれた者、そこに秘められた真実を継ぐ者の響きも重ねていると知るのは、限られた役割のものだけだ。

「かの聖地の名をあなたが継ぐのはもうそう遠くではないだろうか？」

アシャは答えぬまま、イシュタの側を通り過ぎる。

「アシャ」

「.....まだだ」

背中を向けて言い捨てる。

「まだ俺は選べない」

「そうして世界を見捨てるのか、世界の滅びを見ているだけなのか」

「.....ユーノに返してくるものがある」

「アシャ」

足を早めて部屋を出る。

そうだ、お前は知らない。

アシャは濁る胸で考える。

世界はもう既に滅んでいいるのだ、何度も何度も、見えないところで。繰り返されている幻の現実を、人々は世界だと勘違いしている。幻を守るために幻を差し出す、その虚しい戯れ言の真実、継ぐべきものなどもうどこにもないと知って、自分もまた、いや自分こそがその幻の象徴だと知って、アシャは全てを放棄したのに。

けれど出会った幻は確かに熱く生きていて。

この胸を轟かせるほどに激しく輝かしく命の限り走っていて。

ユーノ、という鮮烈な幻を、今これほどまでに守りたいと願う、この気持ちもまた幻ならば。

「幻でも、いい、と、思う、のは」

間違いか？

自分の声がこれほど切なく聴こえたのは初めてだ。

「ああ、なるほど」

そうして気づく、自分が何を求めていたのかを。

「幻でもいいと」

ずっとそう確かめたかったのか、俺は。

「アシャ」

ユーノの休む部屋に唐突に入ってきたアシャを、レスファートがむくれ顔で迎えた。自分一人でユーノを独占できると思ったのに、ハイラカがついているのが面白くないらしい。

「子どもはいいな」

思わず口を突いた本音に、レスファートがますますむくれる。ぼん、とその頭に手を置いて、アシャはベッドに近づいた。

ユーノは疲れ切った表情で眠っている。呼吸は少し穏やかになったようだ。小指の先で汗で張り付いた髪の毛を払いのけるように額を拭ってやりながら、アシャは視線で指し示した。

「もし、目が覚めて苦しがるようなら、机の上の袋の薬を飲ませてくれ。一度に二粒だ。起きようとするようなら、泣きついてでも寝かせておけ」

「うん、わかった」

レスファートがベッドの足下の方でこくりとうなずく。

「ん...」

気配に本能が反応したのか、ユーノが身動きした。が、目を覚ますには至らずに、そのまま熟っぽい寝息をたて続ける。

アシャは無言で自分の首から、セレドの紋章ペンダントを外し、ユーノの首にかけた。金鎖の先の紋章をそっと胸元へ押し入れて、ふと触れた肌の熱さに動きを止める。視線を動かすと、無防備な表情で眠り続けている顔がある。

（目を覚ませばきっと）

お前は俺を拒むのだろう。

押さえ難い何かに揺さぶられて、アシャはそっとユーノの頬に唇を触れた。柔らかくて甘い果実の温もりに満足した次の一瞬、

「え！」

「っ」

ふいに間拔けた声が響いて慌てて顔を上げ、窓際に立ってこちらを見守っていたらしいハイラカと視線がぶつかる。

「あ」

「あ、あの、僕こっちを向いていますからどうぞ！」

奇妙なうろたえた顔になって向きを変える相手に、ハイラカがそこに居るのをわかっていたはずなのに無意識に無視してしまった自分に気づいて衝撃を受ける。

ただ一人レスファートが、そんなアシャとハイラカの固まった空気にきょとんとし、とことことやってきてベッドの端に膝をついた。

「ずるい、アシャ、ぼくも！」

ひょいと身を乗り出して、ちゅ、とユーノの頬に口づける。

「あ、ああ、親愛のね、ええそうですね僕何を考えて」

ハイラカが顔を赤らめながら急いで向き直って笑いかけてきたのに、そこは経験値と年齢差、動揺を押し殺してしたたかに、にっこり笑い返す。

「ああそうだ……違うものに見えたか？」

「いえあのその、いや僕はただその」

アシャの返答にハイラカがもごもごしながら、より一層赤くなったのに警戒心が強まる。

(こいつ、ひょっとして)

いや、一応ユーノを『弟』として認識しているはずだから。

(まさか、そっち側の趣味なのか)

それならば安心だな、とくらくらしてくる頭の芯で考え、その思考の破綻具合になおくらくらしながら、後を頼む、と素知らぬ顔で部屋を出たが、

「どうしたんだ、アシャ」

イルファが珍しく生真面目に声をかけてきた。

「何がだ」

「顔が赤いぞ」

「気のせいだ」

「そうか？ いや、俺は今いろいろなことに鋭くなっているのだ、お前は確かに顔が赤いぞ」

「人の顔色などほっとけ」

お前は今愛しいアレノのことだけ考えていればいんだ、そう突っ込もうとして、そうだ、こいつがそもそも宝探しなど言い出すからややこしくなってくるんだと相手をねめつける。

「……今度は目が冷たい気が」

「……ほっとけと言ってるだろう」

それより、計画を練ろう。

なお首を傾げるイルファを外に誘った。

「これが酸素発生剤」

アシャは木陰でイルファの分厚い掌にぼとりとカプセルを落とした。

「何だこれは」

不思議な形と色だな。

イルファが差し上げたカプセルは半分は紺色、半分は透明な、子どもの小指先ぐらいの小さなものだ。

「水が固まったようにも見えるのに触れられる」

イルファが珍しげに掌で転がすのに、落とすなよ、と釘を刺す。

「呑む込むんじゃなくて、奥歯で挟んで軽く噛む。そうしたらそこから空気が出てくるから、びっくりして吐くな。そのまま口を閉じて息を鼻から出すようにすると、水中でも呼吸ができるようになる」

「……難しそうだな……これ一個か？」

「五個、渡しておく」

アシャは残りをイルファの手に載せた。

「うまく使えば、それでほぼ一日はもつ」

「へええ」

こんな小さなものがある、とイルファは感嘆の声を上げたが、ふと気づいたように眉を寄せた。

「どうしてお前、こんなものを持ってる？」

「旅先で手に入れた」

「普通売ってるか、こんなもの」

俺は見たことがないぞ。

「人からもらったのさ」

「.....何を代償に」

「.....何を考えてる」

「いや、さぞかし高かったろうな、と」

じろじろと無遠慮に視線を動かすイルファに苦笑する。

「医術師の代金だ、おかしい想像をするな」

「お前のことだからなあ」

「どういう意味だ」

「いや、この俺が惑うほどだぞ」

「.....」

いやお前なら誰にだって惑うだろう。

呆れてアシャは神殿の方へ視線をやる。相変わらず白く美しく陽光の中で輝いているが、『運命（リマイン）』のわらわらとした禍々しい気配だけははっきりと感じられる。

「それじゃ、俺は行ってくる！」

おお麗しきアレノよ、俺の真実を見してくれ！

声高に宣言すると、腰布一枚のがっしりした半裸姿で湖に歩み寄った。

アレノの首飾りが沈んでいるのは端の方だろうから、それほど深く潜らなくてもすむはずだ。ざぶざぶと水の中に入っていったイルファは、口にカプセルを含んでから意外に軽く身を躍らせた。派手な水飛沫と共に大きな音が響き渡る。

それを見届けた後で、アシャは動き出した。

木陰からゆっくりと神殿に向かって歩いていくアシャの髪に、風が柔らかく吹き過ぎる。太陽の光は木の葉に躍り、風に舞う葉に跳ねている。イルファが飛び込んだ後、再び静まり返った湖は、幾つかの波紋と同心円を表面に散らしているのみ、森閑と濃い藍色の水をたたえて、あくまで平和な光景だ。

（だが、この静けさの中に『運命（リマイン）』は息づいている）

それこそ、このラズーンを頂点とする世界が、大いなる破滅に対する危うい賭けであるのと同じように、当たり前の日常は今にも切れそうな細い絆で保たれているのだ。

神殿にかなり近づいても、『運命（リマイン）』はまだ動く様子がなかった。アシャが中に入ってくるのを待ち構えているのかもしれない。

アシャは落ち着き払ったまま、神殿の中に入っていった。

一歩、また一歩。

支柱の影にも邪悪な気配はない。

神殿の中には、歩いていくアシャの足音だけが床を這うように広がっていく。人の気配はもちろん、『運命（リマイン）』の気配さえない。

（そうあっさり引き下がるとも思えないが）

ましてや宿敵であるアシャを見過ごして遁走するほど、『運命（リマイン）』も穏やかな集団ではない。

回廊を一つ一つ巡っていく、と、ふいにひどく澱んだ、濁った空気が吹き付けてきた。

角を曲がって立ち止まる。

「...」

目の前の廊下一面に、黒く焦げた屍体が転がっていた。数体は既にどろどろの赤黒くぬめる液体となつて溶け崩れ、吐き気を催す腐臭が辺りの空気を汚している。殺す必要はないとして、手刀で倒しただけの者もいたはずだが、用が済めば行かしておくこともないということなのだろう、泥人形よろしく打ち捨てられている。

だが、アシャはそれらの状態を一瞥しただけで先へ進んだ。

どれもこれも既に抜け殻と化し、累々と横たわった屍体の遥か向こうに、一層暗い冥界の気配がある。

「どこで俺を待つ？」

低いつぶやきに応じるように、廊下の先でひらりと白いものが動いて奥へと誘った。脳裏に閃いたのは水盤がある広間の光景、見えない何かが一点に凝縮していくような圧力感。

「そこか」

アシャは薄く笑って歩を進めた。回廊は入り組み、どうも先に来た時より組み変わって複雑になっているような感さえあるが、視察官（オペ）を迷わせることなど不可能だ。視察官（オペ）は一度通った場所や一度関わった人間を忘れないように訓練されている。揺れ動く時空の中で、それは彼らに必須の能力なのだ。

似たような角を、そっくりな通路を、惑わせるように現れるつい立てや仕切りを擦り抜け、アシャはやがて例の水盤がある黒と白の広間に辿り着いた。

「お待ちかねか」

入り口の扉は大きく開け放たれている。正面には、相変わらずどす黒い水がたぷたぷと奇妙な揺れかたをしている水盤しかなく、人影はない。まっすぐ歩みよって扉を潜る。

ど、おん！

背後で唐突に音をたてて扉が閉まった。水盤の水が激しく揺れ出し、波立ち、同時に広間を囲むように黒い光が走る。ゆっくり短剣を抜くアシャの前で、水が裂け、ぬめる体から飛沫を散らして、ガジェスが一匹、また一匹と姿を現す。

「御丁寧なことだな。視察官（オペ）一人に、これほどの手勢を繰り出すとは」

いつの間にか、ぐるりと『運命（リマイン）』が囲んでいた。黒い髪を振り乱し、血のように赤い瞳にたたえられているのは呪詛、目前のガジェスもう一体増える。

傍から見れば圧倒的な力の差を思わせる状況、それでもアシャは薄く微笑んだ。

「歓迎されていると考えていいんだな」

「ただの視察官（オペ）なら、我らもこれほど手間をかけるものか」

『運命（リマイン）』の中から、悔しげなつぶやきが漏れる。

「にしては頭数が足りないようだ」

アシャは低く嗤った。

「こしやくな！」

『運命（リマイン）』の輪が瞬時に崩れた。なだれるようにアシャの上へ、黒剣を閃かせながら襲いかかってくる。

「違ったか」

弱さを数で補っただけか。

掠れた苦笑を零して、アシャは緩やかに動き出す。

次の瞬間、骨を砕く、力任せに生身を引き裂く音が響き渡った。数を頼みに一気に襲いかかったはずの『運命（リマイン）』は絶叫してのけぞり、跳ね飛び、四、五人ずつが塊になってアシャの側から吹き飛んでいく。手を触れた瞬間、いやアシャの影が相手に落ちた瞬間、『運命（リマイン）』は悲鳴と同時に空中に舞い上がり、壁に叩きつけられていく。

「近づくなよ」

そこからは俺の支配下（ロダ）だ。

アシャは微笑みながら少しずつ動きを速める。今や旋風のように回される手が足が体が、手加減一つなく『運命（リマイン）』を屠っていく。攻撃は前後左右を選ばない、背中に眼があり、足先に刃が宿る、そう詠われたアシャの戦いぶりに、さしもの『運命（リマイン）』も慌ててガジェスをけしかけてくる。命じられた通り、自分に掴みかかろうとするガジェスの目の前で、一瞬アシャの姿が幻のように消える。

「お、おお！」

無念なのか驚嘆なのか、『運命（リマイン）』から上がったどよめきを快く聞いて、ガジェスの頭近くまで飛び上がったアシャは、眩い光を手元で放つ短剣を一閃、喉をかき切り、その体を蹴って次のガジェスに襲いかかる。

「ぐがぼぼがああっ！」

喉から粘液と血を噴き出しながら、ガジェスが手を振り回してのたうち、次にアシャの剣を受けたガジェスと絡み合って水盤に倒れ込む。跳ね飛ぶ黒い水、暴れるガジェスが床を砕き、『運命（リマイン）』をなぎ倒し押し潰す。アシャの攻撃は止まらない。最後のガジェスへ既に飛んでいる。

「か、かかれ！」

「怯むな！」

まさかの劣勢、『運命（リマイン）』が声を上ずらせて叫んだ。アシャの体が淡い金色に輝き始めている。それが何を意味するのか、アシャが何者なのか知っている者には恐怖の前触れだ。

三匹目のガジェスは巧みに体を捻ってアシャの左足を捕らえた。そのまま勢いをつけ、石の床に容赦なく叩きつける。

直前、アシャの短剣がその腕に深々と突き刺さっていた。さっきからアシャを取り巻き、黄金の粉のように見えるほど濃度を上げつつあったオーラが、するするとその剣の中に吸い込まれ凝縮されていく。

短剣が輝きを増す。アシャの顔を照らしだす、そこに浮かぶ酷薄な微笑、命の消滅を願う邪悪な意思をアシャは十分理解している、が、今は制御する気などない。

（キエロ）

俺の前から。俺の運命から。俺を傷つける闇の世界よ。

「――！！」「!! !!」

ことばにならない絶叫が『運命（リマイン）』から上がった。

広間が突然、百個もの太陽を詰め込んだような光に満たされる。眩いという表現さえくすみそうな、目の奥を焼き、喉を一気に干上がらせる光球がアシャの剣に宿っている。

びしびしと不気味な音がして、天井や床の細工石が剥がれて碎け落ち始めた。支柱にひびが入り、回廊がきしみ、神殿全部が巨大な嵐に巻き込まれた小舟のように揺れ動く。水盤から、水が沸騰して吹き上がるや否で蒸発し、灼熱の気体となって広間を満たした。

「ぎゃあああああ！！」

顔中を口にした『運命（リマイン）』が喚き叫び倒れ伏しのたうち壁に縋り、みるみる黒く焦げていく。ガジェスもまだ息があったものが、生きながら焼かれて激痛に咆哮する。広間が絶叫と破壊音で轟々と唸り、煙り、霞み、何もかもが蒸気の渦に呑み込まれていく。

やがて。

やがて。

それらの声が聞こえなくなり、揺れがおさまり、視界が晴れてきた。

残ったのは輝ける光の空間、だがしかし、そこには動くもの、命あるものは何もなくなってしまったような、奇妙な静けさが広がっている。沈黙と静謐、だがそれは虚ろで白い。

その光もゆっくりと穏やかに静かに弱まって、世界が自らの色を取り戻していく。

後に残っているのは、塵芥としか見えないぐずぐずに崩れた吹きだまり、その中にアシャー人。

片頬に名残の光を受け、その光が自らの短剣に収束し、吸収されていくのを見守ってから、アシャは短剣をおさめた。

「視察官（オペ）の任として、この地をとどめる、アシャの名のもとに」

淡々と告げ、周囲を見回す。

その沈黙の光景は、遠い日の遺跡の夜を思わせる。

「これが、未来か」

自分が引き寄せるこの世界の終末は、やはりまだ破滅と崩壊でしかないのだろう。

笑みを消して目を細め、崩れ落ちた広間の入り口から、アシャは静かに去って行った。

「おねがい！ ユーノ！」

レスファートが悲鳴じみた声を上げて、ベッドに半身起こしかけたユーノにしがみついて嘆願する。

「おきないで！」

「だって、...、アシャ、が...っ」

はあはあと息を喘がせながら、ユーノは苛立った。

「一人で、神殿に、行った、んだろ...っ」

起き上がる、叫ぼうとする、ただそれだけの動作でくらくらす視界が恨めしい。

「ていさつ、だって！」

レスファートが悲痛な叫びを上げた。

「ていさつ、だって！ イルファもいったから！」

「それで、すむ、よ...な、とこ、じゃ...ない...っ」

ああ、くそ。

舌打ちして、それでも押さえつけてくるレスファートの体を跳ねのけきれないのは、自分が回復しきっていないこと、そんなことは重々わかってはいるが。

「あそこには...、まだ.....あいつら...が...っ」

漆黒の髪、紅の唇、ほくそ笑む邪悪な表情の『運命（リメイン）』がアシャを呑み込みそうで怖い。

「あいつらがいる...っ」

一人でなんて無理だ。どうして私を連れていってくれなかった。どうしてこんなところに置き去った。

「アシャが、危ないのに...っっ！」

どうして私は動けない。

「だからって！」

レスファートが必死に叫び返してくるのが疎ましい。

「そんな体で、うごかないでえっ！」

少年は半泣きでしがみついてくる。

ハイラカは水を汲みに出た。目覚めたユーノに安心して眠っていいよ、君のお兄さんがいない間、僕もこの子と一緒に君の側にいるよ、と朗らかに告げて。はっとしたレスファートが、アシャの行き先を察したユーノに飛びかかったのがぎりぎり、それからユーノはベッドでレスファートと押し問答を続けている。

「おねがいつ、ユーノお！」

「どけよ、レスッ！」

「いやっ！」

「どけてば！」

「いやあーっ！」

「いいからどけっっ！」

「っ！」

ユーノの剣幕に一瞬息を呑んだレスファートが、きつと睨み返してきた。何事かを決心したように目を閉じ、再びきらきら輝くアクアマリンの瞳でユーノに挑む。

「ユーノのわからずや！ そんなにいうなら、うごいてみればいいんだ！」

「わからずやなのはレスだろ！ 私は、」

ぐいとベッドに片手をついて痛みを堪えると、レスファートがびくっと大きく跳ねた。大きく見開いた瞳を茫然とユーノに向けてくる。

「レス？」

「.....ひ...」

「どうした？」

「、あっ！」

体を捻る、そのとたん、レスファートがいきなり真っ青になって悲鳴を上げた。うろたえたように唇を噛む、それでもどんどん顔色が白くなり、小刻みに震え始める。

「レス？ っ、まさか！」

「きゃ！」

体を引き起こすとレスファートが一気に崩れた。ベッドにすがりつくように座り込む、そのまま肩を上下させながら、見上げた瞳からぼろぼろと大粒の涙がこぼれ落ちる。弱々しい笑み、けれども引くつもりのない強い力を込めて、レスファートが言い放つ。

「心を、ちかづけてる」

「レス！」

「うごけるもんなら、うごいて、みろよ」

「だめだ、よせ、レス！」

「っっ！」

ユーノの動きにレスファートがぎくんと背筋を伸ばした。体中で何かを堪える顔、必死にベッドに

しがみついている手からゆるゆると力が抜けてくるが、そのままぐったりと気を失っていつてしまいそう。

「レス！」

「いや…」

がたがた震えながらレスファートは首を振った。

「だって…心……はなしたら……ユーノ……いっちゃう…」

「もたないよ、レス！」

「いいも……ユーノ……いっちゃう……なら……ぼく……」

それでも限界だったのだろう、ふわりと瞳が虚ろになったと思うと、そのまま横倒しに床に崩れそうになるのを、ユーノは歯を食いしばって引き寄せた。

「レス！ レスファート！」

「いたい……よお……ユーノお…」

「もう……、ばか…っ」

しゃくりあげながらすがってくる体を抱き寄せ、抱き締める。

「わかったから……もう動かないから……心を離して」

「……ほんと……？」

「うん、約束する」

「ん……」

荒い呼吸を繰り返しながら朦朧としているレスファートと一緒に、そろそろとベッドに横になった。

その胸にレスファートがそっと額を押し付けてきながら訴える。

「ぼく…ユーノとはなれるの……いや……ぼく……ユーノがすきだから………おいてかないで……一人でいかないで…」

「……レス…」

それはあの『太陽の池』の時でも、これまでの旅の日々の中でも繰り返し誓われてきたことば、ユーノの脳裏にレクスファの城で、レスファートに捧げられた剣を受け取った瞬間が甦る。

『レスファートの名をオンミにささげます』

自分の名前を他人に捧げる。

それはまさに相手の人生とともに背負う、そういう意味ではないのか。

(私は)

とんでもないものを君から受け取ってしまったんだ。

ユーノは今改めて、あの時のイルファの動揺、レダト王の逡巡を理解したような気がした。

レスファートはまだ幼い。いずれは自分の全てを賭けて恋うる相手もでてくるだろう。レクスファの皇子として、国民の願いと祈りを一身に引き受ける責務に思い至る時も来るはずだ。

(それまでは)

そうだ、それまでは、ユーノがこの少年を守護する責任があるのだ。

(それが名前を捧げられた者の責務、だよな)

アシャへの想いをセレドとレアナを思って沈黙したように、激情に駆られ重荷に焦る不安を、吐き散らし周囲を巻き込むのではなく、自らに抱え自らの器に封じ込むこと。

(そうだ、しのげ)

戦え、自らの傷みと。

(こんなところで果てる場合じゃないだろう)

まだ先は長いんだ。

一つ大きな深呼吸をする。痛みばかりだと思っていた体に、新しい血が流れ始めた気がした。

「ん…ふ」

胸に甘えていたレスファートが少し落ち着いたのか、ごしごしと手の甲で涙を擦りながら体を起こす。

「ごめん、レス」

無茶をしないようにする、なるべく。

「なるべく？」

ユーノのことばにレスファートは軽く唇を尖らせたが、それでも一つうなずいて、

「ぼく、顔、あらってくる」

照れたように笑ってベッドを滑り降りた。

「でも、うごかないでね？」

「わかった」

お手上げ、と両手を軽く上げてみせると、レスファートは嬉しそうに笑って部屋を出て行った。入れ替わりにハイラカがひょいと戸口から覗き込む。

「大丈夫？」

「ああ、うん」

「朗報だよ」

お兄さん達が無事帰ってきた。

「よかったね」

微笑むハイラカに、ユーノは久しぶりに晴れ晴れと笑い返した。

十数日後。

「ハイラカたち、どのへんまで行ったかな...」

「ガズラは出てるさ」

「ふうん」

ガズラの次は、えーと、と地図を思い出しながら指を折るレスファートを見下ろして、アシャは微笑む。

夕食後の静かな宵、清冽な外気、細かな貴石を散らしたような星空の下、虫（シエト）の声が草むらの中から聞こえてくる。

背後で静かに扉が開く音がして、振り返ったレスファートが出て来た人影に嬉しそうな声を上げる。

「ユーノ！ もう歩けるの？」

アシャもそちらを振り返る。

人影はまだどこかぎこちない動きで二人の方へゆっくりと近づいてきた。

「もうほとんどね。明日には出発できるよ。心配かけてごめんね、レス、アシャ」

「ぼくはユーノがいてくれればいいの」

レスファートが甘えてユーノに身を寄せるのに、アシャは笑う。

「ユーノをちゃんと寝かせておいたのはレスの手柄だな」

「うん！」

「ああいう脅迫は初めてだったよ」

「ふふっ」

ユーノが苦笑するのに、レスが自慢そうに鼻をこする。

「その腕で、イルファも慰めてやってくれる？」

「イルファ？」

「首飾りが見つからなかったから、アレノに完全に振られたって落ち込んでるんだ」

「ん、わかった！」

なんだ、それじゃまだまだ下心十分だったんじゃないか。

密かに呆れながら、アシャが家に入っていくレスファートを見送っていると、

「ごめん、アシャ」

低くユーノが謝ってきて振り返った。

「ボク、まだ、子どもだね」

まばゆそうにアシャの視線を避けて俯きながら、ユーノが小さくつぶやく。

「一流の剣士なら、自分の体ぐらい自分で面倒みなきやいけない.....自分が果たす責任ぐらい、ちゃんとわかってなくちゃいけないのに」

いつもいつも気持ちが先走って、あなたやみんなに迷惑ばかりかけてる。

「.....お前は責任を背負い込み過ぎだ」

アシャは苦笑を深めた。

「責任を果たすことと無茶は違うぞ」

「うん、剣士失格だよ」

しょんぼりして肩を落としてしまうユーノの、滑らかな首筋が夜闇の中で薄白く浮かび上がる。襟元からはまだあてられたままの包帯が覗いている。

（もう少しで失うところだった）

アシャの手の届かない場所で、骨となって朽ち果てるまで打ち捨てられるような惨い死に様を晒させて。

（二度とこの手に触れられないまま）

手を伸ばしたのは意識していなかった。けれど肩に触れた瞬間、その温もりを離したくないという

思いしか頭になかった。不審そうに見上げるユーノを一気に腕の中に引き寄せ、抱き込み、ほっとする。びくりと震えた相手の耳に、静かに熱く囁きかける。

「どこまで心配させれば気が済む」

「あ、しゃ…」

「何と言えば、俺の側に居る？」

凍りついて竦むユーノの、慌てふためいたように走り出していく鼓動が自分の胸に伝わってくる。

生きている。その鼓動の何と快いことか、その温もりの何と愛おしいことか。

「…や…」

小さく拒む相手の動きを封じて、ユーノの髪に唇を押し付け、柔らかな匂いに酔う。小刻みに震え出すユーノに、今このとき、怒りにまかせて一刀両断されても悔いはない、そう断じた自分の心の緩さに苦笑する。

（媚薬を吞ませるか、呪術を使うか）

恋の手管など覚える必要さえ感じなかったのに、手足を竦めてアシャに抱かれることに怯えている相手の不安をもっと煽って、是否もなくこの身に崩れ落ちさせたい。

（それでもできることなら）

ユーノの誇りを保ったまま、アシャを望んでいる、そう告げられたいのは傲慢か。

薄く眼を開け、眉を寄せて目を閉じているユーノの首、包帯の上に唇を落とそうとした、その矢先。「アシャあ！」

ばむっ、とぶち抜かれそうな勢いで扉が開いて、さすがに手が緩んだ。

その一瞬の間を見逃すようなユーノではない。とっさに腕から飛び離れたユーノが、一瞬泣き出しそうな顔でこちらを見返し、すぐにくるりと身を翻す。

引き止める間などなかった。飛び出してきたイルファと入れ替わりに家の中に姿を消してしまうのを、アシャは茫然と見送る。

「なんだ？ 抱擁が欲しいのか？」

アシャが差し出していたままの両手に気づいて、イルファが同じように両腕を差し伸べながらぬっと前に立つのに、うんざりして腕を下ろした。

「……ちっ」

（こいつはどうしていつもいつも）

胸が寒い。腕が寒い。失ってしまった温もりが恋しい。

「ちっ？ 何がちっ、なんだ？」

「何でもない」

目をぱちくりさせるイルファに仏頂面で応じた。

「ユーノと何かあったのか？」

（何かあるはずだったんだ、それをお前が）

「何でもない」

ののしりたくなかった自分に、強いて相手に顔を振り向けた。

「それより、何だ、急用か？」

「おお、それだ！」

せっかくのいい雰囲気壊した責任はとってもらうぞと殺気を込めて頷けば、イルファは大きく頷き返した。

「実は、俺は本気でアレノに惚れていた！」

「……ああ、そうだな」

どこか偶然を装って、この男の頭に落とせる岩はないだろうか。

煮え詰まったアシャの想像をよそに、イルファは顔を紅潮させて続ける。

「あの女性こそ、俺のために降臨してきた女神だと信じていた！」

「.....」

「だが！ あの女性には既に恋人がいた！」

ぐっとイルファはこぶしを握って天を見上げた。

「だが、俺だって男だ、潔く諦めて、アレノに幸せになってもらえればと、首飾りを探しに湖にまで潜った！」

「.....」

そんなことは俺だって知っている、というか、なぜ今更そんなことを延々と俺に。

「だが、ああ、なんたる運命の悪戯だ、首飾りを見つけたとたん、湖が荒れ、俺は首飾りを見失い、ついに再び探し出すことはできなかった！」

がっくりとイルファは首を落とす。

(なるほど)

それなら少しは俺にも関係があるか。

アシャは僅かに肩を竦める。

彼が『運命(リマイン)』と熾烈な闘いを繰り広げたせいで、湖の水はあの水盤から吸い出されて蒸気と化し、おかげで湖の水位は著しく下がり、水が泡立ち、底の泥までかき乱されたい。回復には数年かかるとの話だが、浅くなった湖の底に沈んでいた宝物をこっそり持ち帰る不逞の輩も出沒し、聖なる湖はあっという間に混沌の俗界に堕ちたのだが。

(あのとき、首飾りを見つけていたのか)

そうと知っていても、あの時のアシャは制御する気はなかっただろう。

「アレノは俺を見切った。俺のせいではないと弁解しても無駄だった.....おい、聞いているのか？」

「聞いているよ」

さすがに少々居心地悪く頷き返す。

「しかし、俺はアレノを愛し続けようとしたんだ、報われないと知ってはいても！」

再びイルファは顔を天に向け、苦悶の表情よろしく眉を寄せた。

アシャは溜め息をついた。アレノの気持ちは自分にはない、それでも自分には真の愛がある、そうイルファが言い続けてもう数日たつ。ユーノの体調が戻っても、イルファをここへ残して出発しなければならないかと考え始めていたところだ。

「だが！」

「ん？」

いきなりイルファがくると顔を戻して満面笑みとなり、アシャは瞬きした。何か新展開があったらしい。

「レスが俺に希望を与えてくれた！」

「レスが？」

微妙に不安になったのは気のせいかな？

「アレノは、お前に似てるんだ！」

アシャの体から気力が一気に抜け落ちた。

「俺の真の愛は、つまりお前を通して満たされるということだよな！」

「レスう.....」

一体何の恨みがあって、そんなむちゃくちゃなことをこの男に吹き込んだ。

「これが万事良しだ、わはははは！」

ぐったりしたアシャと上機嫌のイルファの足下で、虫(シエト)が再び澄んだ声を響かせ始めた。

5.ソクーラの貴婦人

空は、澄み渡ったその蒼い天蓋の端に、にじみでるような薄紅を宿しつつあった。

くすんだ緑色の短い葉を持つテップの草原にはそよとも風が吹かず、真昼の熱気を未だに立ちのぼらせている。

「ソクーラまで、あと、どのくらい？」

かなりぐったりしたレスファートが、のろのろとアシャを振り仰いで尋ねた。笑んだアシャが、
「もう少しだ。ここまで来たんだから、頑張ろうな」

少年を励ました。

「う...ん。でも、おしり、いたあい」

くすくす笑い出してしまったユーノは、レスファートの恨みがましい目に睨まれて、口元を引き締めた。

「ごめんね、レス、そりゃ疲れるよね、丸一日馬だったから」

「.....」

力なくこっくりうなずいて、レスファートはアシャの腕に身をもたせかけた。

「ソクーラは有名な商業の中心地だし、ネデブとともに織物でも名高い。食料と布地も少し買い込んで...」

「金はない」

「え？」

ユーノはぎょっとしてアシャのことばを遮ったイルファを振り向いた。

「ないって.....どういうことなんだい、イルファ？」

「ないから、ない」

イルファはぼそりと応えた。相手のいかつい顔に広がる満足げな顔を眺めて、ユーノははっとする。

「イルファ.....ひょっとして、出てくる時、アレノに渡していた金細工の首飾り...」

「うむ、あれはいいものだったぞ。値段にしては出来がいい」

「まさか」

茫然としたユーノにかわって、アシャが問い正す。

「値段にしてはって、あれに全部使ったのか?!」

「アレノを慰めるものとしては、あれ以外にはなかったのだ」

「おいおい...」

「イールファ.....」

ユーノは深く溜め息をついた。

確かにイルファがアレノにベタ惚れだったのは知っているが、ここまでとは思っていなかった。

「ソクーラを迂回することって、できる？ アシャ」

「できんことはないが」

アシャは渋い顔で眉を寄せた。

「三倍は時間がかかる」

「かかりすぎるよ」

「だが、町中で野宿を繰り返すわけにはいかないぞ」

何せ商業の盛んなところだから、それなりによそ者や不審者への警備も怠りない。宿に泊まる旅人ならまだしも、空き地や空き家を探して点々と動いていくのでは盗賊集団の下見と間違えられかねない。

「男は金のことでごたごた言わんものだ」

イルファがぶすりと言い放った。

「何とかなる」

何を揉めているのだと言いたげな表情に、思わずユーノは突っ込む。

「へええ、食べ物なしで？ イルファは二日に一回の飯で耐えてくれるわけ？」

「む！」

ようやくそこに気づいたようにイルファは目を見開いた。

「そうか、町中で狩りをするわけにはいかんか」

「もう少し早く気づいてほしかったよ」

ユーノは唸った。

「頼むから、飼ってあるティサやクイルなんかを狙わんでくれよ」
胸に抱え込める愛玩用の小動物の名前を上げたアシャに、
「いや、ティサは食うところがないだろう」
「論点が違う」
「クイルは手触りはふかふかしているが、肉は苦いと聞いたぞ」
「そういう問題じゃない」
イルファの反論をアシャと交互に封じたものの、とにかく金銭がなくては町中ではしのげない。
「どうしよう、アシャ」
「仕方ない...ソクーラの外縁を回れば、獲物も多少はあるにはある.....しかし、この辺りは雪白（レコーマー）が.....」
「アシャ？」
ふいにとんでもなく奇妙な表情になってことばを切ったアシャが、珍しく口ごもりながら続ける。
「そう...だな.....。金なしでも...無理して外縁を回らなくても.....行けることは行ける、が...」
「どうやって？」
吞まず食わずで行ける不思議な薬でも持っているのか、それとも、と問いかけたユーノの声を、レスファートが遮った。
「ユーノ、見て！」
さきほどまでのくたびれた様子はどこへやら、馬の上で伸び上がり、斜め前方を指差して歓声を上げる。
「すごいのが来るよ！」
「すごいのか？」
そちらへ目を向けたユーノは、一瞬、白い湖が草原を埋めていこうとしているのかと思った。
くすんだ緑の地平をじわじわと、白いふさふさした毛を波打たせた動物が数百頭もいるだろうか、こちらへゆっくり向かってきているのだ。
群れのところどころに、馬に跨がった身軽そうな男達がいて、その動物を一つの方向へ誘導するように、群れの回りを走り回っている。
ミアアアア、という妙に透明な悲しげな声を一頭が上げると、残りのものも一斉に声を上げる。
その声はどこか音楽的な調和を保ってユーノの鼓膜を震わせ、心に静かな安らぎをもたらした。
「雪白（レコーマー）だ」
声が途切れるとアシャがぼつりと言った。
「雪白（レコーマー）？」
「ああ、牧獣だよ。あの毛から糸が紡がれ、有名なソクーラの光沢のある生地になる」
「噂には聞いていたが」
イルファが感に堪えたようにつぶやいた。
「これほどの規模のものとは思わなかったぞ」
「この群れは小さい方だな」
アシャは押し合いへし合いしながらものんびりと歩を進めてくる白い絨毯を眺めていたが、突然ぎくりとした顔になって、そろそろと首を縮め馬を後じさりさせた。
「アシャ？」
「あー、ちょっと、その、だな」
ユーノが首を傾げるのに、さっきと同じ奇妙な表情を浮かべたアシャが微妙に顔を伏せがちになったとたん、
「アシャ！」
「え？」
群れを制御していた騎馬の男の一人が、朗々と響く声を上げて駆け寄ってくる。
「アシャではありませんか！」
「知ってる人？」
「.....まあ、な」
レスファートの問いに曖昧な笑みを浮かべたアシャは、諦めたように男が馬を走らせてくるのを待った。

男は立派な鞍飾りをつけた馬に茶色のチュニツク一枚という軽装で跨がっていた。黒い髪に深く澄んだ青い目が印象的だ。

「やっぱり、アシャですね」

物怖じせず快活な明るい声をかけながら近づいてくる。それに小さく溜め息をついて、アシャは笑みを浮かべた。

「お久しぶりです、エタ王子様」

「王子！」

レスファートの呆れ声に苛立った様子もなく、エタはあははは、と声を上げて笑い、ユーノ達を見回した。

「構いませんよ、ぼくは王子には向いていないらしいですからね、姉君の言うところによると」

それから意味ありげな視線をアシャに向け、

「どうしていきなり姿を消したんです？ 姉君の悲しみようといったら.....雪白（レコーマー）達を全部布地にしてしまいかねない勢いでしたよ」

「すみません。だが、私はラズーンの名のもとに」

「旅に身を委ねるアシャ、でしょう？ わかっていますよ」

エタは再び朗らかな笑い声を上げた。そして、改めて馬を寄せてきているユーノ達を見回した。

「ところで、この方達は？」

「ああ.....私の今の主人とその兄上です。こちらがイルファ、こちらがユーノ、そして」

「アシャ！」

レスファートを紹介しようとした矢先、当のレスファートが緊迫した声で叫んだ。一点を見つめて、

指差し叫ぶ先に、どうしたのだろう、一頭の雪白（レコーマー）が群れを離れ、凄まじい勢いでトップの草波の中を走っていく姿があった。ついていた男達は残った雪白（レコーマー）の動揺を防ぐので手一杯、とてもそれを追うどころではなさそうだ。

「まずいね」

「ユーノ！」

状況を見て取ったユーノは、とっさに馬首を巡らせ、アシャの制止の声を振り切って離れて走る雪白（レコーマー）を追って馬を駆った。

ふさふさした毛に空気を含んででもいるのだろうか、風に煽られなおふくふくと毛を膨らませながら、馬の首回りまである巨体が速度を緩めることもなく走り続けている。

（どうする？）

とっさに追いかけてはみたものの、怯えて遁走する動物をなだめる方法などは知らない。

少しずつ、少しずつ、ヒストの速度を上げていきながら、ユーノは雪白（レコーマー）の横へ馬を並べていった。

激しい息づかいが空気を響かせ伝わってくる。雪白（レコーマー）の額の中央にただ一つの眼、毛に隠れてあまり見えないそれを横目で捉えながら、手綱を握りしめ、雪白（レコーマー）とびったり横並びになる。

雪白（レコーマー）の、人知れぬ湖のように暗い青の瞳がちらりとユーノを見た。一瞬怯えを浮かべたが、ユーノもヒストも共に走るだけだとわかったのか、そのまま走り続けている。

ユーノは僅かにヒストの速度を落とした。

「落ち着いて.....何もしないよ」

ささやきが通じるとは思えないが、声をかけながら静かに速度を緩めていく。

つられるように雪白（レコーマー）が速度を緩め始めた。ちらり、ちらりと気遣わしげにユーノを見つめながら、ヒストと横並びになるのを選ぶように走る勢いを抑えていく。

（ようし）

ユーノはそのままヒストの進路を僅かに変えた。群れの進行方向と遠くで重なるように誘導する。雪白（レコーマー）はやはりヒストとユーノを横目で見ながら、僅かに方向を変え始める。

（いいぞ）

かすかに微笑んで、ユーノは今度はじわりと雪白（レコーマー）に近づいた。雪白（レコーマー）が逃げる。だが、激しく荒々しい息を吐いても、走り去っていかうとはしない。ヒストを寄せる。なお軽く逃げる。ヒストの速度を落とす。つられるように走る勢いを殺していく。

（もう少しだな）

ユーノは猛るヒストが走りたがるのを抑え、速度を落とさせながら雪白（レコーマー）の進路を遮り、群れへとぐいぐいねじ曲げていく。全力で走り続けて疲れてもきたのだろう、雪白（レコーマー）の毛が汗でもつれて灰白色の塊になり始めているのが見えた。呼吸もかなり荒いようだ。

やがて、がくんと目に見えて速度が落ち、雪白（レコーマー）はやがてトコトコと軽い並足程度になった。ユーノを暗い青の目でじっと捉えながら、何かを言いたげに口を動かす。ユーノがヒストで群れへと寄せるのにも、もう逆らわなかった。移動しながら近づいてくる群れにふいに気づいたように、のろのろとヒストを離れて群れの中に戻り、あっという間に呑み込まれていく。

ミアアアア。

はぐれた雪白（レコーマー）の帰還を喜ぶようにいたわるように群れから声が上がって草原に響き渡った。

「綺麗な...声」

綺麗で悲しげな声。

じんわりと押し合いへし合いしながら離れていく雪白（レコーマー）達を見送りながら、ユーノはヒストを止める。

もっと、と言いたげに首を振るヒストをなだめていると、

「本当に...なんて、脚だ！」

ようやく追いついてきたエタが、吹き出た汗を片手の甲で拭いながら感嘆を漏らした。

「馬も良いが.....あなたは『風の申し子』の一族ですか？　まるで、あなた一人が風を守られているようだった！」

「でしゃばったことをしました、すみません」

ユーノは謝った。多少息は切らせていたが、汗はほとんどかいていない。

「いや助かりました、本当に。時々ああやって暴走し始めるが、それに刺激されて一斉に群れが走る時もある、そうなるともう、お手上げなんですよ、『風の申し子』ぐらいしか止められない」

エタが溜め息まじりに肩をすくめる。

「『風の申し子』とは？」

「ああ」

王子は、また、らしくないあっけらかんとした笑みを返してきた。

「数日前に、王家の雪白（レコーマー）遣いに加わった男です。見かけは優しいんですが、馬と雪白（レコーマー）の扱いときたら一級品でね、人を捜しているとかで、見つかるまで王家で雇うことになったんです。『風の申し子』とあだ名で呼ばれています」

「ほう」

いつの間にか、側にやってきていたアシャの目の奥で鋭い光が走ったのを、ユーノは見逃さなかった。

（彼も視察官（オペ）なのか？）

捜している者とは、それでは『銀の王族』だということだろう。

（一体、どれぐらいの数の視察官（オペ）が諸国に散っているんだろう。それに、何のために、そこまでして『銀の王族』を集めていく？）

それはユーノの心の片隅に置かれている消えない問いだ。

「.....喜びますよ」

物思いから覚めると、エタが嬉しそうにアシャに話しかけていた。

「ソクーラを通るんでしょう、アシャ。是非、宮殿の方へ来て下さい」

「そう、ですね」

あまり乗り気ではない顔で、相談を持ちかけるようにユーノを振り向いたが、金のことやレスファートの体調のことなどを考えたのだろう、渋々といった様子でうなずいた。

「そうしましょう」

「有難い！」

エタが無邪気に笑った。

「姉君が喜びます！」

宮殿に招かれて、ユーノ達は早速に各々部屋をあてがわれた。

「どうぞ、この部屋をお使い下さい」

「は、い」

いささか宮殿の豪華さ壮麗さにあてられた気分だ。

「必要なものは遠慮なくおっしゃって下さい。すぐに揃えさせます」

「ありがとうございます」

「それでは、後ほど」

エタが足取り軽く立ち去っていくのに、部屋の中をぐりと見渡して溜め息をつく。

「凄いな」

磨き抜かれた高価な石板を、床、壁、天井と惜しげもなく使っている。壁石を支える支柱には、腕のいい細工師が彫り込んだらしい香木の細かな浮き彫りがところどころに飾りとしてはめ込まれており、灰色の石板の表面には繊細な色遣いで一刷毛二刷毛描かれたような宝石がちりばめられていて、互いに反射しあって輝き、まばゆいほどに美しい。

部屋が冷たい感じにならないようにとの配慮からだろうか、それとも季節の移り変わりで冷え込む時があるのだろうか、おそらくは雪白（レコーマー）の極上の毛から織り上げたと思われる壁掛けが周囲の壁を覆い、床には数百人が通っても擦り切れることがないような、分厚い色鮮やかな敷物が広げられている。

明かりは壁に埋め込まれた鈍い茶色の燭台に太い蝋燭が灯されていて、部屋の隅々まで明るく照らし出されている。

部屋の中央にどっしりした石の机が一つ、その上には瓶に入った酒と金属製の杯が置かれてあり、やはり手の込んだ彫刻を表面に散らせた椅子が三脚、備えられていた。

埃に塗れた自分の体でこんなところへずかずか入っていいものだろうか。

少し恥ずかしく思いながら入り口に立っていたユーノは、壁掛けの一つに目を奪われた。

「これは…」

雪白（レコーマー）の目を焼くような白さを下地にした作品、すらりと立つ一人の貴婦人の姿だ。

白い面に柔らかな笑みを浮かべ、身に纏った純白の衣、こちらを向いた陰影の濃い、彫りの深い顔立ちは見事なまでに整っている。美しいだけではなく神々しい。ふいに跪いて許しを請いたいような思いに駆られる。

（何を許してもらおう？）

己の心を偽っていることか？ 多くの命を奪い続けていることか？

（それでも、私は）

こうして生きてくるしかなかった、それはそうなのだ、でも。

胸の奥にちくりとした傷みがみるみる内側に広がって、ユーノはにじみそうになる視界に唇を噛んで耐えた。

「その方は、ソクーラの『貴婦人』……私達の主でございます」

「！」

突然、自分の他には誰もいないと思っていた部屋の、それも背後からいきなり声が響いて、ユーノはびくりとした。さりげなく振り返りながらも、つい、長剣に手が伸びる。

「あなた様のお世話をさせて頂くよう申し付けられました。ミノ、でございます」

薄物を肩から流し、色鮮やかな衣を身に着けた少女が優雅に一礼する。それからゆっくりとユーノの側に歩み寄り、どこかほにかんだような内気な笑みを浮かべた。

「どうぞ」

おずおずと両手をさしのべる。

ユーノは相手の意図を察して苦笑いした。

確かに招かれた者として、これは失礼だ。

腰の剣を外し、ミノの手に乗せ、安心させるように話しかける。

「ボクはユーノ。アシャ達はどこにいる？」

「皆様のお部屋でお世話させて頂いております」

「そうか」

「『貴婦人』をご覧になっていましたね」

剣を、何か禍々しく恐ろしいもののよう急いで薄物の中に包み込んで抱き、ミノが尋ねる。

「『貴婦人』？」

「はい...こちらへ」
先に立って部屋を横切りながら、
「エタ様のお姉君、ソクーラの『貴婦人』、エリエとマイルの娘、メーネ様です」
そこまで聞いて、ようやくユーノは壁掛けの女性に思い当たった。
ソクーラのメーネ。
セレドのレアナと並んで美の頂点と語られる女性だ。
セレドの夜会でも、誰がこの世で最も美しいかという話になると、旅人が必ずメーネの名前を口に
した。
『いや、それでもレアナほどのものはあるまいよ?』
『お父様、お酒を過ぎされましたね?』
納得しかねるセレド皇をレアナが嗜め、笑いが起こる。賑やかで華やかな夜の宴、その中にはおら
れなくとも、温かな笑い声に心はしばしのくつろぎを得た。
「...」
沸き起こる郷愁にユーノは軽く首を振った。
(私らしくもない)
「さすがに疲れてきた、のかな」
つぶやいて小さく息をつく、
「こちらへどうぞ」
ミノが振り返りながら、部屋の片隅に掛かっていた、重そうな深緑の垂れ幕を上げた。
後に小さな潜り戸がある。そこを開くと、柔らかな熱気が部屋に零れて、ユーノは首を傾げて近づ
いた。
「お入り下さいまし」
そこは湯浴み場だった。
例の石板を床に張り敷いた浴槽があり、その周囲に薄物一枚を身に纏った、四、五人の半裸姿の娘
達が控えている。まろやかな肩や胸、腰などが湯気の立ちこめる中に淡く透けていて、夢のように美
しい。
「お召し物を」
ミノの手が背後からチュニックにかかって、ユーノはぎょっとした。
「え、あ」
「お脱ぎ下さい。お手伝いいたします」
「いや、その」
うろたえるユーノにお構いなしで、ミノは丁寧に、けれど断固としてユーノの体から衣服を剥ぎに
かかる。
「ちょっと」
慌ててユーノは身を引いた。
「え...?」
ミノは困ったようにユーノを見上げる。宮殿へ招かれた客に供されるもてなしの一つ、それをなぜ
ユーノが拒むのかわからないと幼い顔立ちが訴えている。
「何か失礼なことをいたしましたでしょうか」
不安そうに唇を開いた。
「ミノがお叱りを受けるべきことでしょうか」
「いや、そうじゃなくて、実は」
(ええい)
言いよどんで、ユーノは思い切った。
「ボクの体には山ほどの傷があってね」
何でもないことのように笑ってみせながら、袖を捲り上げてみせる。肌に食い込むように白く引き
攣れた無数の傷跡に気づいて、ミノが目を見張る。
「あまり人に見られたくないんだ。湯浴みなら一人で入りたい。いいかな」
「あ、はい!」
ミノは急いで手を叩いて娘達を下がらせた。まだほんの少女のように見えても、そこは宮殿の客
人の世話を任せられる地位にいるもの、娘達がすぐに頭を下げて姿を消す。

「これでよろしゅうございますか」

ミノもお手伝いはできないのでございますね、と念押しすることも忘れなかった。

「うん、すまないね」

「とんでもない」

深々と頭を下げながら、

「お召し物は頂いて汚れを落として参ります。お着替えはご用意いたしております」

「あ、でも」

「どうぞ」

それぐらいはさせて下さいませ。

訴えるような視線で見つめられて、ユーノは頷いた。ほっとしたようにミノが部屋の隅の木箱を示す。

「お召し物はそちらに。姿見はそこにございます。御用がありましたら、いつでもお呼びくださいませ」

「ありがとう」

「...では、失礼いたします」

ミノは部屋の片隅の薄い垂れ幕を示した後、もう一度深く頭を下げ、深緑の垂れ幕をかきわけ、出ていった。

「ふ、う」

（どうなることかと思った）

それを見送って溜め息をつき、ユーノはチュニツクを一気に脱ぎ捨てた。旅の汚れか、埃が舞い上がり、ばらばらと足下に泥が落ちる。

（ひどい格好だったな）

もう一度溜め息をつき、下着も脱ぎ落とし、まとめてミノが示した木箱に入れた。

浴槽に近づくと、ぷんと微かに香料の匂いがした。見ると、湯の中に花びらが数片浮いている。

「いい匂い...」

確かにセレドでも香料を入れた湯を用意することはあるが、これほど香り高いものではない。

そのまま入って湯を汚してしまうのは忍びなくて、手近に置かれていた容器に湯を汲み、数回浴びてからすると浴槽に滑り込んだ。

「ん.....」

中心に向かって深くなっている浴槽、湯はじんわりと体を胸下あたりまで包んでくる。ぱりぱりと細かな痺れが走るような感覚に身を委ね、しばらくじっとして体の隅々まで滑らかな感触が覆うのを味わった。湯に慣れるとそっと中央へ動き、肌にまとわりつく花びらの明るさに見とれていると、緊張し、しこっていた疲れがゆっくりと流れ出して溶けていくようだ。

（気持ちいいな）

そっと湯を掬って、頭から被った。ざぶりと閉じた瞼の上から流れ落ちる湯に一瞬外気を遮断された息苦しさ、続いて熱が汚れを洗い落とす爽快感に息を吐く。

「は...あ」

両手で髪の毛をかきあげ、撫で下ろし、濡れて首筋に張り付く髪を摘んだ。

（もっと短く切ってしまおうかな）

男にしては少し長過ぎるかもしれない。今のままでももちろん、ユーノを女性だと考える者はほとんどいないのだが。

（何も.....考えずに）

ユーノは目を閉じた。

髪から首筋、肩から胸へと撫で下ろす自分の指先が、幾度も波打つ皮膚に触れる。そのたびに、ちくりちくりと、傷の痛みではない切なさが胸を刺す。

（何も考えずに）

普通の娘であれば。揺れる故国にも、父母の後で身をひそめていられる娘であれば。剣など使えない娘であれば。

（せめて花でも似合え、ば）

目を開き、漂う花びらを湯ごと掌で掬い上げる。花びらには触れないように、それでもその湯で自分を飾るように、そっと頭から被ってみる。

花びらはすぐに流れ落ちた。

髪に残っているかと探ったが、普段はあれほど跳ね返って始末に困る髪なのに、濡れている今は花

びら一枚もとどめていないらしい。

「ふ…」

(救いようがない)

苦笑し、両目を両手の甲で押さえる。現実の視界が消えるのと入れ替わるように、ふいに自分を抱き締めたアシャの温もりが甦る。

髪に触れたのは、もしかして、唇、だったのだろうか……？

でも。

なぜ…？

「っ！」

首を一つ強く振って、ユーノはもう一度ぎぶぎぶと湯の中で顔と髪を洗い、体を擦り、湯から上がった。

香料にあてられたのか、少し動悸がして息苦しい。

雫を滴らせながら薄い垂れ幕を上げ、用意されていた布で体を拭いていると、姿見が視界に入った。一瞬ためらったが、全身を映す鏡など、セレドでは見たことがない。

そろそろと全裸のままで、その正面に歩み寄った。

「……」

まるで白い紐を埋め込んでいるような、全身を覆う傷の跡。鞭打たれた罪人を見たことがあるが、それでもここまで酷く全身に刻印されたような傷はなかった。柔らかな膨らみを、滑らかな曲線を過り、縛り、時に押し開き、不格好に寄せたように見える傷跡は、一つ一つ覚えがある。皇宮の陰で、郊外の草原で、廃墟の暗がり、そして誰一人援護のないまま走り抜けた闇の道で、必死に生き延びてきた記憶だ。

「ん？」

じっと傷を目で追っていたユーノはふと眉をひそめた。

(ガジェスの時の傷がない？)

痛みに疼いていた腹の辺りを探り、目を凝らして覗き込み、腰を捻って繰り返し眺め、ようやく、他の傷とは全く違って一本の細い絹糸のようにになっている傷跡に気づいた。

「なに…？」

はっとして、ゼランに裂かれたはずの傷も探って、体をねじ曲げて眺めてみる。確かに指先には微かに触れた、だが、腰あたりまでまっすぐに伸びているはずの傷は、それと知らねばほとんどわからない状態になっているようだ。

(アシャ……何を……した…？)

あれだけの傷を、ほとんど跡を残さずに治す医術師など聞いたことがない。

(これも、ラズーンの技術、なのか？)

アシャが担っている視察官(オベ)の技は、これほど諸国と格段に差のあるものなのか。

(こんなに綺麗に治るならきつと、他の傷も…いや、この先どんな傷を受けても)

「っ」

迷路を探るように少し興奮して治った傷を撫でていたユーノは、突然指を止めた。

鏡の中に立つ自分の、胸や肩、腰や脚に焼き付けられているような、ひきつれた傷跡を見つめる。

アシャの手によって治療された傷が目立たなさは、他の無数の荒々しい傷跡に呑み込まれてわからない。

「一本や、二本、わからなく、なったって…」

胸が絞られた。

唇を噛む。両手を鏡に当て、その間に頭を落とし、こつん、とぶつけてみる。

(何の意味がある、これだけみつともない、体の中で)

吐きかけたことばを呑み込んだ。唇を開き、そっと笑う。

「アシャ……あなたって……時々ひどく、残酷だ」

掠れた声でつぶやいた。

深緑の布に金糸と銀糸の縫い取りのある長衣をはおり、アシャの着替えは済んだ。首元と袖口から覗いている銀の下衣に苦笑する。

（相変わらず派手な好みだ）

休養と湯浴みですっかり生き返った気がしたが、容貌によく映えるその装いを少々疎ましく感じた。第一、この衣の重さでは剣もろくに振り回せないだろう。

長剣は長衣の中で腰に吊っている。ソクーラの『貴婦人』に謁見するのに無礼だとは思ったが、『運命（リマイン）』に追われ、カザドにも狙われ、しかも無鉄砲な主人を抱える身としては仕方がない。

衣の他にも深緑の飾り紐と銀の鎖を編んだ髪留めが用意されていた。『貴婦人』らしい心配り、それとなくアシャを忘れてはいないと示されているようだ。

伸びて目にかかる髪を半分だけ上へ跳ね上げ、髪留めで頭を巻いてとめておく。

姿見の中に映っているのは、どう見ても宮殿の中しか知らぬ優男だ。薄く笑んだ唇が妙に艶やかで悩ましいが、殺気立った紫の瞳はそれを裏切る鋭さ、それらがあやしい釣り合いを保っていてただ者に見えない。

小さく舌打ちして、アシャは片手で目を覆った。

いつの間に、こんな、本性を晒すような目を見せていたのだろう。ユーノを守ろうとする旅が、ついついアシャの中の炎を煽り立てていたのか。

たおやかで柔らかな外見を否定する中身を見せていたことより、それを見せていると自覚がなかったほうがまずかった。溜め息をついて、気を緩め、殺気を消し去り、緊張を押し込める。

人々の中でアシャが自分の派手派手しい見かけと折り合いをつけるための処世術、それを見抜いた人間はそれほどはいなかったが、『貴婦人』は感じていた。

『行くのですね、アシャ』

穏やかな日々に唐突に持ち出した別れのことばに、メーネはたじろがなかった。静かな確認は、アシャの成り立ちを推し量る賢明さがあった。

『遠い所へ』

それが自分から離れるということだけではなく、生きていく場所もお互いの側ではないのだとわかった上のことば、それを背中にアシャはこの国を離れた。

金がなくなったと聞いた時、メーネのところへ来れば、金も食べ物も休める場所も手に入るとは思いついたが、『貴婦人』の気持ちを考えると頼る気にはなれなかった。離れていた年月の間に、彼女の気持ちが変わってくれればと思っていたが、この衣類の整え方を見る限り、それは叶わないことだったようだ。

『アシャ』

甘い声音を耳に、瞬きをして手を外し、もう一度姿見の中を覗き込む。

瞳の炎は消えていた。女性的な顔立ちに優しい微笑を浮かべた男が立っている。悪意も害意もないが、かといって、その他の感情が見えるわけでもない。

「よし」

くると姿見に背を向け、垂れ幕を上げ部屋に戻り、そのまま部屋から出た。

同じ長衣だったとしたら、ユーノはきっと手こずっているだろう。手伝ってやらなくてはな、と正直なもので気持ちが弾む。

比較的長居をしていた宮殿だから、ユーノがいる場所もすぐ見当がついた。

「確かにこの辺りにも客室があったな」

部屋の配置も変わっていない。世界の変動はこの国にはほとんど届いていないようだ。

「こちら辺りか」

立ち止まったアシャは低く声をかけた。

「ユーノ？」

「はい？」

まるで待ち構えていたように扉が開いて、見覚えのない幼い少女が顔を出した。アシャに気づき、一瞬で真っ赤な顔になって、そのままぼんやりと見惚れてしまう。

アシャは微かに咳払いした。我に返った娘がますます赤くなり、慌てて頭を下げる。

「も、申し訳ございません！」

「構わないよ。ユーノはここだろうか？」

「は、はい。ただいま湯浴みを終えられ、お支度中でございます」

「そうか。入るよ」

「は、い」

何か言いたげな視線を背中に感じながら、アシャは垂れ幕の外から声をかけた。

「ユーノ？ 着替えは済んだか？」

「アシャ...助かった」

ほっとしたような声が応じた。

「ちょっと来てくれよ、この上着ったら」

(やっぱりな)

アシャはにやにや笑って垂れ幕の端から滑り込んだ。

「アシャ」

姿見の中から彼を見つけたらしいユーノが振り返った。

淡いクリーム色の衣が細身の体に巻き付いている。しなやかな生地が胸の膨らみも滑らかな腰から脚への曲線も浮き彫りにしていることにも気づかない様子で、手にした濃紺の長衣の始末に困りきった、そういう顔で近寄って来る。

「どうにかしてよ。これ、どうやって着るんだい？」

「これはな」

ふわりと甘い薫りが漂ってどきりとした。思わず口を噤んで、その香りを吸い込む。ユーノの髪の毛いだろう、しっかり拭き切れなかった髪が、細いうなじに絡み付いている。

「アシャ？」

「あ、ああ、つまり」

沸き起こりかけた衝動と、ユーノの首から無理矢理目を逸らせる。

「ここに隠しボタンがあるんだ。ここを外してから前を開けると、ほら、な？」

「あ、そうか」

「腕を出せ」

「うん」

細い腕が長衣に差し込まれた。濃紺の長衣の裾には銀の縁取り、金色の花が模様を組み合わされている。ただでさえ細身の体がどっしりとした長衣に包まれて、一層華奢で脆そうに見えた。思わず相手を覗き込み、動きを止める。

「お前...泣いてたのか？」

みるみる赤くなる、そのユーノの黒い瞳がまだ濡れているように見える。睫毛も濡れたままのようだ。ほんの一瞬、切ない表情がユーノの顔を掠めた、と見る間に、相手はアシャの手を振り払うように垂れ幕の辺りまで逃れていた。

「なんでボクが泣かなきゃならないんだよ？」

怒ったような口調で言い放ち、軽く下唇を噛む。その後、妙に静かな声で、

「それとも、アシャにはボクが泣くようなわけでも思いつくってわけ？」

そう言われると、思いつかない。

「...いや」

「だろ？」

肩を竦めて見せて、ユーノはにっこり笑った。

「レスを迎えに行ってくるよ。イルファもね」

引き止める間もなく、ユーノの姿は消えていた。

ソクーラの貴婦人との謁見の瞬間、ユーノは与えられた部屋にある真っ白な壁掛けが、そのまま動き出したような錯覚に陥った。

「アシャ……久しぶりですね」

玉座に座ったメーネ、ソクーラの『貴婦人』は、純白の衣に金糸銀糸の花を散らせたものを纏っていた。流れる髪は甘く優しい茶色、瞳は人の心にしみいるような深い青だった。

「はい」

拝跪の礼を取ったアシャが相手を見上げて、憎らしいほど鮮やかな笑みを見せる。

「突然姿を消したことを、さぞかしお怒りだと思っておりましたが……私は旅に身を委ねるもの、一所に留まれぬのが生業」

「わかっています」

メーネは寂しげな笑みを頬に広げた。

「しかし、そのあなたが、今はその少年に仕えているとのこと」

幾分皮肉の混じった声で続ける。

「はい、確かに。彼が、今は私の主人です」

「そうまでして、あなたが守る絆とは何ですか、アシャ」

メーネは満足げなアシャの声に興味をそそられたようだった。皮肉な響きは消えている。同じく片膝をついていたユーノは思わず肩を震わせる。

「私の覚えている限りでは、あなたは誰ともそのような絆を結びはしなかった。あなたはいつも、諸国を巡る旅人だったはずではありませんか」

「……」

ユーノがちらりと横目で見やると、アシャは曖昧に微笑んでいる。

「我らはラズーンへ向かうのです、姫君」

メーネの美しさにぼうっとしていたらしいイルファが、ようやく口がきけるようになったのか、野太い声で答えた。

彼が身に着けているのは赤銅色の長衣、袖口と裾に銀糸の縫い取りがある。

「ラズーンへ？ あの、世の中心のラズーンですか？」

「そうです」

イルファは得意気に胸を張った。

「世界の中心を一目見たいと、旅に出たのです」

「その旅に、アシャ、あなたが？」

「はい」

イルファが余計なことを言う前に、と思ったのか、アシャがことばを引き取った。

「私が諸国巡礼の旅人ならば、これに優る旅はございますまい」

「確かにそうです、しかし…」

メーネはまだ納得しかねた様子だったが、エタの快活な声に遮られた。

「姉君、もういいではありませんか」

エタは、玉座の横の椅子に、濃い紫の長衣の正装で控えている。

「アシャ達は長い旅の途中、ならば、その旅がうまくいくように、数日間の憩いと慰め、十分な食べ物と休養、さらなる旅への支度を整えてやるのが、よく知った昔なじみというものですよ」

言いながら、アシャにいたずらっぽい目配せを送ってきた。

「そう、ですね」

メーネはほんのりと頬を染めて頷いた。自分の執着の仕方がおかしくなったのだろう、美しい唇に笑みを浮かべて、

「特に、そのお小さい方」

「ぼく、『オチイサイカタ』じゃありません、レスファートです」

空色の明るい長衣を着たレスファートが不服そうに応じる。

メーネはくすりと笑って頷いた。

「レスファートも疲れているでしょう。夜会の間に床の用意をさせますから、ゆっくりお楽しみなさい」

メーネの声を合図に、待ちかねたように、ぞろぞろと入り口から人々が入ってきた。こちらへ、とメーネに招かれるままに、ユーノ達は玉座の近くへ寄り、広間がみるみるより華やかに賑やかにざわめきを増すのを見守った。

着飾った貴族達が居る。威厳ある大臣達も居る。軍属だろう目つき鋭い男達、初めての夜会なのか緊張した顔の娘達。

「凄いな…」

さすがのイルファが感嘆する。

広間の回りを取り囲むように並べられたテーブルには、もう料理が溢れんばかりに載せられているのに、まだその上にも料理人達が食べ物を盛り上げた皿を掲げて次々と列をなして入ってくるのに、イルファが溜め息をつく。

「菓子もありますよ、レスファート」

メーネが優しく言った。

「はい、ありがとうございます」

レスファートの頬も上気している。

楽士達が呼ばれ、音楽が始まり、人々が踊り始めた。酒や料理に気持ちが解れ、広間が熱気に満ちていく。

それまであれやこれやと四人の話し相手を務めていたメーネが、頃合い良しと見たのだろう、柔らかに促した。

「さあ、どうぞ。好きなものをお楽しみ下さい」

「では！」

イルファが真っ先に料理に突進していった。目をつけていたのか、カーノの丸焼きにかぶりつく。カーノは数が少ない小さな鳥で、肉は柔らかく独特の風味があり、かなり高価な料理とされている。

「ユーノ！ こっち！」

はしゃいだレスファートがユーノの手を引いた。色鮮やかな菓子が盛られたテーブルにユーノを導こうとする。

「どこが子どもじゃない、だよ、ねえ、アシャ…」

ユーノはアシャに苦笑を向けて、相手が背後からメーネに呼びかけられて立ち止まったのに気づいた。親しげな甘えるようなメーネの瞳は、レアナより、レスファートより、彼女とアシャの距離の近さを思わせる。

（何を話しているんだろう）

「……私には、関係ない、か」

軽く唇を囁んで自分に言い聞かせ、ユーノはレスファートの後を追った。

「アシャ」

「はい、姫君」

柔らかな声が何を尋ねようとしているのか、おおよその察しはつく。

「あなたは、いつも私をそう呼んでいましたね」

アシャが振り向いた先でメーネは瞳に微かな憂いを浮かべている。

「あの時の問いは、まだ答えられませんか？」

メーネは片手を差し伸べた。その手を受け止め、踊る人々の中へアシャがメーネを導いて入っていくと、周囲はその二人の美しさにざわめき、しばし踊りが中断する。

懐かしい、何度もあった穏やかな光景。

「楽師！ 音楽を！」

エタの声に、我に返ったように曲が始まる。甘く切ない恋の歌だ。

恋よ、恋、わが胸に巣食い、何を欲してかくも育つか…。

「私は二つ問いかけました」

メーネはアシャに思い出させるように言った。正確な足取りで踊り続けながら、

「一つは、あなたの心を溶かす乙女はいないのかという問い」

さらりとアシャは髪を払って、メーネを振り向きつつすれ違う。

「もう一つは、あなたの旅の意図は何なのかという問い」

メーネがアシャとの間に開いた距離を埋めようとするように、体を寄せて見上げてくる。

「三つめの問いを付け加えましょう。あなたの旅はラズーンに深く関係しているのではありませんか」

「『貴婦人』」

アシャは苦笑した。

「一つめの答えは『いる』です」

迷いのない口調にメーネが衝撃を受けたように顔を強張らせる。

「それは.....いえ、その方との絆なのですか、あなたを引き止めるのは」
ためらいながら、なおも確かめる声、昔からそうだった、穏やかで柔らかな見かけと裏腹に、メーネははっきりとした問いと応えを好む。
「おそらくは」
「.....二つめは？」
アシャの答えに一瞬瞳を閉じ、けれどすぐに次を迫る。
「三つめも合わせ」
アシャは相手の青の瞳に見入った。美しい青だ。雪白（レコーマー）を擁する豊かなこの国で、敬意と忠誠を捧げられるにふさわしい気品、その瞳を望まない男は数少ないことだろう。
「ご推察の通り、と申し上げておきます」
メーネが瞳を陰らせた。
「あなたは聡明な方だ。私がこれ以上お話しするまでもなく、ラズーンの状況をお察しのことと思っております」
「では、やはり、ラズーンの支配力は衰えつつあるのですね」
アシャは頷き、それ以上は口にしないように、と無言で制した。
憂いに沈んだ顔もまた美しく、メーネは静かに俯いた。
「できることならば、私が、その乙女でありたかったのですが.....」
掠れた声でつぶやく。
「さぞかし美しい方でしょうね」
ユーノ・セレディスが美しさでここまで名前が響くとは思えない。となれば、メーネの考えているのがレアナであろうことは容易に想像がついた。
だが、アシャはあえてそれを正さなかった。
ユーノだと告げて、メーネを納得させられるとは思えない。
なぜ彼女なのか、そう問われても、アシャに答える術はない。
美しくはない。愛らしくはない。素直ではない、華やかではない、甘やかでもない。
(なぜ魅かれるのか)
同情だと言われるのは不愉快だ。気の迷いだと論されるのはなお堪え難い。ましてや、自分の方が明らかに愛されるに価すると、メーネに言わせるのは怒りさえ覚える。
(なぜユーノなのか)
恋よ、恋、わが胸に巣食い、何を欲してかくも育つか。何を願ってかくも猛るか。
(なぜ)
それは俺にもわからない、ただ。
(ユーノでなければ)
心が動かなかった。
(ただ、それだけ)
それだけの理由を、おそらく『貴婦人』はわかろうとはしないだろう。
曲が終わった。
「しばしの憩いを、私の側で」
メーネが愛情に満ちた礼を送ってくる。
「深く感謝します」
しばしの眠りを、あなたの側で。
本来ならばそう返すことばを謝意に変えて応じ、アシャはメーネの側から離れた。

(こういう席になると、すぐに消えてしまう)
アシャは人の間を縫って、絡み付くような娘の視線から紛れ込むように移動しながら、ユーノを探す。
(いつも、どんな気持ちでレアナ達のドレス姿を見ていたのだろう)
アシャの脳裏に、華やかな夜会が続く広間の外、カザドの襲撃に神経を研ぎすませて、じっと闇を凝視しているユーノの姿が浮かんだ。
(着飾った娘達を横目に、傷を受けながら一人で戦って)
ユーノはドレスを着たくなかったのだろうか。一度ぐらいいは、その広間で、光を浴びて楽しみたいとは思わなかったのだろうか。
夜会は苦手なのだと青白い月光の中で笑っていたのが、ついこの間のことのようだ。

(外、か)

思いついて、アシャは身を翻し、広間の外のテラスに出た。

いた。

テラスの端に、その身を影に溶かすようにして、ユーノが一人佇んでいる。物思いにふけているようでもあり、心ここにあらずといった具合でぼんやりしているようでもある。

しかし、うすぼんやりと闇の中に浮かんでいる顔は、妙に寒々とした孤独の色をたたえている。暗く虚ろな目が痛々しいほどの不安に閉ざされている。

しばらく無言で見守っていると、ユーノは少し身動きして、テラスに腕を載せ、その上に自分の頭を預けた。

それは疲れ果てた人間の仕草に他ならない。ぐっすり眠る事を許されぬ者が、ほんのひと時、偽りの休息を貪るようにも見える。

(ユーノ)

この娘に、誰が、これほどの孤独を強いたのだ。

熱く滾る心で考える、だがそれはすぐに己の出自へと問いが戻る。

(ラズーンか？ 結局はラズーンの支配の緩みがそうさせたのか？)

それはつまり、アシャの責任ということ、でもある。

(ならば)

今ここで、この俺がその責任を果たそう。

揺れ動く世界の動乱にユーノの盾となり剣となって、彼女を守り、彼女を安らがせて、無事その願いを全うさせてやればいい。

(セレドの平安、そのちっぽけな願いを抱えるあいつのために)

悩ましく眉をひそめ、今すぐユーノに走り寄って抱き締め、その耳元で誓いを立てたいという想いと戦う。

それはついこの間の出来事、堪え切れず、抱き締めてしまった時の、ユーノの目を思い出したせいだ。

どうしてだ、と問いかけ詰る、黒い瞳。

怒りと困惑、そこに恥じらいと微かな歎びを見て取ったのが、自分の男としての傲慢だとはわかっている。

(あれはきっと)

ユーノの心の中へいきなり無遠慮に踏み込んできたことへの抗議だったのだろう。

(だが、ユーノ)

アシャは一步、足を進めた。

(一人で苦しむな。自分を追い詰めてしまうな。俺が居る。おまえの側には俺が)

気配に気づいたように、ユーノがふいに顔を上げた。振り向いて、アシャが居るのにぎよつとした顔になる

「アシャ…」

その顔で、アシャの気持ちはたちまち萎えた。

メーネを袖にしても、いささかも揺らがなかったしたたかな気持ちが、だ。

「…やあ」

「…気づかなかった、全然」

それが衝撃だったように、ユーノはつぶやいた。

「いつから、いたの？」

不安げな声音。

自分の存在が愛しい娘を不安がらせている、その皮肉に傷つく心を押し殺して、アシャは穏やかに笑ってみせた。

「つい今、来たところだ」

「そう」

ほ、と小さく息を吐く相手に、こっちも溜め息をつきたくなる。

(俺ではだめだ、そういうことか)

側に居て安らげる相手ではない、そう伝えられたようでがっかりする。

背後の広間で無作法な大声が響いた。酒が入って、いつもより無礼講になったイルファの声だ。

「アシャーっ、どこだーっ、俺の美姫はどこだーっ」

「っ」

あらあら、と貴婦人達の笑い声とがやがやしたおしゃべりが続いて、なおぐったりした。

「イルファが呼んでるよ？」

加えてユーノが早く行け、と促した気がして、思わず相手を軽く睨む。

「なに？」

「...なんでもない」

あの酔っぱらいをおさめてくる、これ以上派手なことをしないうちにな。

言い捨てて、アシャはこの鬱憤を晴らす相手を誰にするか思いついて、足音高く広間に戻った。

(メーネを除いて、ここで一番綺麗なのはアシャだな)

イルファの上機嫌によほど苛立ったのだろう、肩を軽く怒らせて広間に戻っていくアシャに、ユーノは苦笑する。

(深緑の衣がよく似合ってる.....本当に、きれい)

その衣を用意した女性は、そこまでアシャのことをよく知っている相手なのだと思います、なるほどそういう相手の居るところに、自分達のような仲間では立ち寄りたくなかったかもしれないとまで思い。

「は...」

小さく溜め息をついた。

「レアナ姉さまなら.....恥ずかしい思いはしなくて済んだ、のかな」

つぶやいて切なくなり、目を閉じて眉を寄せる。

「ユーノ」

「っ」

すぐ近くで声が聴こえ、慌てて目を開けた。

いつの間にそこに居たのか、メーネがすぐ側に立っていた。慌てて拝跪の礼を取ろうとしたユーノを軽く制して、メーネは低い声で続けた。

「尋ねたいことがあるのです、ユーノ」

「何でしょうか」

「アシャのことです」

思わず体が震えた。自分の気持ちを見抜かれたような緊張でメーネのことばを待つ。

「アシャはずっと気ままな旅人でした」

メーネは見入られそうな、青の瞳でユーノを見据えた。

「どんな見返りを約束しても、この地には留まろうとはしませんでした」

その見返りに、きっとこの美しい女性との夜も入っていたのだろうな、とユーノは思う。

「一体どんな絆があって、アシャはあなたに仕えているのですか？」

アシャに確かめていた応えでは納得できなかったのだろう、それとももっと深く知りたいと思ってしまったのか。

そこにメーネのアシャへの執着を読み取ってユーノは苦笑する。

(その気持ちはよくわかる)

「ボクが思いつくのは一つ、美しい乙女です」

「やはり...」

メーネは瞳を陰らせた。

「そなたはその方の名前を存じていますか」

(そしてまた、その名前を私に問う、か)

ユーノではないのだと、こうも繰り返し思い知らせる、運命の手。

「セレドの、レアナ」

胸が傷みに疼いた。

「セレドのレアナ...あの天上の神々に愛でられたように美しい、と聞く...」

メーネが僅かに声を掠れさせた。

「アシャはセレドでレアナを見たのです。そして、その美しさに一目で魅せられたのです」

自分で決るしかない心の傷。

どんなにレアナが美しいか、どんなにアシャがその美に魅せられたか、レアナがどのような信頼をアシャに向けたのか。ことばを尽くして、ユーノはメーネを説得する。

「そう...あの方なら.....アシャが魅せられるのもわかります」
　　メーネはやがて静かな諦めをたたえた声で応じた。
（あの方なら.....わかります）
　　ユーノも心で繰り返す。
　　誰もが認める、その存在。
　　ユーノの自虐に、それでも堪えていた傷口が、メーネの一言でぱくりと口を開ける。心の虚ろな空間に、どんどん傷みを伴った何かが滲み出してくる。
「けれども、どうして、あの方とあなたが？」
　　どのような関係があるのですか。
　　無邪気なメーネの問いはユーノの心をなおも傷める。
　　レアナとどんな関係があるのか、身内だとも思ってもらえない、この容姿。
「.....ボクの姉です」
「姉？でも、セレドには皇女が三人、皇子は一人もいないはず...、」
　　つぶやいて、メーネははっとしたようだ。改めて、ユーノを上から下まで見つめる。
「あなたは.....ユーナ・セレディス、ですか？」
　　久しぶりに聞いた自分の名前は、今これほどまでに苦い。
「ええ。わけあって、こういう服装をしています」
　　寂しく笑ったユーノに、メーネは何かを感じ取ったようだ。
「哀しい想いを抱えていらっしゃるのね」
　　ユーノは無言で頭を垂れた。
　　そうだ、いつそみっともないだの、レアナの妹とは思えないなどと嘲ってくれればいいのだ。
　　そうすれば、ユーノにもメーネを詰る理由ができる。この美しい女性が、見かけだけの美しか持たず、その内側は真っ黒なのだと嗤うこともできる。外見に騙されているアシャの愚かさを嘲ることもできるかもしれない。
　　だがしかし、メーネもまたレアナ同様、外見と同じく、いや外見より遥かに輝く内面を抱いていて。
　　ユーノに残るのは圧倒的な敗北感しかない。
　　レアナやメーネの光に照らされて、むしろいじけて醜い自分の姿を見せつけられる思いがするだけだ。
　　唇を噛んで俯いたユーノの頭を、メーネはそっと引き寄せ、自分の胸に抱きとめるように抱えた。
「くつろいでいかれるといいわ。旅は.....哀しい想いを抱いたままの旅は辛いものですから」
「『貴婦人』...」
（そして、あなたもまた、柔らかな胸と温かな魂を持っておられる）
　　どこまでいっても、ユーノには勝ち目がない。
　　どこまで逃げても。
（逃げる...？）
　　滲んだ涙に、ふいにユーノは瞬きした。
（逃げる？　私が？）
　　セレドから出たのは、果てしない世界を目指したのは。
（レアナ姉さまから...逃げたかった、のか...？）
　　セレドを守るためでも、ましてや家族を愛するからでもなく？
「あれは...」
　　凍りついたユーノの耳に、不安げなメーネの声が響いて、緩んだ腕から顔を上げた。
「え？」
　　遠くから響いてくる地鳴りのような音。
　　それは昼間一度耳にしている、巨大な生き物が群れを為して大地を駆ける、深く重い振動音。
「あれは.....王の雪白（レコーマー）の群れだわ！」
　　何に怯えたのだろう、雪白（レコーマー）達は凄まじい勢いで宮殿に向かって突進しつつある。
　　それは夜目にも白く、月光を浴びて押し寄せる猛り狂った奔流のようだった。
「雪白（レコーマー）追いがいない...」
　　愕然としたようなメーネのことばが、妙にはっきりと響いた。